

2011 年度 修 士 論 文

森の幼稚園における自然とふれあうことの意味
The significance of interacting with nature in the
Waldkindergarten

東方 真理子
Toho, Mariko

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

目次

第1章 問題関心と先行研究	1
1.1.研究背景と先行研究	1
1.2.幼児期の環境教育	2
1.3.本研究の目的	4
1.4.本研究の意義	4
1.5.本論文の構成	4
第2章 調査方法	6
2.1.学部時での調査	6
2.2.予備調査	6
2.3.留学地での調査	6
第3章 ドイツの森の幼稚園	8
3.1.森の幼稚園とは	8
3.2.ドイツ全体の森の幼稚園の数	9
3.3.森の幼稚園の歴史	9
3.4.森の幼稚園の理念	11
第4章 ラインバッハの森の幼稚園	15
4.1.ラインバッハの森の幼稚園の概要	15
4.2.ラインバッハの森の幼稚園基本情報	15
4.3.ラインバッハ市の概要	18
4.4.ラインバッハの森の幼稚園があるノルトライン・ベストファーレン州の森の幼稚園	19
第5章 ラインバッハの森	22
5.1.現在のドイツの森林種別	22
5.2.ラインバッハ市が属する Rhein-Sieg-Erft 地方の森全体情報	24
5.3.ラインバッハ市の森の概要	26
5.4.ラインバッハの森の歴史	28
第6章 森の幼稚園の特徴	31
6.1.Förster とのかかわり	32
6.1.1.Förster	32
6.1.2.Förster の一日	33

6.1.3.Förster の仕事内容	38
6.1.4.ラインバッハの Förster の仕事内容	39
6.1.5.Förster になるには	40
6.1.6.Förster と森の幼稚園の関係	43
6.1.7.森の幼稚園の森の植生とあそび場	44
6.1.8.Förster と子どもたち	47
6.2.森を訪れる町の人々とのかかわり	49
6.2.1.レクリエーションを楽しむ人々	50
6.2.2.学校の生徒	51
6.2.3.散歩をしているお年寄り	51
6.2.4.おはなしのおばあさん	52
6.2.5.森の近くで働く人々	53
6.2.6.クリスマス時期の森の幼稚園	54
6.2.7.地域社会の連携	57
6.3.不確実な自然	58
6.3.1.天候の変化	58
6.3.2.危険から身を守る	60
6.3.3.植物との出会い	62
6.4.動物との出会い	63
第 7 章 環境教育と森の幼稚園	67
7.1.環境教育の歴史	67
7.1.1.環境教育の国際的な動き	67
7.1.2.日本における環境教育	69
7.2.環境教育とはなにか	73
7.3.森の幼稚園とエコロジー	75
7.3.1.エコロジーの言葉の歴史	75
7.3.2.エコロジーとはなにか	76
7.3.3.森の幼稚園におけるエコロジー	76
7.4.森の幼稚園における自然とふれあうことの意味	79
7.5.森の幼稚園が環境教育に果たす役割	81
謝辞	83
【参考文献】	84
【参考パンフレット】	87
【参考ウェブサイト】	88

【付録資料】	1
・ラインバッハの森の幼稚園参与観察記録 1	1
・ラインバッハの森の幼稚園参与観察記録 2	37
・ラインバッハの森の幼稚園参与観察記録 3	63

第1章 問題関心と先行研究

1.1.研究背景と先行研究

近年において、大気汚染や水質汚染、森林破壊、異常気象など、地球規模での環境問題が著しく深刻化している。そのような問題を解決するためには環境教育が必要であるとされ、国際会議などでは生涯にわたる教育として位置づけられている。環境教育では、「人間と自然との関係、人間相互の関係を含めた生態学的関係を改善すること¹⁾」が重要であるとして、自然を理解するために「自然体験」をすることが必要であることが述べられている。

そのような自然体験ができるひとつの場として「森の幼稚園」というものがある。森の幼稚園とは一般的に、子どもたちが森などの自然のなかへ出かけていき活動する幼稚園として認識されている。2002年以降、日本でも森の幼稚園という言葉を目にするようになった。テレビや新聞、雑誌などでも紹介され、幼児期の環境教育として注目されはじめている。

日本では「森の幼稚園」に関する論文、しかも、森の幼稚園の核心に迫った論文の数は少ないが、研究論文として扱われるようになったのは、2002年頃からである。百合草禎二は森の幼稚園という名前をタイトルとして学術論文を執筆した、おそらく日本で最初の人物である。ドイツの『森の幼稚園』の実践と子どもの発達 - 森の中で育つ子ども - と題して Ingrid Miklitz の "Der Waldkindergarten" という著作からドイツの森の幼稚園の名称、歴史、理念を紹介し、いくつかの森の幼稚園の HP から理念を抜粋し、紹介している (百合草, 2002)。Miklitz は、2002年にドイツにおける森の幼稚園の一般的な事柄を掲載した書物を出版し、2004年にその改訂版を出版している。この著作はドイツの森の幼稚園関係者、とりわけ、森の幼稚園実践者に広く読まれ、一般的な森の幼稚園のハウツー本として知られている。百合草は、幼児教育、保育の立場から、Miklitz の分析をもとに、「意図的に構造化された幼稚園の空間」と「自然に構造化された森の幼稚園の環境」が教師と子どもに与える影響を心理学的な面から分析しており、森の幼稚園では、子どもたちは教師の評価を気にすることなく内発的動機に基づいて行動することが可能となる、と述べている。木戸もまた、幼児教育、保育の立場から森の幼稚園をとらえ、森の幼稚園は、直接体験を通じた頭と心と身体のバランスのとれた発達、保育環境の中心が自然であることによる人とのつながりの増加、人生全体を視野に入れ、長いスパンで発達をとらえる保育が特徴であり、「バランス」、「つながり」、「全体性」の3点をあげ、森の幼稚園はホリスティックなものであるとしている (木戸, 2010)。

木戸の指摘のとおり、森の幼稚園の研究論文は、環境教育の視点からの研究が比較的多くおこなわれている。福田は「森の幼稚園と環境教育のかかわり」というタイトルで、書

¹⁾ 1975年の旧ユーゴスラビアのベオグラードでの国際環境教育専門会議である「国際環境教育ワークショップ(The International Workshop on Environmental Education)」で採択された「ベオグラード憲章」より

いており、2006年時点で70か所あるデンマークの森の幼稚園を訪れ、森の幼稚園は、子どもたちが五感を使って自然を体験すること、そして、そのためのプログラムの柔軟性を重視しているとし、森の幼稚園の五感による自然体験は環境教育において最も重要だとされる過程のひとつであると述べている(福田,2006)。また、関谷も環境教育が重要だという視点から、森の幼稚園は幼児期からの自然体験活動、森林環境教育を促す方法のひとつであるとしている(関谷,2009)。今村も、日本での森の幼稚園の現状と研究の状況をまとめつつ、森の幼稚園を市民活動としての環境教育としてとらえている(今村,2011a,b)。東方は森の幼稚園で自然とふれあい、かかわりを持つことは環境教育の視点からみたときどのような意味があるのかということ考察しようと試みているが、考察しきれておらず、十分ではない(東方,2004,2005)。以上のように、森の幼稚園は環境教育としてとらえられている。しかし、ここで、環境教育とは何か、ということをもう一度考えなおす必要がある。なぜなら、何をもって環境教育というのか確立されていないからである。上記の論文では、森の幼稚園を環境教育の視点からとらえていながら、環境教育に関しては、深く言及されていない。また、森の幼稚園のどのようなところが環境教育としてとらえることができるのかが定かではない。

1.2. 幼児期の環境教育

1972年の国連人間環境会議以降、さまざまな国際的な宣言等において、環境教育は生涯にわたる実施が必要であるとされ、その開始期は幼児期からあげられている。たとえば、1977年に出されたトビリシ勧告の環境教育のための指導原理のなかには、「環境教育は、就学前教育に始まり、すべての段階の学校教育、学校外での教育を通じ、生涯にわたって継続的に行われるべきである²。」とされている。

幼児期は生涯発達の中で様々な側面が急激に発達する特別な時期・人間形成の基盤が作られる時期であることから環境教育の開始期として示されてきた(井上,2009)。しかし、日本の環境教育の歴史において、幼児期が明確に意識されたり、その必要性が具体的に示されたりしたことはなかった(井上,2009)。環境教育の指針や環境施策・文教施策では、生涯にわたる実践の必要性が常に述べられながらも、開始期として幼児期が示されるだけで、幼児期の実践のあり方は具体的には示されてこなかった(井上,2009)。つまり、環境教育、特に幼児期の環境教育とは何かということは、今まで議論されてこなかったと井上は指摘している。そして、幼児期の環境教育を保育に導入させるためには、環境教育とは何かという本質的な議論が不可欠であると述べ、幼児期の環境教育とは、「幼児期の発達理解を元に、子どもの主体的な遊びを重視しながら、持続可能な社会形成につながる環境観を形成する営み」である(井上,2009)と、井上の環境教育の定義を述べている。「持続可能な社会形成につながる環境観」とは何であろうか、そこまでは明確には言及されていない

² UNESCO, Intergovernmental Conference on Environmental Education-Final Report, ED/MD/49, 1978.より

い。

地球規模での環境汚染や環境破壊が深刻となってきたなかで、1975年に旧ユーゴスラビアの首都ベオグラードで開催された環境教育国際ワークショップ（ベオグラード会議）では、世界各地の環境教育専門家が招かれ、国際的、全地球的レベルにおける環境教育についてのフレームワークであるベオグラード憲章が作成された。そこでは、環境教育の目標は、”To develop a world population that is aware of, and concerned about, the environment and its associated problems, and which has the knowledge, skills, attitudes, motivations and commitment to work individually and collectively toward solutions of current problems and the prevention of new ones³.”

「環境とそれに関連する諸問題に気づき、関心を持つとともに、現在の問題解決や新しい問題を防止するために、個人および集団で活動するための知識、技術、態度、意欲、実行力を身につけた人々を世界中で育てることである。」とされ、このために、認識、知識、態度、技能、評価能力、参加という6つの目的があげられている。

以上のように、環境教育の定義が考えられている。就学時以降の、特に学校教育における環境教育についてはさまざまな実践例や議論がなされてきている部分も多いが、日本においても、また各国の保育の指針においても、幼児期における環境教育の実践例や議論は極めて少ない。幼児教育のひとつである森の幼稚園と環境教育は、どのように位置づけられるのであろうか。それを考察するためには、環境教育と同じく森の幼稚園についても、森の幼稚園とは何か、ということを考え述べる必要がある。

森の幼稚園の先行研究を見る限りでは、子どもたちが自然の中で自然体験をすることが重要であることは、なんとなく読み取れる。しかし、森の幼稚園とよばれない幼稚園でも子どもたちが自然の中で自然体験をすることはおこなわれている。井上は、環境教育という分野から幼児期における自然体験を考えたときに、自然という概念のとらえ方が重要である井上（井上,2000,2009）と述べている。環境教育分野では自然の循環性や多様性、人間とのつながりなど生態学的なとらえ方が重視されるが、保育の分野では子どもの発達にとっての自然の価値は評価されても、生態学的な自然観は重視されない。子どもの発達にとって自然が重要であることは日本の保育では常に認識されてきたが、それは子どもの科学性や人間性を育てるためであり、持続可能な社会を形成するためではない（井上,2000,2009）、としている。自然のなかで過ごす、自然体験をするといっても、森の幼稚園の場合、どのように自然をとらえているのか、そして、何をもって森の幼稚園とするのかがよくわからない。ただ単に子どもたちを連れて森へ出かけていき、自然の中で活動することが「森の幼稚園」であるということはいえないのではないだろうか。今村は、何をもって「森のようちえん」と定義するのか、また、「森のようちえん」と称するにふさわし

³ UNESCO, HP

<http://www.unesco.org/new/en/education/themes/strengthening-education-systems/science-and-technology/>（2012年1月18日取得）

い活動とは何であるのか、そのような基本的な事柄が明白ではない（今村,2011a）と述べている。そして、そのような疑問に答える研究の成果や資料の数は少ない（今村,2011a）としている。この数年間において、日本でも森の幼稚園が注目されはじめ、研究論文も発表されはじめた。どの論文、文献においても、森の幼稚園で子どもたちが自然とふれあうことが前提として書かれているが、実際に自然とふれあうこと自体についての分析がなされていない。

1.3.本研究の目的

そこで本研究では、環境教育としての森の幼稚園が注目されはじめているなかで、ひとつの森の幼稚園を取り上げ、子どもたちがどのような自然のなかで、どのような自然とふれあっているのかということ进行调查し、その特徴から森の幼稚園の要素を導き出す。そして、その要素を分析し、森の幼稚園と環境教育がどう位置づけられるのかということ、また、森の幼稚園において自然とふれあうということはなにを意味するのかということ考察する。環境教育というものを問い直し、森の幼稚園が環境教育、また教育にとってなぜ重要なのかということを示し、今まで十分に議論されてこなかった幼児期における環境教育について、その方法、あり方を森の幼稚園から提示する。

今後、森の幼稚園は、ますます注目され、増えていくことが予想される。本論文は、森の幼稚園における自然とふれあうことの意味、つまりは森の幼稚園の要素を提示することによって、森の幼稚園の実践をより円滑にすすめることができることにつながることを期待するものである。

1.4.本研究の意義

本研究では、森の幼稚園を環境倫理的視点からとらえて考察することを試みる。先行研究においては、森の幼稚園を環境教育の視点からとらえているものがあるが、幼児教育学的視点はその要素として色濃くみられる。しかし、森の幼稚園の教育は幼児教育のみならず、教育にとって普遍的なものであると考えられる。そして、環境教育を考えたときに必要になるのは、ものごとを全体的に見る視点である。そのような森の幼稚園と環境教育をとらえるためには、人と自然、社会といった全体のなかで人の生き方を考えていくような環境倫理的視点が必要なのである。その意味で、環境教育や教育の本質を果たすであろう森の幼稚園の要素を分析し、導き出すという本研究は、今後の環境教育や教育全体にとって示唆を与えるものになりうるのである。

1.5.本論文の構成

本論文ではまず第 2 章には、本研究の調査方法として、森の幼稚園の長期的な研究活動内容について記した。第 3 章では、ドイツ全体の森の幼稚園について、歴史や理念など、森の幼稚園の一般的、基本的な情報を紹介している。第 4 章には、本研究の調査対象であ

るラインバッハの森の幼稚園の基本的なことをラインバッハの町の情報とともに記した。第 5 章には、森の幼稚園が実践されている森の背景を知るべく、ラインバッハの森の基本的な情報を記した。全体的な森の幼稚園の情報と調査対象であるラインバッハの森の幼稚園とその背景である森についての情報をもとに、森の幼稚園というものの概要を示す。

第 6 章からは、参与観察記録、聞き取り調査、文献調査をもとに、ラインバッハの森の幼稚園の特徴について説明し、それぞれが何を意味するのかということ进行分析する。

そして、最終章である第 7 章では、森の幼稚園の要素が環境教育とどのようにかかわってくるのかということについて考察する。まず、環境教育がどのように起こり、どのように進展していったのか、世界的な動きと日本的な動きを歴史的に述べ、環境教育の流れを概観する。次に、日本における環境教育を狭義の環境教育であることを批判しつつ、環境教育とはなにかということの説明し、環境教育の定義を試みる。そして、環境教育は、自然的環境、社会的環境、精神的環境の 3 つの視点から全体的にとらえるべきものであることを説明した上で、森の幼稚園と環境教育はどう位置づけられるかということを考察する。最後に森の幼稚園における自然とふれあうことの意味を述べ、環境教育や教育に果たす役割を述べる。

第2章 調査方法

2.1.学部時での調査

本研究の調査対象はドイツにある森の幼稚園である。筆者は学部時代にも調査対象であるドイツのラインバッハの森の幼稚園を訪問した。毎日森の幼稚園を訪問し、子どもたちや教員、保護者らと行動をともし、幼稚園での子どもたちの行動、会話、発言、様子などを時間ごとにわけ、事細かく記録した。約3ヵ月間の参与観察記録をとったが、卒業論文ではその参与観察記録を分析しきれなかった。本研究ではおもに、その参与観察記録をもちいて分析を試みる。膨大な記録のなかから、森の幼稚園の特徴と思われる場面に関する記録を抜き出し、その意味を考察している。

ラインバッハの森の幼稚園の3ヵ月間の参与観察記録は、付録資料として巻末に収録した。また、調査対象であるラインバッハの森の幼稚園とラインバッハについての詳しい内容は第4章と第5章で述べることにする。

2.2.予備調査

2009年8月から10月、11月から12月にかけて、予備調査としてドイツのラインバッハに滞在した。調査対象地であるラインバッハの森の幼稚園に通いながら、ここではおもに森の幼稚園の背景である森について調査した。

ラインバッハのFörsterを訪問し、聞き取り調査と資料調査を中心におこなった。Försterの官舎を訪問し、一対一の対面方式で資料や写真を見ながら森の制度や歴史、Försterの制度や仕事内容、森の幼稚園との関係などについての調査をおこなった。ラインバッハが属するノルトライン・ベストファーレン州全体にかかわる森の制度について調査するために、ボンにある森林局を訪問し、何人かのFörsterにも聞き取り調査をおこなった。

森の幼稚園以外の一般的な教育について、また、ラインバッハの町自体についての調査をおこなうため、ラインバッハ市役所の青少年課や教育課を訪問し、聞き取り調査と文献調査をおこなった。州や国にかかわる教育の法律や制度に関しては、インターネットで検索する方法と、文部科学省や農林水産省などにEメールでの問い合わせをおこなった。

2.3.留学地での調査

2010年10月から2011年9月までの一年間、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州の州都であるシュツットガルトにあるシュツットガルト大学社会学部に留学し、森の幼稚園の研究活動をおこなった。前半期間は社会学部の授業やゼミナールへの参加を中心に、おもに文献調査をおこないながら学生生活をおくった。

後半期間はシュツットガルト大学での担当教授から定期的なアドバイスを受けながら、フィールドワークに相当する科目を履修し研究活動をおこなった。ラインバッハの森の幼稚園に限らず、ベルリン、ボン、シュツットガルト、チュービンゲン、フロイデンシュタ

ット、ランゲンナーゲン（ボーデン湖付近）、イエナ、またスイスのチューリッヒにある森の幼稚園を訪問した。町のすぐ近くには Förster が管理している森があること、森の幼稚園は町の近くの森でおこなわれていること、森には近くに住んでいる町の人々がよく訪れるということはどこの森の幼稚園も同じように見受けられた。また、さまざまな地域の森の幼稚園を訪問することによって、地理的に広い範囲でのドイツ人の文化や日常生活にふれる機会を得ることができた。

バーデン・ヴュルテンベルク州全体の森の幼稚園連盟の理事長、ノルトライン・ヴェストファーレン州全体の森の幼稚園連盟の理事会の方と面談し、一対一の対面形式で聞き取り調査をおこなった。また、イエナという町で開催されたドイツの森の幼稚園の大会に出席し、森の幼稚園運営者、森の幼稚園連盟の理事会関係者、森の幼稚園の研究者らと情報交換をおこなった。

ドイツの森の幼稚園を社会的な側面から考察するために、ドイツの森の幼稚園の背景であるドイツ人の日常生活や文化などを体験した。森の幼稚園の子どもたちや先生などの家を訪問したりドイツ人学生と時間を共有したりしながら、ドイツ人の考え方や価値観を知ることができた。森の幼稚園がドイツ社会の中で、どのような仕組みや人に支えられて成り立っているのか、文化的背景はどのようなものなのかということについて、ドイツ人生活に実際に入り込んで調査ができたと思われる。

第3章 ドイツの森の幼稚園

3.1. 森の幼稚園とは

森の幼稚園の特徴や要素を浮き彫りにしていくために、まずは一般的に知られている森の幼稚園について紹介する。

森の幼稚園とは一般的に、雨の日も雪の寒い日も子どもたちと保育者が毎日自然の中（森）に出かけていくことが特徴の幼稚園である。1950年代半ばに北欧で形態的に始まったとされている森の幼稚園は、ドイツやスイス、近年においては韓国や日本などに広まっており、特にドイツでは急激に増加している。百合草（2002）の調査報告によると、2002年時点で320以上といわれていた森の幼稚園（百合草,2002）だが、現在、ドイツ国内だけで700⁴を超える森の幼稚園があり、今もなお増え続けている。森の幼稚園の入園希望者は多く、わざわざ森の幼稚園の近くに引っ越してくる家族もいるほどである。

森の幼稚園の説明として、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク（Baden-Württemberg）州の森の幼稚園連盟では、以下のように記している⁵。

- ・森と自然幼稚園(Wald- und Naturkindergärten)は、国に認可された幼児教育施設である。
- ・例えば、牧草地、浜辺、公園、野原幼稚園などがあるため、「森と自然幼稚園」という名前が選ばれた。
- ・この幼稚園の教育コンセプトは、子どもたちが、幼稚園の時間を通例、(たいてい) 野外の自然の中で過ごしているということである。森と自然幼稚園は、ほとんどが1つか2つのグループをもっており、それぞれのグループは15人から20人の子どもたちがいる。
- ・子どもたちは、2人の教員、そして、さらに1人の補助的教員によって世話をされる。
- ・毎日、自然の中にいることによって、子どもたちは、四季の変化を感じるようになる。
- ・異常な天候状況、寒さ、雷雨、嵐のために、木の小屋のような避難所がある。
- ・バーデン・ヴュルテンベルク州には現在、160のこのような幼稚園がある。そのうち、140の幼稚園がこの連盟に加入している。

このように、一般的に、森の幼稚園とは、「子どもたちが幼稚園の時間を自然の中で過ごす幼稚園」であるということが理解されている。

⁴ 2011年6月26日 Fachtagung des Bundesverbandes der Natur-und Waldkindergärten in Deutschland e.V. 25.-26. Juni 2011 in Jena 聞き取り調査より

⁵ 2009.01.Wald-und Naturkindergaerten Landesverband BW e.V

<http://www.waldkindergartenlandesverband.de> より筆者翻訳引用（2011年5月21日取得）

3.2. ドイツ全体の森の幼稚園の数

ドイツ国内で森の幼稚園が最も多く存在する地域は南ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク (Baden-Württemberg) 州である。森の幼稚園は年々増え続けており、森の幼稚園連盟に登録されていない幼稚園もあるため、正確な数を示すことができない。

表 1. ドイツ全体の森の幼稚園数 (筆者作成)

(Bekante Natur-und Waldkindergarten 20. Juni 2010. <http://www.waldkinder.de/> より)

2011 年 1 月 23 日取得)

ドイツ各州	森の幼稚園数	人口 (人)
Baden-Württemberg	102	10750000
Bayern	97	12526752
Hessen	68	6064000
Niedersachsen	66	7932000
Schleswig-Holstein	52	2831364
Nordrhein-Westfalen	39	17851000
Hamburg	17	1779140
Rheinland-Pfalz	13	4007000
Berlin	12	3444000
Brandenburg	10	2507700
Sachsen	6	4154000
Thuringen	6	2241000
Sachsen-Anhalt	5	2345000
Saarland	1	1020000
Mecklenburg-Vorpommern	1	1646500

3.3. 森の幼稚園の歴史

森のなかで自然とふれあう幼稚園は、どのように始まり、展開していったのだろうか。その歴史を整理していく。

ドイツで最初の森の幼稚園は 1968 年に Ursula Sube という女性がデンマークの森の幼稚園の存在を知らずにドイツのヴィースバーデン(Wiesbaden)という町に創設した。1968 年から 1998 年の 30 年の間、森の幼稚園を開園していた。彼女は就学期の子どもを持っていたが若くして未亡人となったため午前中に働き、午後は自分の子どもと一緒に過ごしながらできる仕事を探していたという。彼女の知人の牧師が小さな 4 人の子どもを預けられるような幼稚園探しに苦労していたこともあり、その子どもたちの保育を引き受けた。森

が近くにあったために午前中から子どもを連れて森で面倒をみるようになった。その後、周辺からの子どもたちが加わるようになって、1ヶ月後には12人、やがて25人の集団になっていった(百合草,2002,p.137;古賀,2006,p.8;関谷,2009,p.14)。

この森の幼稚園はWaldgruppe(森グループ)として1968年から地域の青年課に報告されている。当時の青年課の担当者は、この活動が既存の法基準の前提に照らすと承認されないことを知っていたが、禁止にすることもしたくなかったため、森の幼稚園を特例として黙認した。このため、1990年代に積極的に広報されるようになるまでは、できる限りひっそりと活動を続けたので、広く社会に認識されるには至らなかったようである。しかし、1980年代の終わりに青年課に新しい担当者がきたことで変化が訪れる。その新しい担当者は、これ以上森の幼稚園の活動の黙認を続けることは厳しいと考え、審査をするために期限付きで森のなかに活動場所を確保し、公的な団体を指名して一緒に活動をさせた。また、子どもたちの健康管理に関しても専門家と話し合いを持ち、活動に関してもSube氏と話し合いを持ったという。ところがこの行動が結果として、森の自主保育グループが私立幼稚園としてイニシアティブをとることを可能にしたのである。Sube婦人の活動に大変な感銘を受けた専門家たちは、彼女の功績を称えた。その結果、森の幼稚園は私立幼稚園として運営することを許可された。携帯電話を携行し、子どもの規模も15人を超えてはならないという制限があったが、引き続きWaldgruppe(森グループ)はその活動を続けることができるようになった。Sube氏の活動は1998年に後継の女性に引き継がれるまで30年間続けられることとなる(古賀,2006,p.9;関谷,2009,p.15)。しかし、当時はその新しい形式は広がりを見せなかった。

1991年、幼稚園の先生になろうとしているKerstin JebsenとPetra Jägerは、デンマークの森の幼稚園についての記事のある教育専門雑誌で読み、そこに紹介されていた思想や考え方と、自分たちの考える保育実践を求めるアルターナティブ(Alternative)な志向が一致し、彼女たちはデンマークの森の幼稚園を見学した(Miklitz, 2001)。

デンマークでは、1950年代半ばに、最初の森の幼稚園の生みの親となったデンマーク人のElla Flatauという女性は、毎日、自分の子どもを近くの森に連れて行ってあそばせていた。それを見ていた近所の人たちは、当時、幼稚園が不足していたということもあって、自分たちの子どももいっしょに預けて面倒をみてもらってはどうかと考えた。やがて彼女の周りに住んでいた子どもを持つ親たちは、自主運営による森の幼稚園を開園した(Miklitz, 2001)。

ドイツで初めて公認された森の幼稚園は1993年にフレンスブルク(Flensburg)という町に設立された。フレンスブルク市民の集中的な広報活動とたくさんの訪問客によって、そのアイデアはドイツ中に広がった。続いて1994年、Baden-Württemberg州に森の幼稚園が設立された。その主導者であるWaldtraud Mannaは先駆者として、当時、まだ懐疑的だったドイツの部署や役所に森の幼稚園を認めさせた。森の幼稚園の経営団体の多くは幼いころから子どもたちに自然とふれあわせ、自然の中でのびのびとあそばせたいと願う親た

ちがつくった団体であるが、自治体や環境団体などが経営者の場合もある。1996年11月にはドイツに「ドイツ自然と森の幼稚園研究会(Bundesarbeitskreis der Natur-und Waldkindergärten in Deutschland)」が設置され、その発展として、2000年10月には「ドイツ自然と森の幼稚園連合会(Bundesverband der Natur-und Waldkindergärten in Detuschland)」が創設された(Miklitz,2001)。

1991年の2人の女子学生の活動をきっかけとして、1993年からドイツ国内で発展してきた森の幼稚園の活動の広がり、Sube氏の自主保育グループの活動の流れとはまったく別のものである。Sube氏は教師としての専門教育も受けていなかったため、この活動は助成の対象とはならず、資金調達は両親の分担金で行われたために、この活動からは発展したイニシアティブは生まれなかったためである、と百合草は述べている(百合草,2002,p.137;関谷,2009,pp.16-17)。

このように森の幼稚園は、たまたま近くに森があったからという理由などで偶然的に始まったとされるために、始めは確固とした理念というものはなかったのではないかと推測される⁶。森の幼稚園が教育機関として発展していくなかで、それぞれの森の幼稚園の実践者が森の幼稚園の理念を確立させていった。では、森の幼稚園の理念はどのようなものであるのかをみていくことにする。

3.4.森の幼稚園の理念

Miklitz(2001,2004)は1996年に設立されたドイツのBad Liebenzellにある森の幼稚園の理念を自然は人生における、直接的な経験の場を提供するということを前提として10の視点をあげている⁷。

- 1.四季の変化(リズム)と自然現象を体験する。
- 2.自然を通しての運動能力促進。子どもたちは森で自発的にのびのびと行動できる。彼らによって身体的な可能性と限界を体験する。自然は運動するきっかけと可能性の多様性を備えてくれる。
- 3.五感の発達。子どもたちの五感—触覚、聴覚、嗅覚、味覚、視覚を通して何か伝わってくる。それは自然な環境の多様性にかなった細かさである。子どもたちの思考力は活発になり促進される。子どもたちは主に自主的に行動すること、試すこと、創造すること、体験することをとおして学ぶ。
- 4.個性の発達。運動能力の発達は理想的な条件の下でなされる。身体全体を使う積極的な行動のための空間は子どもを取り囲むからである。

⁶ 2011年2月3日バーデン・ヴュルテンベルク州森の幼稚園連盟理事長聞き取り調査より

⁷ Miklitz,I,2001. *Der Waldkindergarten*,pp.14-15,筆者翻訳引用

- 5.子どもたちは自分の願いに応じてそれぞれの活動、または観察に留まることができる。子どもたちは森で生活しながら徹底的な体験、思い出、自分と他のものとの同一視を重ねていく。
- 6.子どもたちのファンタジー（想像力）は存分に才能を伸ばすことができる。
- 7.“静けさ”を体験する。
- 8.火、水、空気、そして土は人が生きる基礎である極めて重大なものである。ヒョウ、雪、雨、霧などの自然との付き合いの経験は子どもたちの個性を豊かにする。そして、自分が自然の一部であることを認識し、自然への愛情が芽生える。
- 9.社交性、社会性を育む。グループのメンバーそれぞれが援助者と知識を伝える存在として問われている。互いに頼りあっている上での存在は、個人の社会的権限を強める。森の幼稚園では障害者も積極的に受け入れられる。また、目立つ行動をする子どもは森での新しい経験と体験に基づいて、彼らなりに新しい行動のパターンを見出すことができるチャンスがある。
- 10.新鮮な空気の中での運動は子どもたちの健康と免疫システムの強化を向上させる。生命の尊重や自分自身を理解することは、子どもの中の生命の感覚、親密さ、そして責任を呼び起こす。

また、他の森の幼稚園の理念を見てみると、以下のような理念があることがわかった。

ラインバッハの森の幼稚園⁸

- ・想像力と創造力の促進
- ・運動神経の発達と自信の促進
- ・感覚の発展の促進
- ・社会的行動、コミュニケーションと言語の促進
- ・攻撃的態度の減少の促進
- ・バランスのとれた食事と子どもの健康の促進
- ・学校での取り組みのサポート

ボンの森の幼稚園⁹

- ・実態経験
- ・全体の視点（全人教育）
- ・共感の教育

⁸ *Naturkindergarten Unser Pädagogisches Konzept*,2006,pp11-14,筆者翻訳引用

⁹ *Waldkindergarten In der Waldau, PÄDAGOGISCHES KONZEPT*,2009.p.2,筆者翻訳引用

- ・世界市民の教育
- ・批判のできる教育
- ・平和教育
- ・責任意識
- ・環境と自然とのつながり
- ・感受性
- ・活動性、自発性
- ・個性
- ・自分で見分ける能力

ベルリンの森の幼稚園¹⁰

- ・社会的行動能力
- ・言語能力
- ・幾何学形成の習得
- ・学校への準備
- ・想像力と創造力
- ・環境教育
- ・健康促進
- ・社会行動
- ・他の制度や組織との共同作業

ノルトラインベストファーレン州の森の幼稚園協会¹¹

- ・少人数のグループでより高い個人的な教育を可能にする
- ・森は、全体を学ぶことと生きる経験のための調和を提供する
- ・絶え間ない運動能力の促進
- ・子どもたちは、活動的、積極的になることができるし、ならなければならない
- ・グループのなかで子どもたちはお互いに頼っている
- ・身体感覚の獲得
- ・森の幼稚園は子どもと教員の相互を要求する

以上のように、いくつかの森の幼稚園の理念を見比べてみると、少しずつ理念が違うこ

¹⁰*Integrierter Waldkindergarten Waldmäuse Pädagogisches Konzept*,2008,より筆者翻訳引用

¹¹Landesverband der Waldbund NaturkindergärtenNRW e.V. *Handbuch Qualität im Waldkindergarten*,2007.pp.5-6,筆者翻訳引用

とがわかる。その中で、理念の前提に掲げられている理念が、バーデン・ヴュルテンベルク (Baden-Württemberg) 州の森の幼稚園連盟の説明にも記されているとおり、“dieses pädagogische Konzept dadurch, dass die Kinder die Kindergartenzeit in der Regel in der freien Natur verbringen. „「子どもたちが、幼稚園の時間を通例、(たいてい) 野外の自然の中で過ごしている」ということであるといえる。自然の中で過ごす、つまり、「自然とふれあう」ことが森の幼稚園の共通の理念であり、基本であることがわかる。

では、「自然とふれあう」ことが、森の幼稚園では具体的にどのようなようになされているのか、次章からは、本研究が対象とするひとつの森の幼稚園を事例としてとりあげ、詳しくみていくことにする。

第4章 ラインバッハの森の幼稚園

4.1. ラインバッハの森の幼稚園の概要

参与観察の調査対象である、ドイツのラインバッハの「森の幼稚園」は、ノルトライン・ベストファーレン(Nordrhein-Westfalen)州にあるラインバッハ(Rheinbach)市に存在する。

1996年初夏、ラインバッハの森の幼稚園の構想が立ち上げられ、1人の先生と5人の母親たちが1997年4月17日に親が運営する森の幼稚園を設立した。同年10月1日に1つ目のグループが始められ、2001年には2つ目の森グループが設立された。2002年に正式に認可された幼稚園に、2003年10月には室内グループも設置され、現在は、森グループが2つ、室内グループが2つから成る幼稚園になっている。

4.2. ラインバッハの森の幼稚園基本情報¹²

正式名称：

Elterninitiative Naturkindergarten e.V. Rheinbach

所在地：

Schweitzerstr.1

53359 Rheinbach

GERMANY

子ども数：

全体数：80人

1グループ：20人

森グループ：2グループ

ハウスグループ：2グループ

子どもの年齢：

3歳から6歳 自分でトイレに行けるようになっていること

子どものバランス：

グループ構成によってバランスをとるため、次に入ってくる園児は3歳か4歳か5歳の子どもが優先される場合がある。

¹² Elterninitiative Naturkindergarten e.V. Rheinbach, *Unser Pädagogisches Konzept* より筆者翻訳引用

性別：

1 つのグループの男女の人数はできるだけ同じ人数が望ましい。グループの構成によって、女の子、または男の子を優先する場合がある。

グループ構成：

それぞれのグループは3歳から6歳までの子どもたちが混合であり、男女、年齢のバランスがとれていることが望ましい。

開園時間：

- ・ハウスグループ 通常：8:00-16:00
- ・森グループ 月曜日から金曜日：8:00-13:00 月曜日と水曜日：8:00-16:00

ラインバッハの森の幼稚園の主なコンセプト：

- ・想像力と創造力の促進
- ・感覚の発展の促進
- ・運動神経の発達と自信の促進
- ・攻撃的態度の減少の促進
- ・社会的行動、コミュニケーションと言語の促進
- ・バランスのとれた食事と子どもの健康の促進
- ・学校での取り組みのサポート

森グループの持ち物：

- ・ **Buddelhose**(防水のつなぎのズボン)
- ・ 冬用つなぎのズボン
- ・ インナージャケット付きフリース
- ・ 雨用ジャケット
- ・ 冬用ジャケット
- ・ 防水帽子
- ・ ゴム長靴
- ・ 爪先が自由な靴下
- ・ 防水手袋（つなぎの手袋）
- ・ ミトン手袋
- ・ 予備の手袋
- ・ ブーツ、くるぶしソックス、爪先の自由な厚いソックス
- ・ ベルトがついているリュックサック（活動しやすくするため）
- ・ 敷物

- ・水筒
- ・弁当箱（朝ご飯用）
- ・毎日の朝ご飯、（甘いもの以外）

総会：

最低、年に一度、理事会を招集する。

- ・法定の変更
- ・協会の解散
- ・財務報告の承認
- ・選挙と役員解任
- ・会費の修正
- ・監査役選任
- ・予算の決定

決定は、法令の改正を除いて、保護者の単純多数決によって（3分の2）決められる。

会費／保護者の貢献：

会費：一年間で 34 ユーロ

グループの参加費：3 ヶ月で 230 ユーロ（兄弟がいる場合は 3 ヶ月で 184 ユーロ）

ラインジーク地域とラインバッハ市からの補助金：

人件費の大部分（約 96%）はラインジーク地域が負担する

ラインバッハ市は不足している支出総額の約 4%の金額を融資する

寄付：さまざまな機関、団体、個人から寄付を受けている。

保護者の役割：

森の幼稚園は園児たちの保護者が運営している。したがって、それぞれの保護者に役割がある。例えば、新しいメンバーの面倒をみることや、パウワージェンの修理の手伝い、祭りや他のイベントの計画、教育的なプロジェクトの手伝いなどがあげられる。

パウワージェンの役割：

ラインバッハの森の幼稚園の森グループは、建物がない代わりに、パウワージェンと呼ばれる小さな小屋が森グループにひとつずつある。

パウワージェンは、子どもたちがつくった工作物を保管したり、遊び道具なども保管している。また、春から秋にかけては、森で小学生、中学生が、よく、マラソンをしたり、他の活動をしてくるので、騒がしくなる。そんなときにはパウワージェンの中でお話しをした

り、本を読んだりする。また、冬はとても寒いため、朝ごはんを食べるときや、とても寒いときに避難小屋として使用する。

4.3. ラインバッハ市の概要¹³

正式名：Rheinbach Stadt

地域名：Rhein-Sieg-Kreis

州：Nordrhein-Westfalen

面積：6974ha(そのうち森が約 798.39ha) 森の割合 11.4%

人口：約 27800 人

市長：Stefan Raetz(CDU)

幼稚園数：17

森の幼稚園数：1

ラインバッハ市の位置は、旧西ドイツの首都であったボンから約 25 キロ南西にある。



図 1. ドイツ全体から見るラインバッハの位置

(<http://de.wikipedia.org/wiki/Rheinbach> より 2011 年 5 月 23 日取得)

¹³ *Die Stadt Rheinbach stellt sich vor*; 2008.3, Stadt Rheinbach.より筆者翻訳引用

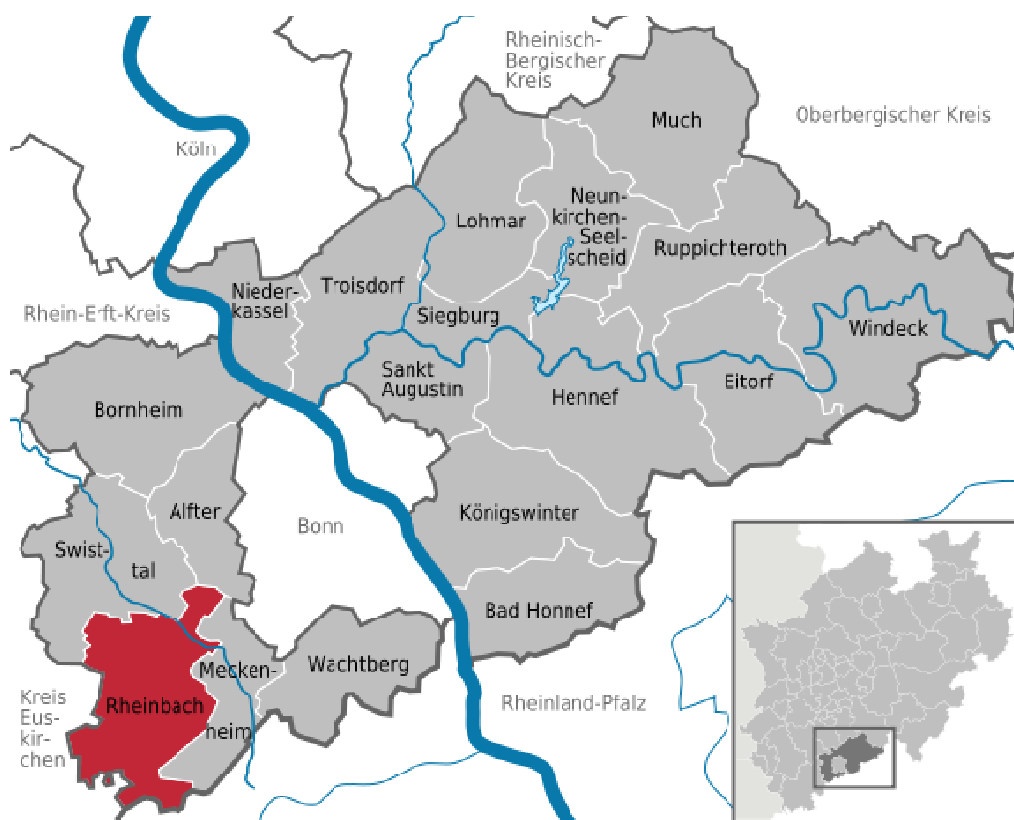


図 2.NRW 州の中 の Rhein-Sieg-Kreis 地域の中 のラインバッハの位置
<http://de.wikipedia.org/wiki/Rheinbach> より 2011 年 5 月 23 日取得

4.4.ラインバッハの森の幼稚園があるノルトライン・ベストファーレン州の森の幼稚園数 (登録園 39)

表 2.ノルトライン・ベストファーレン州の森の幼稚園数 (筆者作成)
 (空白部分は調査できなかった)

名前	場所	設立年	子ども数
Elterninitiative Naturkindergarten e.V. Rheinbach	Rheinbach	1997	40
NaKiGa Werkstatt Reichshof e.V.	Reichshof	1994	
WaKiGa Purzelbäume c/o KJA Schwelm	Sprockhövel	1996	20
Elterninitiative Waldbär e.V.	Niederkrüchten	1997	18
WaKiGa Münster e.V.	Münster	1997	20

WaKiGa Cloppenburg	Cloppenburg	1998	15
Waldkindergarten DIE WALDWICHTEL Loehne e.V.	Loehne	1998	16
WaKiGa Düsseldorf e.V.	Düsseldorf	1998	36
Waldkindergarten Waldameisen Krefeld	Krefeld	1998	
WaKiGa "Waldwichtel e.V."	Köln-Brück	1999	20
Waldkindergararats Winden	Minden	2000	20
WaKiGa Waldgeister e.V.	Wegberg-Rickelrath	2000	20
WaKiGa Waldzwerge e.V	Köln	2000	41
WaKiGa Knechtsteden e.V.	Dormagen	2001	20
WaKiGa Kupfersiefen	Rösrath	2001	19
WaKiGa Langenfeld e.V.	Langenfeld	2002	18
WaKiGa Rosellerheide e.V.	Neuss-Rosellerheide	2002	22
WaKiGa Brühl e.V.	Brühl	2002	20
WaKiGa Halle e.V. "Die Wurzelzwerge"	Halle/Westf.	2004	22
Kolping WaKiGa Wurzelland	Velbert	2004	20
Waldkindergarten Essen e.V.	Essen	2004	20
NaKiGa Warendorf e.V.	Warendorf-Freckenhorst	2004	20
AWO-Waldkindergarten "Hollenkinder"	Brilon	2006	20
WaKiGa Haan Private kindergruppe Haan e.V.	Haan	2007	18
AWO WaKiGa Burscheid	Burscheid	2008	15
WaKiGa Buschräuber e.V.	Viersen		20

WaKiGa Laubfroesche e.V.	Bonn		
WaKiGa Bielefeld Waldgruppe "Die Buntspechte"	Bielefeld		
Wilde Hummeln Höxter e.V.	Höxter		
Städt. WaKiGa Korschenbroich	Korschenbroich		
WaKiGa Dormagen e.V.	Dormagen		
Zauberwald KiTag GmbH	Wuppertal		
WaKiGa "Am Osulfsberg"	Dortmund		
Wandergruppe KiTa Westermannstr.	Dortmund		
WaNaKiGa "Die Waldmäuse"	Velen		
AWO WaKiGa Frankenforst	Bensberg		
WaKiGa der AWO Rheinisch Bergischer Kreis	Bergisch-Gladbach		
Waldspielgruppe Kommerner Waldzwerge	Mechernich-Lessenich		

表 2 からわかるように、ラインバッハの森の幼稚園は 1997 年に設立されており、ノルトライン・ベストファーレン州のなかでは、1994 年、1996 年に設立された森の幼稚園に続いて 3 番目に古い幼稚園である。また、子ども数も他の幼稚園に比べて多いことがわかる。

本研究では、教育水準が比較的高いといわれているノルトライン・ベストファーレン州の森の幼稚園の中で、比較的古く、子ども数が多く、規模が大きいラインバッハの森の幼稚園を対象とする。

第5章 ラインバッハの森

第4章まではドイツ全体の森の幼稚園と調査対象地であるラインバッハの森の幼稚園の情報をまとめてきた。しかし、森の幼稚園とは何かということを考察する要素を導き出すためには森の幼稚園自体だけではなく、森の幼稚園を構成している森について知る必要がある。第5章からは、調査対象であるラインバッハの森の幼稚園が展開されているラインバッハの森について説明していく。

5.1.現在のドイツの森林種別¹⁴

ラインバッハの森はラインバッハ市が所有する市有林(Stadtwald)である。ここで、ドイツにおける森林の種類を整理しておきたい。ドイツの森は、森の所有者によっていくつかの種類に分けられる。

・私有林(Privatwald)

ドイツ連邦共和国国内の約44%の森が私有林である。大部分の私有林の面積は小さく、大きいものでも5ha以下である。私有林でも大きい森林を所有している数少ない所有者がおり、1000haを超える土地を所有している。

典型的な森林所有者はいない。森林所有物(財産)は以前は、エリート特権というイメージがあったが、現在はそうではない。私有林保持者は、例えば、親から継承した学生、若い家族、高齢の老人にいたるまで、すべての社会階層と年齢層の人々があり得る。

・国有林(Staatswald)

29%以上のドイツの森林面積は、連邦州に属している。ドイツ連邦が所有している森林はわずか4%である。連邦有林は、頻りに軍隊が利用し、高速道路(アウトバーン)や連邦水路に沿ったところにも連邦有林が使われている。

・団体(社団法人など)機関(立法機関など)有林(Körperschaftswald)

団体・機関有林(Körperschaftswald)の中に市(Stadt)と地方自治体(Gemeinde)の所有林と(公共施設の建設など共同目的のために地方自治体が結成する)目的連合(Zweckverbänden)の森林がある。配分は、ドイツの森林全体の19.5%である。団体・機関有林(Körperschaftswald)の約44%は、1000ha以上割り当てられている。

¹⁴ Absatzförderungsfonds der deutschen Forst und Holzwirtschaft, 2007, *Waldbild* HOLZABSATZFONDS. p.15, 筆者翻訳作成

- ・信託森林(Treuhandwald)

ドイツ国内の非常にわずかな森林面積が信託森林である。州森林局(Landesforstverwaltung)と有限責任会社当局が管理・経営し、販売している。これは、民営化するように連邦から委託されている。

信託森林とは、ドイツが東西に分割されていた時代に、ドイツ民主共和国(旧東ドイツ)政府が私有林を国有林にし、国有財産に移行させた森である。1989年に東西合併した時点で、信託森林は600000haであったが、2004年時点では180000haである。将来的にはすべて販売し、民営化されることになる。

- ・Zweckverband(目的連合)の森林について

Zweckverbandとは、目的に応じて、いくつかの市(Stadt)や地方自治体(Gemeinde)がいっしょになって、問題解決するために結成される組織であり、政府からバックアップされている。スイスではZweckgemeinde、アメリカ合衆国ではspecial purpose districtといわれている。

例) ドイツ南部バーデンヴェルデンベルク州のLampertheim市(2010年3月8日)

Lampertheim市と隣の市が、両市の共有地に30年間ゴミの埋め立て処理をしており、ゴミ処理のためのZweckverbandが組織されていた。その土地を森にしたいということになり、ZweckverbandがFörsterなどの専門家と相談しながら森をつくっていく課題に取り組んでいく。

ドイツ国内の森林種別

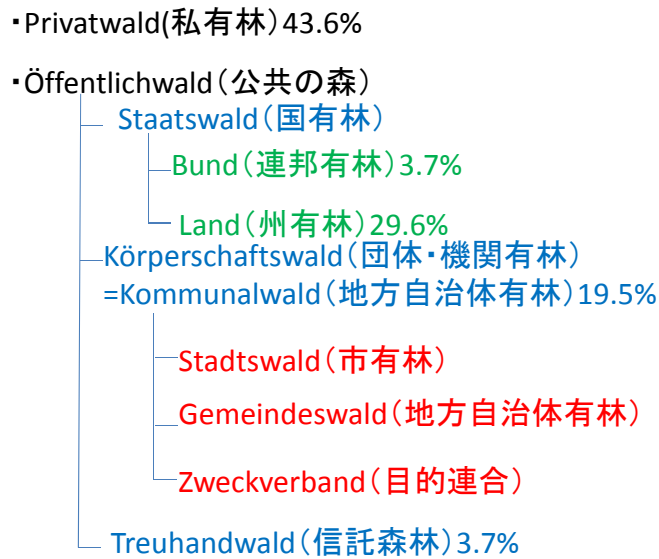


図 3. ドイツ国内の森林種別

(Absatzförderungsfonds der deutschen Forst und Holzwirtschaft, 2007, *Waldbild*
 HOLZABSATZFONDS. p.15 をもとに筆者作成)

ドイツ国内の森林種別を図で整理すると以上のようになり、ラインバッハの森は、公共の森の中の団体（社団法人など）機関（立法機関など）有林(Körperschaftswald)の中の市有林(Stadtwald)という区分に入る。

5.2. ラインバッハ市が属する Rhein-Sieg-Erft 地方の森の全体情報

表 3. ラインバッハ市が属する Rhein-Sieg-Erft 地方の森全体情報

(Landesbetrieb Wald und Holz NRW, 2009, *Regionalforstamt Rhein-Sieg-Erft Wald für Mensch und Natur*. をもとに筆者翻訳作成)

総森林面積	約 60000.00 ha
ラインバッハの森	約 798.39 ha
Rhein-Sieg Erft 地域の人口	2400000 人
1 人当たりの森林面積	250 m ²



図 4.Rhein-Sieg-Erft 地方の森の範囲

(Landesbetrieb Wald und Holz NRW, 2009, *Regionalforstamt Rhein-Sieg-Erft Wald für Mensch und Natur*.より)

ドイツ連邦共和国全体からみる Rhein-Sieg-Erft 地方の森林の割合

表 4.ドイツ連邦共和国全体からみる森林の割合

(Landesbetrieb Wald und Holz NRW, 2009, *Regionalforstamt Rhein-Sieg-Erft Wald für Mensch und Natur*.より筆者翻訳作成)

ドイツ連邦共和国国有林	3055 ha	5%
ノルトラインベストファーレン州有林	21773 ha	38%
地方自治体有林 (ラインバッハ市など)	8371 ha	14%
私有林	25275 ha	43%

年間平均気温	7°C-10°C
年間平均降水量	670mm-1100mm

針葉樹	39%
広葉樹	61%
地域営林署を通しての木材商品化	約 165000 m ³ /年
自然保護区域	約 16000ha

5.3.ラインバッハ市の森の概要¹⁵

ラインバッハ市が所有する森の概要は以下の通りである。

ラインバッハ市の森面積 798.39ha (ラインバッハ市面積 : 6974ha) 森の割合 11.4%
ラインバッハ市人口 : 約 27800 人

ラインバッハ市の森の植生¹⁶

植生 :

オーク	: 344.44 ha	43.1%	
ブナ	: 189.64 ha	23.8 %	
トウヒ	: 82.67ha	10.4%	
マツ	: 67.28ha	8.4%	
ベイマツ	: 61.53ha	7.8%	
カラマツ	: 11.48ha	1.4%	
トネリコ	: 10.57ha	1.3%	
レッドオーク	: 7.44ha	0.9%	
サクラ	: 7.14ha	0.9%	
シデ	: 5.32 ha	0.7%	
カエデ	: 3.30ha	0.4%	
ポプラ	: 1.97ha	0.2%	
シナノキ	: 1.83ha	0.2%	
クリ	: 0.54ha	0.1%	
ナナカマド	: 0.21ha	0.0%	
			798.39ha
広葉樹	: 575.43ha	72.1%	
針葉樹	: 222.96ha	27.9%	
			798.39ha

¹⁵ Die Stadt Rheinbach stellt sich vor“ 2008.3 より筆者翻訳作成

¹⁶ FORSTCONSULT RUDOLPH & TAUSCH., 01.01.2004, *Forsteinrichtung Stadt Rheinbach Allgemeiner Teil*より筆者翻訳作成

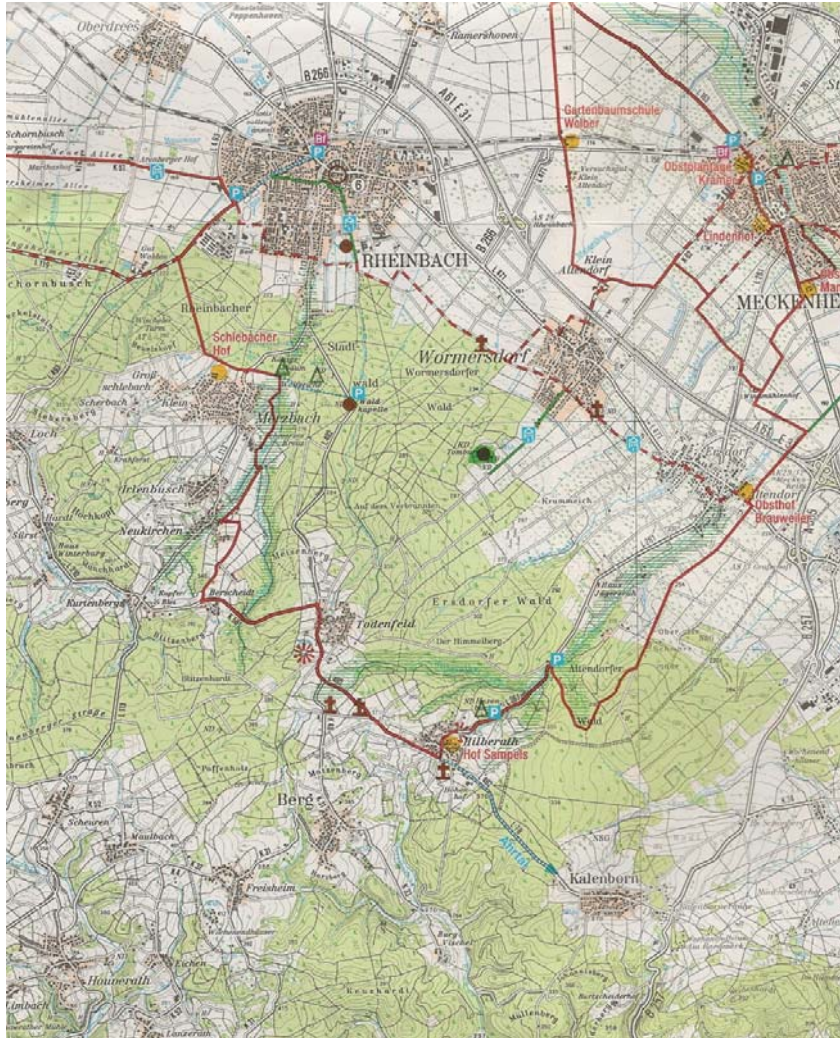


図 5.ラインバッハの森の範囲

(Naturpark Kottenforst-Ville, 2004, KRAUT UND RÜBEN.より)

ラインバッハの町からすぐ近くに森があることがわかる。町の中心から森の入口まで徒歩 15 分ほどで行ける距離である。

5.4.ラインバッハの森の歴史

ラインバッハの森の歴史について、文献的には 1371 年からの記録が残されている。森の幼稚園の森がどのような人々に利用され発展してきたのか、その歴史をみることができる。

表 5.ラインバッハの森の歴史

(FORSTCONSULT RUDOLPH & TAUSCH., 01.01.2004, *Forsteinrichtung Stadt Rheinbach Allgemeiner Teil*.pp.41-45 をもとに筆者翻訳年表作成)

1371 年	<p>公的な組織としてのラインバッハの町が領邦国家の君主から森を借りていた。代わりにラインバッハはお金、森でとれる資源を領邦国家の君主に支払っていた。一般市民が森に入ることは許されていたが、資源を得るためには町の許可が必要であった。木材や生活に必要なものは、町で決められた人が森に入り、町のために利用していた。</p> <p>中世後期まで農民たちは自らの必要に応じて森林を利用することができた。(中略) 1500 年頃を境に状況は急激に変化する。近世には、領邦国家で配布された多くの森林統制法により、農民の森林利用権は厳しく制限されるに至る。中近世の森林の歴史は、森をめぐる農民と公権力・お上 Obrichkeiten との間の争いにより特徴づけられる (Blickle,1986)。</p>
1536/1537 年	<p>町の市長の請求によって、学校教師、町の門番、聖人といわれる人たちが給料以外に森から薪を報酬の一部としてもらっていた。</p>
1761 年	<p>森で許された以上に資源をとりすぎて乱用したため、一般市民が森のために町に支払う料金が高くなった。</p>
1767 年	<p>町の Vogelius 氏という宮廷顧問官が、選帝侯 (神聖ローマ皇帝の選挙権を持っていた領主) に、最近の 18 年間のラインバッハの森の使われ方を報告した。その内容は、人々が森を乱用し、きちんと管理されていなかったということが記されていた。選帝侯は、生活するためには森がとても大切なものであり、町をつくっていくためには木材が必要なため、森は財産であると考えていたが、町の市民ではなく町の偉い人が自分に利益があるように木材を確保したり扱ったりするため、一番悪いという森の状況を理解した。</p>
1767/1768 年	<p>森でとれる材木を売ることによって、町の収入の 62% がカバーされた。</p>
1769 年	<p>選帝侯が森の調査委員会を組織した。調査委員会は、「Buschhüter」を雇い、人々が森を乱用して資源をとり過ぎないように、森を守るために仕事をさせた。</p>
1773 年	<p>Buschhüter の仕事が増えてきて、7 章から成る新しい法律をつくった。裁判をおこない、森に何か問題があれば申請しなければならなかった。</p>
1798 年	<p>フランスのナポレオンの時代、フランスの人々がラインバッハの森を乱用していた。</p>
1800 年	<p>17 世紀から町の人々が自由に森に出入りし管理していたが、それを改定し日雇労働者として森を管理する人を雇うようになった。</p>
1801 年	<p>管理体制がきちんと整っていなかったため、森が乱用され続けていた。</p>
1808 年	<p>ヘッセン、ザクセン、ブランデンブルクからもってきたマツの種を初めて播いた。</p>
1819 年	<p>45 ポンド (22.5 kg) のドングリの種を播いた。</p>

1820年か1823年	ケルンの皇帝の判断により、ラインバッハの森が改めて公共の森として裁判で認められた。管理体制が整い、50ポンドのマツの種が播かれた。
1825年	8月8日にケルンにおける裁判で、ラインバッハの森が、ラインバッハの町の公的な森ということが正式に決定した。
1826年	ドングリの種が播かれた。
1832年	木材を売る仕事は唯一の主要産業であると市長が言った。
1846年	3年のスギを植林した。
1854年	2年と3年のスギを植林した。
1871年	HUTANUS氏がラインバッハの最初の Förster に就任した。
1881年	ラインバッハの森では初めて、セイヨウモミの木とカラマツが植えられた。
1885年	森をどのように管理するかという計画が初めて立てられた。
1886年	Douglasie というアツの種類の木が植えられた。
1890年	計画によって高さ 1.25m～2.25m ぐらいの高い木が植えられた。
1900年	Forstassessor (Förster よりも、森に詳しく、より専門性がある研究者であり Förster や町に森のことについて助言できる人) の SEILER 氏が森を管理し状況を把握する。
1904年	HUTANUS 氏が Förster を辞めて (33年間務めた) WISCHELER 氏 (2代目) が Förster に就任。
1907年	250ha の森を Gut Winter 氏に売った。
1932年	今までは、例えばお金持ちの市民や特別な市民が町に特別にお金を支払い、森を個人的に使用していたが、個人的に森を使うことができなくなった。 ラインバッハの森の近くの Hilberather という森は、今でも個人的に森を使用することができる。
1934年	ラインバッハの地域の区画が変わった。
1936年	WISCHELER 氏が Förster を定年退職。GREUEL 氏が Förster に就任 (3代目)。
1945年	戦争の空爆で森がダメージを受けた。
1945年/1947年	乾燥のし過ぎによってスギがダメージを受けた。
1955年	GREUEL 氏の定年退職後、MÜNZER 氏が Förster に就任 (4代目)
1959年	乾燥のし過ぎによって、スギ、ブナの木がダメージを受けた。
1962年	ROBITZSCH 氏という Forstmeister が森のデータを更新した。
1974年	Hilberath 58ha、Wormersdorf 225ha の森は、Tomberg という村に管理されていたが、ラインバッハの町が管理することになった。

1976年	乾燥によって、カラマツのツツガムシ病が始まった。
1978年	MÜNZER 氏の定年退職後、LENZEN 氏が Förster に就任 (5 代目)
1984年	雪によって 2600fm の木がダメージを受けた。 風によって 4300fm の木がダメージを受けた。
1986/1987年	風によって 2600fm の木がダメージを受けた。
1995年	10月1日に営林署が Kottenforst から Bonn に移った。

第 6 章 森の幼稚園の特徴

第 5 章までは全体的な森の幼稚園の情報と調査対象であるラインバッハの森の幼稚園とその背景である森についての情報をもとに、森の幼稚園というものの概要を示してきた。森の幼稚園というものが少しずつ浮き彫りにされてきたわけであるが、一般的な幼稚園と森の幼稚園の違いとは何であろうか。

ドイツの森の多くは原生林ではなく、人の手が加えられている。そのため、ドイツには、人の手が入った森をきちんと管理をしていく制度として **Förster** という職業がある。森の幼稚園が活動を許可されている森も、**Förster** によって管理されている森である。

また、森の幼稚園は、町に隣接した町の森でおこなわれている。ドイツでは、どこの町に行っても必ずと言っていいほど、森が隣接している。そして、そのほとんどの森は、市町村が所有しており、町の人々が気軽に自由に訪れることができるのである。暖炉のための薪を集めたり、果実をとったりすることもあるが、現在は、ほとんど、安らぎの場として利用されている。平日の午前中は、犬を連れて散歩している人々、健康維持のため、ジョギングしている人々、自転車で走っている人々、保養のために散歩、森林浴をしているお年寄り、体育の授業で、マラソンをしている中学生たちが訪れ、週末や休日になると、家族連れやさまざまな人々で、あふれかえる。

森の幼稚園の子どもたちは、このような背景がある森で活動しているために、**Förster** や森を訪れる町の人々との接点があると考えられる。一般的な幼稚園では、幼稚園の外に出て、遠足や社会科見学などをしない限り、森の専門家である **Förster** や町の人々と接点を持つことはまずない。たとえ遠足や社会科見学などで接点を持ったとしても、その場限りで終わってしまうことがほとんどである。しかし、森の幼稚園の子どもたちは、幼稚園という日常生活において、**Förster** や町の人々との接点があるのではないかと考えられる。

また、森の幼稚園の子どもたちの自然のなかでの様子を記録していると、次に何が起きるかわからない不確実な自然のなかで過ごしているということがわかってきた。

森の中では季節や天候によって見られる動植物が異なり、毎日状況が異なる。一般的な幼稚園では、ある程度予測できる場所で予想できるものを使って教育されているが、森の幼稚園では、次に何が起こるかわからない。森を歩いていて、どのような場面や場所で、どのような生き物に出会うのかわからない。一般的な幼稚園に比べると予期せぬことが多いと考えられる。

一般的な幼稚園との違いを考えたとき、**Förster** や町の人々との接点、また、不確実な自然のなかでの活動という 3 つの視点があることがわかってきた。この 3 つの要素は、森の幼稚園の特徴として重要な視点であると考えられる。

そこで第 6 章では、森の幼稚園の特徴として重要であると考えられる **Förster** とのかかわり、森を訪れる町の人々とのかかわり、また、次に何が起きるかわからない不確実な自然という 3 つの事柄に焦点を当て、参与観察や聞き取り調査、文献調査をもとに検証する。

そして、この 3 つの特徴について説明し、それぞれが何を意味するのかということ进行分析する。

6.1.Förster とのかかわり

ある冬の寒い日、森の幼稚園の子どもたちは、木のそばに集まっていた。何をしているのかと近づいてみると、おじさんからなにやら木について教えてもらっている。30 分ほどの短い時間だったが、おじさんは木のどこが、どういう状態だと病気なのか、その原因は何なのかということ、子どもたちにわかりやすく説明していた。子どもたちはおじさんに思い思いに質問し、そのすべての質問におじさんは的確に丁寧に答える。そんなことが繰り返され、一通り終わると、おじさんは、車に乗って森のなかへ消えていった¹⁷。森の幼稚園の子どもたちは、おじさんから教えてもらった知識を使い、また森でのあそびかたを考える。



図 6.Förster と子どもたち(1)

図 7.Förster と子どもたち(2)

(2009 年 12 月 15 日筆者撮影)

木のこと、森のことなら何でも知っているおじさん。彼は一体、何者なのだろうか。

6.1.1.Förster

ドイツには昔から、ひとつの町に欠かせない警察官、教師、牧師などといった職業があり、その中に、“Förster”という伝統的な職業がある。これは、森を管理する専門家で、専門知識や経験を駆使し、森の生態系や社会的機能を維持しており、ドイツでは 100 年以上の歴史を持つ。ラインバッハの場合、ラインバッハの森の歴史について、文献的¹⁸には 1371 年からの記録が残されており（表 5.参照）、その文献によると、1825 年にラインバッハの

¹⁷ 2009 年 12 月 15 日 参与観察記録より

¹⁸ FORSTCONSULT RUDOLPH & TAUSCH., 01.01.2004, *Forsteinrichtung Stadt Rheinbach Allgemeiner Teil*.pp.41-45 筆者翻訳引用

森がラインバッハの町の公的な森ということが正式に決まり、その 46 年後の 1871 年に最初の Förster が就任したことが記されている。ラインバッハの森は、今までに 140 年以上の間、正式に専門的な人の手が入り、管理されてきたことになる。Förster になるためには、難しい勉強をする必要があり、人々から尊敬される職業のひとつとなっている。

日本の森林の場合は国有林だけが林野庁の管轄で営林署が管理し、その他は都道府県の林務関係の部課が管理したり、指導助言したりする体制になっているのに対し（北村,1981）、ドイツの森林は、すべて営林署が管理する体制をとっている。私有林でも公有林でも大規模の場合はそれぞれ単独の営林署をおき、それほど規模が大きくなければ、所有者の違う森林を集めてそこに統合営林署というものをおく（北村,1981）。つまり、州の法律の下、州ごとに管理されており、私有林、公有林の区別なく、Förster が定期的に森に入り、管理、もしくは、アドバイスをすることが、法律で義務付けられている。そして、ほとんどの森は、地域に住む人々の自由な出入りが許されており、日常生活において欠かせない場となっているのである。

実際にドイツの森を訪れてみると、人が散歩できるように、小道が整備されていて、さまざまな種類の木々や植物がきれいに生い茂っている。そして、至る所で、森で生活している動物たちに遭遇する。ドイツの森の多くは、原生林ではなく、人の手が増えられている。そのような森で、さまざまな動植物や人が、森を共有できるのは、Förster の仕事によるところが大きく、ドイツの森の仕組みを見てみると、人の手が増えられて生態系が維持され、人が管理をすることも生態系の一部であることがわかる。ドイツの Förster は、日本のように 2、3 年で交代するのではなく、10 年 20 年という長期にわたって同じ森で仕事をする。ときには 40 年もの間、同じ森を管理する場合もある。ラインバッハの場合、現在、第 5 代目の Förster が就任しているが（2011 年現在）、彼は 1978 年に就任しており、2011 年の時点で 33 年間勤めていることになる。

森の幼稚園の子どもたちと親しげに会話をし、木について教えていたあのおじさんは、Förster とよばれる職業の人であった。

6.1.2.Förster の一日

その Förster は普段は森で、どのような活動をしているのだろうか。実際の半日同行記録から、その内容を紹介する¹⁹。

朝 8 時頃、Förster は森のすぐ外れにある官舎兼自宅から森に出かけていく。

¹⁹ 2009 年 11 月 26 日参与観察記録より



図 8. Förster の官舎 1 (2009 年 11 月 23 日筆者撮影)



図 9. Förster の官舎 2 (2009 年 11 月 23 日筆者撮影)

森に入り、病気の木、健康に育っていない木の幹に赤いスプレーでマークをつける。



図 10. Förster による伐採マーク (2009 年 11 月 26 日筆者撮影)

健康な木でも間伐のために木を切る。

ラインバッハの森では 1 年間に約 20000 本の木を伐採しており (2009 年現在)、その多くの木材は中国やインド、マレーシアなどに輸出している²⁰。

木材からの収入金額は以下の通りである²¹。

2007 年 1 月 1 日から 2007 年 12 月 31 日

落葉樹 : 216.067,23 ユーロ

針葉樹 : 31.612,21 ユーロ

合計 : 247.679,44 ユーロ

2008 年 1 月 1 日から 2008 年 12 月 31 日

落葉樹 : 243.655,85 ユーロ

針葉樹 : 41.284,44 ユーロ

合計 : 284.940,29 ユーロ

ここに記載されているのは全体の 90% (Förster が把握している一部) のもののみである。

²⁰ 2009 年 11 月 12 日ラインバッハの Förster 聞き取り調査より

²¹ Stadt Rheinbadh-Forstabteilung FWJ:2007, FWJ:2008 筆者翻訳作成

Förster は、木を見ただけで、そのどこが病気なのか、どこが悪いのかが判断できるといふ。木を切る作業は、Förster ではなく、Forstwirt と呼ばれる Förster のもとの作業をする専門の作業員が 3 人いて、その人たちが切る。彼らは、公務員ではないが、Forstwirt の国家資格を持っている。実際に管理作業をしているのは、Forstwirt で、Förster は考えて指示を出す。

毎日、約 1 時間、どの木を切るべきかマークをつける。健康に育っていない木でも、他の動植物の棲みかになっていたり、動植物にとっていいと思う木は切らないで残しておく。切った木のほとんどは、売りに出すが、いくつかの木を他の動植物のために森の地面に横たわせて放置する。



図 11. 森の生態系維持のための伐採した木の放置 (2009 年 11 月 26 日筆者撮影)

仕事中に Förster の携帯電話に何本もの電話がかかってくる。そのうちのひとつは、小学校の先生から明日の午前中、クリスマスの飾り付け用のモミの木を届けてほしいという依頼の電話であった。

Forstwirt とよばれる作業員 2 人が、実際に木を切る現場に立ち会う。さすがに、斧ではなく、電動ノコギリで切り倒す。



図 12. Forstwirt による木の伐採 (2009 年 11 月 26 日筆者撮影)



図 13. Forstwirt による計測 (2009 年 11 月 26 日筆者撮影)

木が倒れる瞬間は、音がものすごく響き、迫力である。森の幼稚園の子どもたちは、しばしば、この音を遠くの森で聞く。このあいだも、森の幼稚園の子どもたちが森のなかを歩いているときに音が聞こえて、先生が、「みんな、今の音、聞こえた？木を切り倒している音だよ」と子どもたちに注意を向けさせていた。

6.1.3.Förster の仕事内容（ノルトライン・ベストファーレン州の Rhein-Sieg-Erft 地方）

Förster は生態系やその日の森の状況を考慮しながら的確に森を管理していることが見受けられる。具体的な仕事や任務はどのようなものなのか、その内容はおもに以下のとおりである。

任務（課題）²²

森の持続的な保全、人々のための森の機能の発展を追究する。

- ・森林利用、森林保護、休養（レクリエーション）などにおける環境教育

Rhein-Sieg-Erft 地域の農林省が運営している“Haus der Natur“といわれる施設が 1989 年にボンに設立された。そこでは誰もが自由に出入りし、森や自然についての情報を得ることができる。環境教育専門の Förster も常勤しており、例えば、夏休みなどには、近くの森で自然について学ぶ教室が開かれる。同じ系列の“Naturpark“という小さな施設がラインバッハの森の幼稚園の近くにもあり、そこにはしばしば、森の幼稚園の子どもたちが訪れる。毎日森で体験したことと重ね合わせながら、子どもたちは、そこでも知識を得る機会がある。



図 14,15,16. Haus der Natur での環境教育

²² Landesbetrieb Wald und Holz NRW, 2009.9, *Regionalforstamt Rhein-Sieg-Erft Wald für Mensch und Natur*. 筆者翻訳引用

- ・国（州）有林の管理
- ・私有林と団体機関の森の管理
- ・森での処置、対策の助成
- ・保養林の形成、育成
- ・森林保全
- ・自然保護と景観保存
- ・希少な木の種類の保存ならびに種と植物からの生産を通した生物多様性の促進
- ・職業教育

Förster は森を訪れる人々が散歩したり休養したりあそんだりすることをふまえたうえで森の持続的な保全を意識しながら、人々が過ごしやすいうように景観を考えたり空間を考えたりする。植林をするときは、その森を訪れる人々の希望に合うように、特に「自然に」そして「昔からのまま」に見えるように配慮した景観づくりがおこなわれる。

森のおもな役割は、森を訪れる人々の休養、森からとれる材木などの経済、自然保護があげられるが、ラインバッハでは木材をとって経済的に発展することよりも人々の休養やレクリエーションとして活用することが優先されている²³。

6.1.4. ラインバッハのFörsterの仕事内容^{24 25}

森によってその状態、植生が異なるため、それぞれの森林を管理する Förster の仕事内容も異なってくる。ラインバッハの森の場合、Förster はどのような仕事をしているのだろうか。

- ・生態系を崩さずに森が維持されるように木を伐採したり植林したりする
- ・現在のところ、マツが多いため、葉が多い木をバランスをとって植える
- ・自然災害から町を守るために森をつくる
- ・ビオトープ、沼などを守る
- ・景観を重視した森づくりをおこなう
- ・訪問者がリラックスでき、繰り返し訪問できるように森を維持する

²³ Lenzen, H., 1983, *Stadtwald Rheinbach, Vor den Toren der Stadt*, Eifel-und Heimatverein Rheinbach. 筆者翻訳引用

²⁴ FORSTCONSULT RUDOLPH & TAUSCH., 01.01.2004, *Forsteinrichtung Stadt Rheinbach Allgemeiner Teil*. P.39. 筆者翻訳引用

²⁵ Lenzen, H., 1983, *Stadtwald Rheinbach, Vor den Toren der Stadt*, Eifel-und Heimatverein Rheinbach. 筆者翻訳引用

- ・動植物を守ることを考えながら、人が入りこみすぎないように森の中の道を設定する
- ・自然に近い景観を大切にするため、部分的に木を伐採し、動植物を保護する
- ・森全体の古い木を強くするため、部分的に古い木を切って、若い木を植えている。
- ・伐採した古い木をそのまま放置し、腐らせて動植物が生きていく場所をつくり、森のバランスをとる。
- ・ラインバッハの森には、ヨーロッパにあるほとんどの種類の木が植えられている。
- ・戦争の空爆跡も含めて約 80 の穴があり、そこに水が溜まってビオトープができています。森にとって重要なため、穴がふさがらないように管理している。

Förster はそこに住んでいる動植物や人との関係を考えながら森を管理し、維持していることがわかる。このような専門的な知識や技術を持つ Förster であるが、Förster になるためにはどのような勉強をする必要があるのだろうか。

6.1.5.Försterになるには（ノルトライン・ベストファーレン州の場合）²⁶

ドイツは州によって法律が異なる。ここでは、ラインバッハの森の幼稚園があるノルトライン・ベストファーレン州の Förster 制度について説明する。

Förster になるには、まず、高校卒業資格（大学入学資格）Abitur もしくは、単科大学卒業資格を有することが条件となる。その上で、8 セメスター（4 年間）の期間、林学専門の単科大学での勉強が必要となる。2 セメスター（1 年間）の期間はひとつの営林区である森で実習がおこなわれる。卒業と同時に林学学士の学位が与えられる。それから、Förster の志願者として 1 年半、営林区と高等林業業務部署で研修を受ける。研修修了と同時に、上級林業業務キャリアのためのキャリア試験を受ける。その試験を通過したのちに、在外勤務、または内勤としての Förster になることができる。

Forstwirtになるには²⁷

Forstwirt とは、Förster の指令のもと、森林作業をおこなう専門の人たちである。ラインバッハ市所有の森林の場合、Förster が 1 名に対し、Forstwirt とよばれる作業員が 3 名おり、ラインバッハの森林全体を管理している。Forstwirt の働きは Förster と同じく森林管理や森の幼稚園にとっては重要な役割を果たしているため、彼らの内容についても説明していく。

²⁶ 2011 年 12 月 22 日ラインバッハの Förster 聞き取り調査より

²⁷ Landesbetrieb Wald und Holz Nordrhein-Westfalen, *Berufsausbildung zum/zur Forstwirt/in*, <http://www.forstwirtausbildung.nrw.de/ausbildung/forstwirt/index.htm> を参考に筆者翻訳引用

職業教育の期間：

標準的な職業教育は3年間受ける。

一般的な大学卒業資格 (allgemeiner Hochschulreife)、単科大学卒業資格 (Fachhochschulreife)、完全職業訓練 (abgeschlossener Berufsausbildung)、または職業基礎教 (Berufsgrundbildungsjahr) に相応する者は職業教育を2年間に短縮できる。

職業教育の場所：

公認された、NRW州の森林作業と森林技術のための森林教育センターからの職業学校でおこなわれる。

職業教育内容：

- 森林管理、森林生産
 - ・ 森林存続の保護
 - ・ 森林存続の開発と手入れ
 - ・ 狩猟

 - 自然保護と景観の維持
 - ・ 維持、保護と発展、特別な生息空間
 - ・ 保護の設備と手入れ、保養施設

 - 森林産物の収穫と準備
 - ・ 木材の産物と他の森林産物
 - ・ 木材の選別と測量
 - ・ 木材の供給と貯蔵

 - 森林技術
 - ・ 管理、人間と道具の手入れ (整備) と修復
 - ・ 木材の加工と原材料
- などである。

試験：

試験は、2つあり、そのうちの1つは、職業訓練を受けている2年目におこなわれる。受験者は、NRW州の農林省から試験の成績証明書を受ける。

試験科目は、森林経済と景観保存、木材収穫と森林技術および経済学、社会科学などである。

職業訓練の最後に、2つ目の（最後の試験としての）試験を受ける。ここで、職業能力の審査がおこなわれる。筆記試験は、一日に集約しておこなわれる。面接を伴う実地試験は、筆記試験とは別の日におこなわれる。その後、NRW州の農林省から試験の成績証明書と証書を受ける。

ラインバッハ市が所有する森の Förster は、ラインバッハ市の公務員にあたり、市の森林局に属している。州や国の森を管理する Förster はそれぞれの公務員にあたる。

ラインバッハ市の場合、森林管理をする Förster は、行政のなかの森林局に属しており、他の部署と連携して業務をおこなっている。

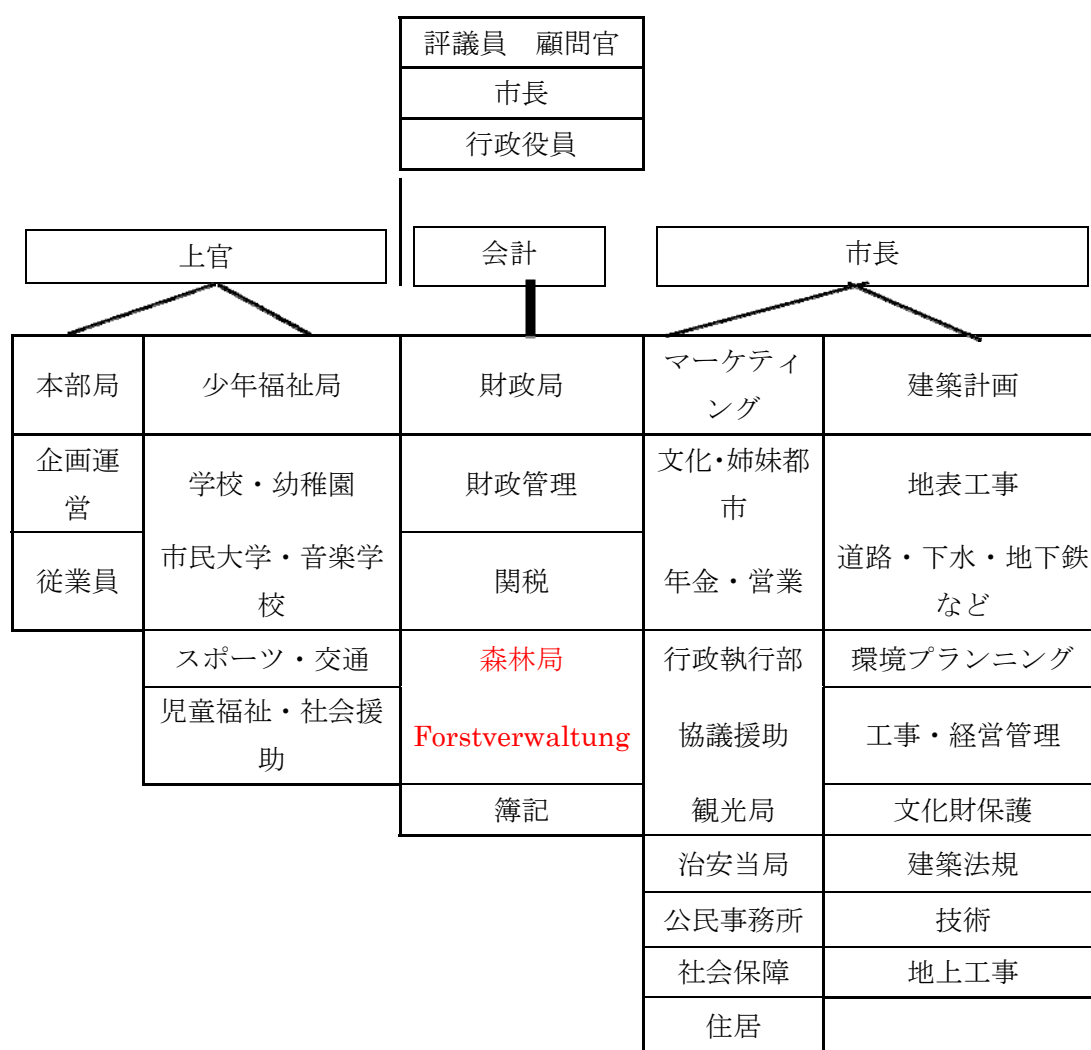


図 17.ラインバッハ市の行政図

(Verwaltungsaufbau Stadt Rheinbach 2008.01.01 をもとに筆者翻訳作成)

このように、Förster になるためには林学を中心にさまざまな専門的なことを学ぶ必要が

あり、町の森を管理している Förster は公務員であることがわかった。

6.1.6.Förster と森の幼稚園の関係

ノルトライン・ベストファーレン州の森の幼稚園連盟が発行している森の幼稚園の手引き第 4 章「周囲の人々から構成された森」には、「森の決まりや知識を知るために Förster との共同作業が望ましい²⁸」と記されている。

ラインバッハの森の幼稚園が、2001 年に森を所有する市（ラインバッハ市）から、正式な運営許可を取得した際に Förster もかかわった。この森の幼稚園の活動が許可されている場所は、基本的に知りつくされていて、危険が少ない場所だと Förster が判断した、町から徒歩で行ける距離の森の入口の一部分（4.5ha）である。

森の幼稚園が活動を許可されている森(4.95ha)



図 18.ラインバッハ市全体の森と森の幼稚園の森の範囲

²⁸ Landesverband der Wald-und Naturkindergärten NRW e.V., 2004, *Handbuch Qualität im Waldkindergarten*.筆者翻訳引用

この場所は、ラインバッハの森の中で一番若い森ではないが、若い部類に入る森である。Försterは、必要があれば幼稚園に、危険な場所、天候や気候による木の状態など、森の状況についての情報を提供してくれる。非難場所や物置として使用しているバウワーゲンという小さな小屋は、公共の森に設置することは許可されなかったため、森のすぐ隣にある私有地を年間 60€で借りて、そこに設置している。ラインバッハの森の幼稚園の森は市有林だが、私有林を森の幼稚園のために使用する場合は、その森の所有者、その地方のFörsterに使用許可を得る必要がある²⁹。

ラインバッハの森の幼稚園は、1997年に始まり、2001年に正式に許可された。始めのうち、Försterとはあまりコンタクトをとらなかった。森の幼稚園の子どもたちが森であそび、そのあそんだ跡が荒らされた状態にあったこともしばしばあり、それを見たFörsterは驚き、森の幼稚園をあまりよく思っていなかった時期もあったようである。しかし、そのうち、だんだんとコンタクトをとるようになり、今では、いいコンビネーションとなっている³⁰。

6.1.7.森の幼稚園の森の植生³¹とあそび場

森の幼稚園のために活動が許可された森にはブナ、カエデ、オーク、クリ、ヨーロッパカラマツなどが生い茂っている。実際に訪れると、さまざまな木々が植わっていて、いろいろな形や色の葉や実に出会える。また、さまざまな種類の木々が植わっているため、集まってくる動物たちも多様なのである。

面積：4.95ha

植生：

ブナ	： 2.66ha	54%
カエデ	： 0.67ha	13%
オーク	： 0.59ha	12%
クリ	： 0.54ha	11%
ヨーロッパカラマツ	： 0.49ha	10%
		4.95ha

ここでラインバッハの森全体の植生を整理してみると以下のようになる。

²⁹ 2010年6月25日ラインバッハ Förster 聞き取り調査より

³⁰ 2009年10月23日森の幼稚園教員聞き取り調査より

³¹ FORSTCONSULT RUDOLPH & TAUSCH., 01.01.2004, *Forsteinrichtung Stadt Rheinbach Allgemeiner Teil*. 筆者翻訳引用

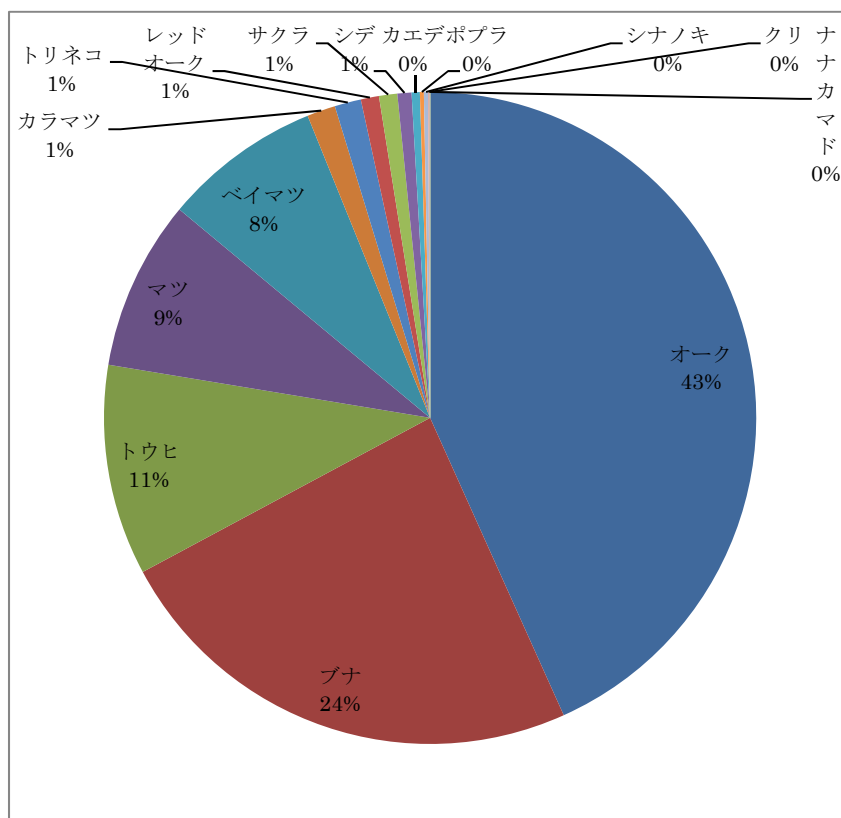


図 19.ラインバッハ市森全体の植生 (筆者作成)

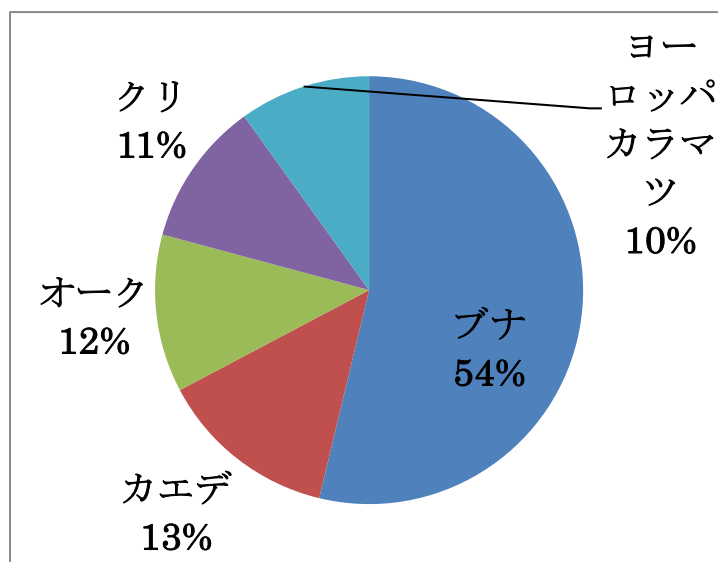


図 20.森の幼稚園の活動が許可されている森の植生 (筆者作成)

ラインバッハの森全体の植生はオーク（43%）がもっとも多く、次いでブナ（24%）であるのに対し、森の幼稚園の活動が許可されている森はブナ（54%）がもっとも多い。オ

オークの森とブナの森はどのような違いがあるのだろうか。ラインバッハの森のFörsterによると、「ブナは日陰に耐えられるために隣りに並んでいることができるが、一方、オークはより多くの光を必要とするため、木々の間が離れていなければならない。光が少ないと枝がすぐに枯れていく。枯れた枝は子どもたちにとって危険になり得る。ラインバッハの森の幼稚園ができてから14年経つが、森の幼稚園活動を許可した森の範囲の森は50年ほどしか経っていない（木々がだいたい50歳）若い森であるために、子どもたちにとって危険が少ない。もっと古い森だと高い木が多く、枯れた枝も多いため、それらが上から落ちてくると子どもたちに危険を及ぼす³²。」ということであった。

子どもたちが森で学ぶことに関しては、オークの森でもブナの森でも違いがあまりないが、安全面を考慮すると、オークの森よりブナの森の方が、そして古い森より若い森の方が子どもたちにとって危険が少ないということがわかる。また、森の幼稚園の森のなかのいくつかのあそび場は、森の幼稚園の先生が、Försterに相談し協力を得ながら、丸太を横にして置いたり、ドングリであそべるようにドングリの木の下に子どもたちを連れていったり、切株を設置したりして、ある程度設定していることがわかった。森の幼稚園が展開されている空間は、Försterの専門知識と経験に基づく判断によって作りだされた場所なのである。

これらのことを総合して考えてみると、ドイツの森の幼稚園の子どもたちは、まったくの自然の森のなかであそんでいるわけではなく、ある程度の安全性を考えられた上で活動していることがわかる。



図 21.あそび場の設定（2009年9月4日筆者撮影）

³² 2011年12月7日ラインバッハ Förster 聞き取り調査より

6.1.8.Förster と子どもたち

子どもたちと Förster との直接のかかわりは、とても少ないという幼稚園もあるが、この森の幼稚園では、年に数回、幼稚園の先生が Förster をお願いして、子どもたちに、森の仕組みについて話してもらう機会を設けている。Förster は木の構造や森に生息している動植物のこと、森の生態系などについて話してくれる。子どもたちは、毎日の自分自身の体験や経験、また、先生から教わることに加えて、森の専門家の Förster から直接、森の話聞くことによって新たな発見をし、より詳しく森の知識を習得していく。

参与観察記録から子どもたちと Förster がかかわっている場面を紹介する。

2009年12月1日 くもり

Forstwirt という専門の作業員が、切った木を運んでいる現場を子どもたちが見学する。Förster と Forstwirt のおじさんが、木について説明してくれる。子どもたちは、とても静かに聞いている。5, 6 歳の子どもたちは、興味深そうに聞いているが、3, 4 歳の子どもたちは、よくわからなさそうにしている。しかし、この作業の様子はどの子どもも興味深そうに見ていた。

この日は、すでに切った木を整理している場面を見学したが、実際に木を切っているところも見学することもある。木を切る時期は、葉が落ちてしまう冬に集中しておこなわれる。この時期に子どもたちは、森にいただけで遠くのほうで木が切り倒される音を聞く機会がよくある。幼稚園の先生は意識的に木を切って森を管理していることを子どもたちに伝えている。



図 22.Förster、Forstwirt と子どもたち 1 (2009年12月1日筆者撮影)



図 23. Förster、Forstwirt と子どもたち 2 (2009 年 12 月 1 日筆者撮影)

子どもたちは森の中で、仕事をしている Förster に遭遇することがしばしばある。Förster の車が通り過ぎるだけで、子どもたちは Förster だとわかり、うれしそうにあいさつをする。Förster は、いつも気さくに子どもたちと接してくれる。公用車には、ラインバッハ市の紋章が貼られており、誰もが市の公用車であることがわかる。



図 24. Förster の公用車 (2009 年 11 月 23 日筆者撮影)

Förster は、自分たちがよく利用する森を守り管理していく、動植物といつもいっしょに
いられる、などという点から、ドイツの子どもたちにとって、あこがれの職業のひとつで
あるという。実際に森の幼稚園の子どもたちに、将来の夢についてインタビューをしたと
き、何人もの子どもたちが「Förster になりたい！」と言っていた。また、森を訪れている
町の人々は、Förster の車を見ただけで挨拶をする。Förster によって森が守られ、また、
町も守られているという意識から、町の人々は Förster を、とても尊敬しているという印象
を受ける。町では市長の次に Förster は顔が広く、実際に尊敬されている。

Förster はほとんど毎日、森で仕事をしているため、森のことをよく知っていると考えて
しまいがちだが、ラインバッハの Förster は、「森に行けば行くほど、森がわからなくなる」
という。あまりにも神秘的すぎて、深くてかえってよくわからなくなる、と。そして、彼
はこう続けた。

「森にいと、人間の生き方を考えさせられる。いろんな木が植わっていると、森は強く、
生き延びられる。多様性が重要なのです。人間も、いろんな人種、特徴、性格を持った人
たちがいるけれども、森をみていると、いろんな種類の木が協力し合い、補い合い、生き
延びていくように、誰もが必要で、その多様な中で、どう生きていくか、考えなければな
らない。人間は、森から学ばなければならないといつも感じています³³。」

このような「神秘的すぎる」森で、森の幼稚園の子どもたちは毎日を過ごし、Förster の
ように、森からさまざまなことを感じ、学んでいるのだろう。

以上の森にかかわる背景や、Förster の役割をみると、ドイツの森の幼稚園は、管理
体制が調い、ある程度の安全性が確保された「森」という場で展開されていることがわか
る。また、子どもたちは Förster の森での活動を間近で見ることがあるので、人の手を加え
て生態系を維持する方法を日常的に学んでいく。森の幼稚園にとって Förster は重要で、安
全面や教育面においてもなくてはならない存在であることがわかる。

6.2. 森を訪れる町の人々とのかかわり

ラインバッハの森では、平日の午前中は、犬を連れて散歩している人々、健康維持のため、
ジョギングしている人々、自転車で走っている人々、保養のために散歩、森林浴をし
ているお年寄り、体育の授業で、ジョギングをしている学校の生徒たちが訪れ、週末や休
日になると、家族連れやさまざまな人々であふれかえる。「森には絶えず人が出入りして
いるため、ひとりになることはない」と、毎日森に出入りし森の状態や様子を把握している
Förster が言っていた。森を訪れている町の多くの人々が森の幼稚園の存在を知っているの
である。子どもたちは、幼稚園の友だちや先生とのふれあいはもちろんのこと、Förster を

³³ 2009年11月25日ラインバッハ Förster 聞き取り調査より

含め、森に自由に出入りする町の人々との接点を持つことができている。ラインバッハの森の幼稚園は立地的にも町から徒歩で行ける森の入口にあり、ラインバッハの町に住む人々も、よく森を訪れる。森の幼稚園の子どもたちと、森を訪れる町の人々がどのようにふれあっているのか、その様子を参与観察記録から紹介する。

6.2.1.レクリエーションを楽しむ人々

森には「犬の散歩をしている人、散歩しているお年寄り、サイクリングを楽しんでいる人、いろんな人がパウワグンの横を通り過ぎていく。そして、子どもたちはあいさつを交わす³⁴。」「ジョギングをしている人がよく通りかかる³⁵。」「ジョギングして通りかかるお兄さんとお話している子どももいる³⁶。」とあるように、保養のために森を訪れる人々に出会うことがよくあり、子どもたちはあいさつをしたり情報交換をしたりしている姿がよく見受けられる。



図 25.犬の散歩しているおじさんとあいさつを交わす（2009年10月26日筆者撮影）

³⁴ 2004年4月29日10時参与観察記録より

³⁵ 2004年7月5日9時40分参与観察記録より

³⁶ 2004年7月7日9時55分参与観察記録より



図 26.犬の散歩しているおじさんとの交流（2009年10月26日筆者撮影）

6.2.2.学校の生徒

森の幼稚園のバウワーゲンとよばれる小さな小屋がある広場の近くの森の小道では、「よくジョギングをしている中学生が走っていく³⁷。」ラインバッハの町にはいくつか学校があり、体育の授業などで生徒たちがよく森を訪れ、走っていく姿が見受けられるのである。森の幼稚園の子どもたちは、年の近いお兄さんやお姉さんと森のなかで遭遇する機会があり、あいさつをする。また、「男の子たちが5人ぐらい集まって何かのプロジェクトのためにビデオを撮っている。子どもたちと先生は少し立ち止まって彼らを観察する。そして、しばらくして再び歩き出す³⁸。」というように、子どもたちは、ジョギングをしている生徒たちだけではなく、ときには森の中で活動する生徒たちに会うこともある。

6.2.3.散歩をしているお年寄り

子どもたちは毎日午前10時ごろに朝ごはんとはよばれる軽食を食べる習慣がある。森のなかで持参した敷物を敷いてそれぞれ食べる。そんなときに「散歩をしている特にお年寄りに会う³⁹」ことが多い。「散歩をしていた5人ぐらいのお年寄りが、これが噂の森の幼稚園なの？すごいわねえ。すばらしいわねえ。とみんなで話している⁴⁰。」というように、森の幼稚園の子どもたちの様子を初めて見る人々は、自然のなかで元気にあそぶ子どもたちを

³⁷ 2004年4月29日10時10分,2004年5月19日10時50分参与観察記録より

³⁸ 2004年6月3日9時参与観察記録より

³⁹ 2004年4月29日10時10分参与観察記録より

⁴⁰ 2004年5月3日参与観察記録より

見て感心し、子どもたちから元気をもらうようである。子どもたちは森のなかを歩いているときも「移動中に散歩をしているお年寄りと子どもたちが会話を交わしている⁴¹。」「ジョギングしている人や、散歩しているおじさん、犬を連れているおじいさんなどに会い、あいさつをかわす⁴²。」とあるようにお年寄りとの交流がある。初めて会う人たちばかりではなく、「あ、いつも散歩しているおじいさんが通りかかった。川であそんでいる子どもたちに話しかけている。子どもたちはそれに応答している。そして、おじいさんに何か教わっているようだ⁴³。」というように子どもたちは毎日出かけていく森のなかで、毎日のように出会う人々とは顔なじみになっており、交流が深まっていく。

6.2.4.おはなしのおばあさん

子どもたちが朝ごはんを食べているとき、犬を連れたおばあさんが、子どもたちにおはなしをしにやってくる。「今日はバウワーゲンの中で朝ごはん。おはなしをするおばあさんがやってきておばあさんが書いたおはなしを子どもたちに話している⁴⁴。」「お話をするおばあさんが犬を連れて来ている。それから先週のおはなしの続きを読み始める⁴⁵。」

森の幼稚園の先生の話によると⁴⁶、このおばあさんはラインバッハの町に住んでいる人で、もともとは犬の散歩のために毎日森を訪れていた人である。2001年に森の幼稚園の子どもたちと先生がラインバッハの町を歩いていたときに偶然出会ったという。おばあさんは物語をかくことが趣味で、その物語に合った絵をおばあさんの友人が描いているのだそうだ。森の幼稚園の存在を知ったおばあさんは、子どもたちに自分がかいた物語を聞いてもらいたいと思い、週に一度、森の幼稚園を訪れるようになった。森の幼稚園の子どもたちは、毎週、おばあさんが訪れることを楽しみにしており、おばあさんのおはなしが始まると、さっと静かになり興味を持って聞いている。

⁴¹ 2004年5月17日9時10分参与観察記録より

⁴² 2004年7月2日10時参与観察記録より

⁴³ 2004年5月10日9時25分参与観察記録より

⁴⁴ 2004年6月30日10時15分参与観察記録より

⁴⁵ 2004年7月6日10時15分参与観察記録より

⁴⁶ 2009年12月3日森の幼稚園教員聞き取り調査より



図 27.おはなしのおばさんと子どもたち 1 図 28.おはなしのおばさんと子どもたち 2
(2009 年 11 月 26 日筆者撮影)

6.2.5.森の近くで働く人々

森では散歩をしている人、犬を連れている人、ジョギングをしている人、自転車で走っている人たちと出会うことが多いが、ときには森の近くで働く人々と出会うこともある。

「森の幼稚園の集合場所の前にはスポーツセンター建設の工事をしている。その前を通りかかると、子どもたちはその工事をずっと見ている。そして、マティアス（6 歳の男の子）がおじさんに何か質問している⁴⁷。」「公園に到着。芝刈り機に乗って芝を刈っているおじさんとあいさつする⁴⁸。」「みんなで道路を横断する時、パトカーがやってきた。子どもたちが横断し終わるまで待っている。『おはよう、子どもたち！』とマイクで言っている。スピーカーを通して、けっこう大きく聞こえる。子どもたちが横断し始めると、『気をつけてわたるんだぞ。はやく、はやく！』と警察官がジョークをとばしている。そして、子どもたちが渡り終わると、『またな、子どもたち！』と言って、手をふってくれた。子どもたちは笑顔で応える。先生も、パトカーのうしろに止まっていた一般の車のおじさんも、大笑い⁴⁹。」
 というように、町でさまざまな仕事をしている人たちに出会う。

一般的な幼稚園だと普段は先生とクラスの子どもたちとの接点だけであるが、ラインバッハの森の幼稚園の子どもたちは、森や森の近くで老若男女、さまざまな人々に出会う機会がある。しかもどのような場所で、どのような場面で、どのような人と出会うかわからない。子どもたちはどこで出会うかわからない人々に、その場その場で対応していかなければならないのである。

森の幼稚園の子どもたちにとって、Förster や森を訪れる町の人々とのかわりかは、自然や社会のことについて知るだけでなく、コミュニケーション能力の促進にも大きくつな

⁴⁷ 2004 年 4 月 29 日 9 時 15 分参与観察記録より

⁴⁸ 2004 年 7 月 1 日 10 時 30 分参与観察記録より

⁴⁹ 2004 年 4 月 16 日 9 時 20 分参与観察記録より

がっている。

6.2.6.クリスマス時期の森の幼稚園

クリスマスの時期には、子どもたちがお母さんたちといっしょにクッキーを焼き、それを森の幼稚園風に木の実や葉などで飾り付けをして、ボラバーゲンと呼ばれるリアカーのようなものに乗せて町に売りに行く。毎年、どんなに寒い日でも先生のアコーディオンに合わせて歌を歌って、クッキーが売りきれぬまで売る。町の人たちは、よく買ってきて、その売上金の一部をアフリカのトーゴに寄付するのだそうだ。また、いつも森を管理し、お世話になっている Förster とラインバッハ市長に感謝の気持ちを込めて、クッキーと自然のもので描いた絵をプレゼントする。この時期は、森の幼稚園の一年のうちのメインイベントに当たり、これらのイベントを終えて一年を締めくくる。

普段の森の幼稚園の日常からも町の人々とのかかわりがあることが見受けられるが、クリスマスの時期からも森の幼稚園と町の人々とのかかわりをみてみることにする。

<町へクッキーを売りに行く日>

お母さんたちと、子どもたちがそれぞれの家庭でクッキーを焼いて、森の幼稚園風に飾り付けをした 300 袋のクッキーを 4 グループそれぞれのボラバーゲンに入れて町へ売りに行く。1袋 2 ユーロ。



図.29 クリスマスクッキー1



図.30 クリスマスクッキー2

(2009年11月25日筆者撮影)



図.31 クリスマスクッキー3 (2009年11月25日筆者撮影)

クッキーをつめたボラバーゲンを運んでいると、道を通る人々に「おいしそうだね」と声をかけられる。子どもたちは、朝、森の入口の公園に集まって遊具で遊ぶ。10時30分ごろから街へ出発する。途中で他のグループと合流し、最終的には全部のグループが一緒になる。まず、森から一番近い場所の銀行の前の広場に、子どもたち（全員で60人ぐらい）が半円になって、先生がアコーディオンを弾きながら歌を歌いだす。銀行前の広場から移動して、今度は、図書館の前の広場、そして路地の奥まったところ、最後にマルクト広場で歌を歌う。

町の人たちはまず、子どもたちが歌を歌っていることに目を留めて立ち止まる。森の幼稚園の実態は知らないが毎年クッキーを売っていることは知っていて、この日を楽しみにしているという人がある。クッキーを買っていく町の人たちは、森の幼稚園のことを知らない人がほとんど。クッキーの売上金の一部をアフリカのトーゴに寄付すると聞いたならなおさらクッキーを買っていく。家の近所に森の幼稚園に通っている子どもが住んでいて、「あ、これが森の幼稚園か!」という人もいれば、クッキーを売っている姿を初めて見て、「森の幼稚園って何ですか?どこにあるのですか?」と聞く人もいる。クッキーを買えることを知らずにトーゴに寄付するだけ聞いてお金を寄付する人もいる。

イースターの時期にバザーをする幼稚園は他にもあるが、クリスマス時期にクッキーを売ってアフリカに寄付するプロジェクトをするのは、森の幼稚園だけ。町のめがね屋さんのご主人が取りまとめてアフリカに寄付している。つまり、町の人がおこなっているプロジェクトに協力しているということになる。この時期、子どもたちは、アフリカの文化についても学ぶ。



図 32. 森から町へ歩いて移動する子どもたち (2009年11月25日筆者撮影)



図 33. 町中で歌を歌う子どもたち (2009年11月25日筆者撮影)



図 34.町の人々と子どもたち 1 図 35.町の人々と子どもたち 2
(2009年11月25日筆者撮影)

6.2.7.地域社会の連携

クリスマスの時期、一年に一度、市長に一年間の感謝をするために市役所を訪問する。一般的な子どもたちは「市長」は、町の一番偉い人だと大人から聞くが、なぜ偉いのか、なぜ感謝しなければならないのか、よくわからない子どもが多いという。しかし、森の幼稚園の子どもたちは、市長が自分たちとかかわりがある重要人物であるということ、森の幼稚園の活動を通して知っている。

<カスターニアンプロジェクト>

毎年、秋に森の幼稚園の森でカスターニアン（クリの実だけど食べられない種類）をたくさん集めて、市の業者に手渡す。ハウスグループの子どもも合わせて、約80人の子どもたちとその家族たちが集まって、みんなでプロジェクトをする。ラインバッハの町の人たちも巻き込んで作業をおこなう。みんなで集めたカスターニアンを業者が持っていき、コンポストで土に還して、また森の幼稚園の森にもどす。人の手が加えられて、森の循環が維持されていること、そのサイクルを子どもたちは活動を通して知っていく。

町を巻き込んだこのプロジェクトは市長の協力、許可がなければ成り立たない。子どもたちが実際に市役所に市長を訪ねてカスターニアンのプロジェクトのお話をする、市長はそれを支援、協力してくれていて、来年も継続してくれることがわかった。子どもたちは、直接市長と顔を合わせることで、市長の重要な役割のほんの一部を直接知ることができている。

一年に一度、市長を訪ねる日は、自分たちと市長のつながり、また、町の仕組みについて知ることのできる日で、子どもたちにとっても森の幼稚園にとっても重要な日だと先生は言う。



図 36.市長と子どもたち 1 図 37.市長と子どもたち 2
(2009 年 12 月 8 日筆者撮影)

以上のような森の幼稚園の子どもたちと町の人々とのかかわりからわかるように、森の幼稚園の子どもたちは、森を訪れる町の人々はもちろんのこと、森を訪れない町の人々に加えて、公務員である Förster や市長などさまざまな人々に見守られ支えられながら育っている。つまり、市民と行政が連携して森の幼稚園の子どもたちを育てているといえる。

6.3.不確実な自然

森の中では毎日状況が異なる。季節や天候によって見られる動植物は違ふし、動植物の変化、成長が見られ、そのことにより子どもたちは、毎日新しい発見をしていく。一般的な幼稚園では、ある程度予測できる場所で予測できるものを使って教育されているが、森の幼稚園では、管理された森（自然）の中で活動が展開されているとはいえ、次に何が起こるか分からない。森のなかを歩いていてどのような場面や場所で、どのような生き物に出会うのか予期せぬことが多いといえる。また、雨、風、雪、寒さ、暑さなど、天候の変化が常にあり、それによって、自分たちが対応する術を考え行動をとらなければならない。晴れていたのに突然雨が降ってきた、道がない森の中をどう歩くのか、などの環境の変化に対応していく、対処していく力が森での活動の中で培われていく。森の幼稚園で大事なものは、自然が不確実なものとして、そこにあるかどうかあげられると考えられる。

では、実際に子どもたちはどのような体験をしているのだろうか。参与観察記録を参考にしながら説明していく。

6.3.1.天候の変化

森のなかでは、天候がころころと変わる。突然雨が降ってきたり、寒くなったりするのである。森のなかを歩いている「途中で、またヒョウ混じりの雨が強く降ってきた。子どもたちはまた急いでフードをかぶる⁵⁰。」しかし、すぐに雨がやむときもある。「先生が、今

⁵⁰ 2004 年 4 月 5 日 11 時 45 分参与観察記録より

日の出来事を問いかける。今日は何が降ってきたかな？子どもたちは口々に、雨！ヒョウ！雪！とそれぞれに発言する。そして、先生は、上をみてごらん。青い空だね。太陽もきれいだね。と言うと、子どもたちは空を見上げる⁵¹。」という記録からもわかるように、子どもたちはたった半日のうちにさまざまな天候を体験している。

「マティアス（6歳の男の子）が温度計のところに行って気温を測っている。子どもたちは毎日、天気や気温を調べて自分たちで記録する。4月は天気が変わりやすいから特に面白い。先生は、“Wind und Wetter”（風と天気）という本を読んで、地球の営みを子どもたちにわかりやすく説明する⁵²。」というように、先生は子どもたちに天候や気温の変化に気づかせ、子どもたちはその仕組みを知識として得ていく。「バウワーゲンの隣の広場においてある温度計に、マティアス（6歳の男の子）たちが集まって観察している。そして、観察している男の子たち4人が、『風がこっちから吹いているから、この風受けがこっちに向けて動くんだ』などと言いながら話し合っている⁵³。」「森の中と森の外で気温を測ることは重要。夏は森の外に比べて森の中のほうが涼しいし、冬は森の外に比べて森の中のほうが暖かい。子どもたちは毎日の天気と気温を調べると同時に、月ごとに森の気温と森の外の気温も計っている⁵⁴。」このように、子どもたちは、自分の身にかかわる天候や気温の変化に興味を持ち、その仕組みを考えていることがわかる。

あそび心を持った子どもたちは、天候や気温の変化に興味を持つだけではない。「まだ雨が降っている。森の入口で、みんなで手をつないで静かに雨の音を聴く。それから子どもたちは、上を見上げて雨を肌で感じている。口を開けて雨が口の中に入ってくるのを待っている子もいる⁵⁵。」「ヨジア（4歳の男の子）が水量を測っている。今朝、少し雨が降っていたので、けっこうたまっていて、『おお〜』と驚きながら、でもうれしそうに観察している⁵⁶。」「森の入口に到着。金曜日から日曜日まで降り続いた雨によって溝に水が流れ、小さな川ができています。なかなか流れが速い。子どもたちは、『あ、水だ！』というふうに、川ができていたことを自ら発見する。そして、どうして川ができたのか子どもたちは考える。近くの大きな水溜りの中へ子どもたちはパチャパチャ入っていく。ラッセル（4歳の男の子）は近くにあった木の棒を川につっこんで、どれくらいの深さがあるか調べている様子。みんな輪になって並び始めた。ヤナ先生が川の話をはじめ。ライン川の話、アマゾン川の話・・・⁵⁷。」「いつものひとつの遊び場の前にも小さな川ができていた。これも雨によってできた川だ。いつの間にかコニー先生と子どもたちが、その小さな川を何度もパチャパチャと渡っている。『ペンギンがおうちに帰るところ』『ゾウが川を渡るところ』などいろいろ

⁵¹ 2004年4月5日12時30分参与観察記録より

⁵² 2004年4月15日10時参与観察記録より

⁵³ 2004年4月19日9時30分参与観察記録より

⁵⁴ 2004年4月22日8時55分参与観察記録より

⁵⁵ 2004年4月23日9時15分参与観察記録より

⁵⁶ 2004年4月28日11時参与観察記録より

⁵⁷ 2004年5月10日9時5分参与観察記録より

る場面設定しながら。コニー先生は子どもたちが楽しく遊べるように手助けをしている。『おお！わあ！』と言って、さっきから水を足で蹴飛ばして水しぶきが跳ぶのを楽しんでいる。ラッセルは先生からもらった麻ヒモを木の枝にくくりつけてそれを川になびかせ、水がどれくらいの速さで流れているのか調べているようだ。雨が降った後で泥土で滑って転んでも、子どもたちは全然気にしない。ヨハネス（5歳の男の子）が長い木の枝に麻ヒモをくくりつけて小さい木をまたその先にくくりつけて川に投げて釣りごっこをしている⁵⁸。」

このように子どもたちは、天候の変化からその場でのあそび方を考え、工夫してあそびはじめる。天候や季節によって、その日のあそびや予定が左右されることを子どもたちは体験をもって経験している。

6.3.2.危険から身を守る

雨が降ったり、とても寒い気候であつたりしても、森の幼稚園では「悪い天候はない、人間が天候（自然）に合わせた服装をすれば問題はない」という考え方がなされる。

子どもたちは防水ジャケットとズボンをいつも着用し、突然の雨や雪などに対応できるように服装を調える。頭を保護するための帽子、トレッキング用のしっかりした靴を装着する。冬はもちろん防寒する。毛糸の帽子の上に防水用の帽子をかぶったり、ひじまである防水手袋を装着したりする。夏も紫外線や虫から体を保護するため、帽子をかぶり、長袖の服に長ズボンという恰好をする。子どもたちは天候や気温の変化に対応することを心得ていく。つまり、危険な自然から身を守っているのである。



図 38.雨の日の服装（2009年12月15日筆者撮影）

⁵⁸ 2004年5月10日9時25分参与観察記録より



図 39.寒い雪の日の服装 (2009年12月21日筆者撮影)



図 40.夏の服装 (2009年8月20日筆者撮影)

森の幼稚園では、思いっきり走っている子どもたちをよく見かける。「帰り道、すごい勢いで走っている男の子がすごい勢いで転んだ。でも、本人は全然気にしない様子⁵⁹。」「アンドア (3歳の男の子) がふり向いた拍子に転んだ。泣くどころか、そのスリルを面白がっている⁶⁰。」「雨が降った後で泥土で滑って転んでも、子どもたちは全然気にしない⁶¹。」「ラー

⁵⁹ 2004年4月15日12時参与観察記録より

⁶⁰ 2004年4月19日8時55分参与観察記録より

⁶¹ 2004年5月10日9時25分参与観察記録より

ラ（4歳の女の子）はふかふかの落ち葉の上にダイブしているし、マティアス（6歳の男の子）はまだ穴を掘っている。思いつきり走ったり、思いつきり叫んだりしている子もいる。私は、森の幼稚園に来て、転んでも泣いている子を見たことがない⁶²。」というように、突然アクシデントは起こる。しかし子どもたちは泣かないし、驚きもしない。それは、「歩いている途中で、一人の男の子が突然転びだした。これはどうやらこれは意図的に自分から転んでいるらしい。何度も転んで、どうやったら痛くなく転べるか試しているようだった⁶³。」「マティアス（6歳の男の子）は、迎えを待っている時、砂場で何度も転んで、転び方の研究をしている。見ていると面白い⁶⁴。」という子どもがいるほどに、子どもたちは自分の身を守る術を日ごろから学んでいるのである。

また、「年齢の違う男の子と女の子2人が木の破片に釘を打ち付けて、どのくらいの力で木から釘がはずれるのか、2人で引っ張って試していた⁶⁵。」「ラーラ（4歳の女の子）はこのあいだから枝折りに夢中になっている。どれくらいの力でどのくらいの太さの枝が折れるのか試している⁶⁶。」「アンドア（3歳の男の子）はその辺の木の枝を持ってきて、どれくらいの太さまで自分の力で折ることができるか試し始めた。始めは手で折っていたが、だんだん太くなってくると、足で枝を地面に固定して折っている。もうこれ以上折れないことがわると、ひとつため息をつき、『はあ、疲れた』というかんじで向こうへ行ってしまった⁶⁷。」というように、子どもたちは自分自身の力を試し、限界を知ることができる機会がたくさんある。自分の限界を知ることによって、自分の身に危険がおよぶような危ないことをしなくなる。「森の幼稚園の子どもたちは、毎日森で遊んでいるから、どうやったら危ないか、自分自身で体験してわかっている⁶⁸。」とあるように、自分の身を危険から守ることができるようになるのである。

6.3.3.植物との出会い

森にはさまざまな植物が生息している。子どもたちは毎日、いろいろな植物に出会う。「マティアス（6歳の男の子）が大きいカスターニアン（食べられないクリの種類）の木のそばに、小さいカスターニアンの芽が出ていることを発見して、『わーお。すごいね』というかんじで、みんなで観察している⁶⁹。」ように、季節ごとに変わっていく植物を発見するだけのときもあれば、「木の幹の皮がはがれていて、そこから白い蜜が出ていたのを発見した子どもが先生を呼んで、なにやら話している。先生は、”Der Kosmos-Waldfuehrer”とい

⁶² 2004年5月3日10時20分参与観察記録より

⁶³ 2004年4月5日9時30分参与観察記録より

⁶⁴ 2004年5月13日12時25分参与観察記録より

⁶⁵ 2004年4月5日9時30分参与観察記録より

⁶⁶ 2004年4月15日9時15分参与観察記録より

⁶⁷ 2004年7月5日9時40分参与観察記録より

⁶⁸ 2004年4月7日参与観察記録より

⁶⁹ 2004年5月6日8時45分参与観察記録より

う森の図鑑をリュックから取り出して、その木の蜜を調べている。その汁は粘々していて、お風呂に入るとアレルギーが治る作用があるらしい⁷⁰。」「ヨジア（5歳の男の子）は、誰も気づかないようなイスのそばに生えている葉っぱが虫に食われて穴があいていることを発見して、マティアス（6歳の男の子）に報告している。みんな輪になって座り、先生が、植物の話始める。先生は本物を見せながら、植物が土の中でどうなっているのか説明している。『地面から出ている茎よりも、長い根が土の中にあるんだよ』というふうに⁷¹。」などというように、子どもたちが発見した植物を先生や他の子どもたちと一っしょに観察し、何という名前かでどんな特徴を持つ植物なのか、どのような構造になっているのかなどを話し合いながら知識を得ていくときもある。

また、「ラーラ（4歳の女の子）とレオン（4歳の女の子）が道の端に咲いている花を観察している。今の時期は、葉に小さなチョウの幼虫やタマゴがついている。子どもたちは、幼虫が食べた後の葉の小さな穴でさえ見逃さない⁷²。」「道に木の実が落ちている。マティアス（6歳の男の子）が発見し、興味を持った子どもたちが近寄っていく。『鳥が食べたのかな？』と子どもたちは木の実を囲んで考え込む。そして、また議論になる。次々と手が挙がり、みんな自分の意見を言っている。結論は、『たぶん、木の実を食べた鳥のうんちだ』ということになった。⁷³』というように、子どもたちは出会った植物とそれにかかわる動物たちのつながりを意識していることがわかる。

6.4.4.動物との出会い

植物と同じように森にはさまざまな動物が生息している。子どもたちはさまざまな場所でさまざまな動物に出会う。「あ、マティアス（6歳の男の子）が向こうの方で黄色い鳥を発見して『見て！鳥だ！鳥！』と言っている。図鑑を見ていたヤナ先生が、すかさずその鳥を調べる。『頭の色は何色で羽の色は何色で・・・』と言いながら⁷⁴。」「ヨハネス（3歳の男の子）が持っていた枝にたまたま青虫がついていた。ヤナ先生が通りかかって、『おお』と言っている。リュックから図鑑を取り出して、『大きくなったらこんな蝶になるんだよ』と、同じ青虫を探して説明している⁷⁵。」というように、突然思いもよらない場所で動物に出会うことがある。子どもたちは先生と協力して、動物の名前や特徴を学ぶ。

「パウル（4歳の男の子）が小さなクワガタを見つけてみんなに見せて知らせている。他の子どもなら怖がるけど、パウルや森の幼稚園の子どもたちは恐れない、とガビ先生は教えてくれた。パウルはそのクワガタを地面において、その虫がどのような行動をとるか

⁷⁰ 2004年4月7日参与観察記録より

⁷¹ 2004年4月20日参与観察記録より

⁷² 2004年4月28日参与観察記録より

⁷³ 2004年7月2日9時参与観察記録より

⁷⁴ 2004年5月27日10時5分参与観察記録より

⁷⁵ 2004年5月14日9時15分参与観察記録より

っと見ている⁷⁶。」「マティアス（6歳の男の子）が大きなカタツムリを見つけてみんなに見せている。女の子も気持ち悪がるどころか、興味津々。手の上に乗せて観察している。マティアスは違う場所で大きなカタツムリを見つけたので、道の端の葉が茂っているところにのせてあげている⁷⁷。」というように、森の幼稚園の子どもたちは、どんな特徴を持っている動物との出会いも積極的に受け入れていく。

動物との出会いは、楽しいことばかりではない。「マティアス（6歳の男の子）とレア（6歳の女の子）が鳥のヒナが死んでいるのを発見。無残な姿だ。彼らは話し合ってヒナを埋めている⁷⁸。」「パウル（4歳の男の子）はコガネムシの死骸を持って観察している⁷⁹。」「ラーラ（5歳の女の子）が『鳥の赤ちゃんを見つけた！でも死んでるけど』と呼びにきてくれた。その鳥の赤ちゃんは、まだ卵に入っていて、少し殻が割れている。子どもたちは、興味津々に観察している⁸⁰。」「アスファルトの上に小さな小さなハチが横たわっている。まだ、かすかに息はあるようだ。子どもたちは、小さなハチでも見逃さずに発見し、どうするか相談している。ハチは刺されるかもしれないという恐れがあるので、落ちている棒ですくって、わきの草むらにおいてあげていた⁸¹。」というように、生き物の「死」というものにも出会う。子どもたちはそこから、生命のサイクルや尊さを感じとっていくのであろう。

そして、生命について考える機会があるからこそ、「ヤン（5歳の男の子）が黒いカタツムリを見つけて『おお！』と驚きの表情。他の子どもたちをよんで、報告している。『見て、黒いカタツムリだよ。踏まないように気をつけてね』と言っている。ナータン（4歳の男の子）が大きな木を足で蹴っている。それを見たユリオス（3歳の男の子）が『やめてよ！木がかわいそうだ』と言って本気で怒っている⁸²。」「池に向かって歩き出した。子どもたちはカタツムリを見つけて観察したり、ピストルごっこをして騒いでいたのに、突然静かになった。『動物たちが寝ているかもしれないから静かに歩かなくちゃ』と口々に言っている⁸³。」というように、植物や動物たちの立場に立って、彼らの気持ちを察するようになる。

また、「絵本を読んでいる時、鳥の鳴き声が聴こえた。その声が、グワー、グワー、グワーという不自然な声だと子どもたちは察知したようだ。鳴き声だけで、どの鳥かがわかり、レアが図鑑で調べている。普通はクエー、クエー、クエーと鳴くので今日はその鳥は病気かもしれないと子どもたちは話し合っている。少し声を聞いただけで鳥の鳴き声の変化に気づく⁸⁴。」このような変化に気づくことができるのは、「リロ先生が『静かに～、しー』と言っている。そして耳を澄ますと鳥の鳴き声が何種類も聴こえる。風の音、植物が重なり

76 2004年4月28日11時10分参与観察記録より

77 2004年4月29日9時15分参与観察記録より

78 2004年5月27日8時50分参与観察記録より

79 2004年7月2日10時参与観察記録より

80 2004年7月6日9時25分参与観察記録より

81 2004年5月24日9時参与観察記録より

82 2004年7月22日9時10分参与観察記録より

83 2004年7月22日9時35分参与観察記録より

84 2004年4月29日10時10分参与観察記録より

合う音、飛行機の音も聞こえる。みんな目を閉じて、よく耳を澄ます⁸⁵。」「子どもたちは、また森の奥へ進む。池の近くまで来たらみんな静かにして、自然の音を聴く。何種類もの鳥の鳴き声が聴こえ、風によって揺れ、木々の葉が重なり合う音が聴こえる。池の水はとても静かだ⁸⁶。」というように、毎日自然の音を聞き、自然にふれているからである。

このように森の幼稚園の子どもたちは、毎日変化のある、次に何が起きるかわからない不確実な自然のなかで過ごしていることがわかる。そのような不確実な自然のなかで、自分たちの身を自然から守る術を身につけていく。そして、自然や自然界の仕組みに興味を持ち、生命にふれ、生態系に支えられて生かされていることを実感しているのである。



図 41.初めて見る虫を発見し追いかけて観察している
(2004年4月28日筆者撮影)

⁸⁵ 2004年5月3日10時55分参与観察記録より

⁸⁶ 2004年5月24日9時35分参与観察記録より



図 42.落ち葉についている青い虫を発見（2009年9月2日筆者撮影）
先生が、図鑑を取り出し、どの種類の鳥がこの虫を食べるのかを子どもたちに伝えている

第7章 環境教育と森の幼稚園

第6章では、Förster とのかかわり、町の人々とかかわり、不確実な自然という、森の幼稚園の3つの特徴を実際の森の幼稚園での資料をもとに説明してきた。では、これらの森の幼稚園の特徴を「環境教育」という視点からみるとどのように位置づけられるのだろうか。第7章では、まず環境教育がどのように始まり、発展していったのかという歴史を国際的な流れと日本の流れを整理して記述する。そして、森の幼稚園の特徴が環境教育からどうとらえられるのかを論理的に考察し、森の幼稚園が環境教育に果たす役割を述べていく。

7.1.環境教育の歴史

7.1.1.環境教育の国際的な動き

1962年、アメリカで『沈黙の春』という本が出版された。これは、DDTをはじめとする農薬などの化学物質の危険性を訴えた本であり、世界中に衝撃をもたらした。この本の著者はアメリカの女性物理学者であるレイチェル・カーソンである。彼女は、環境問題を提起した最初の研究者であるとされている。その後、1970年にアメリカで環境教育法が提唱された。

1972年にはスウェーデンの提唱により、歴史上初の「ストックホルム国連人間環境会議」が開催され、この会議を機に環境教育が国際的に取り込まれるようになった。1972年にはローマクラブの『成長の限界』という本が出版された。この報告書によって、人口、環境汚染、資源埋蔵量、一人あたりの食糧生産高、一人あたりの工業生産高から世界の将来を予測した結果、このまま人口が増加し環境汚染が続けば、21世紀に資源は枯渇し環境汚染は悪化して、結果、飢餓や災害などで人口が激減するという破滅的なシナリオが示された。つまり、人間とその社会において「成長の限界」があることが知れわたったのである(今村,2005,pp.11-12)。

1975年には、旧ユーゴスラビアのベオグラードで初の国際環境教育専門会議である「国際環境教育ワークショップ(The International Workshop on Environmental Education)」が開催された。そこで採択された「ベオグラード憲章」は、その後の環境教育の規範となる。ベオグラード憲章では、地球規模での倫理の構築や新国際経済秩序の確立の必要性について言及し、そのための環境教育の意義について述べている。そして、環境を改善する目的は、「人間と自然との関係、人間相互の関係を含めた生態学的関係を改善すること」であり、そのためには「各国民がそれぞれの文化に基づいて、『生活の質』や『人間の幸福』といった基礎的概念の意味を全環境との関係において明らかにすることと、いかなる行動が人間の可能性の保全と進展を確保し、環境と調和させうるのかを明らかにすること」がまず重要であるとした。そして、環境教育の具体的な目標として、関心、知識、態度、技

能、評価能力、参加の6項目をあげている(阿部,2008, pp.13-14)。

6項目の詳細は以下の通りである。

- ・ 関心：全環境とそれにかかわる問題に対する関心と感受性を身につけること
- ・ 知識：全環境とそれにかかわる問題および人間の環境に対するきびしい責任や使命についての基本的な理解を身につけること
- ・ 態度：社会的価値や環境に対する強い感受性、環境の保護と改善に積極的に参加する意欲などを身につけること
- ・ 技能：環境問題を解決するための技能を身につけること
- ・ 評価能力：環境状況の測定や教育のプログラムを生態学的・政治的・経済的・社会的・美的、その他の教育的見地に立って評価できること
- ・ 参加：環境問題を解決するための行動を確実にするために、環境問題に関する責任と事態の緊急性についての認識を深めること

1977年に旧ソビエト連邦グルジア共和国のトビリシで開催された「環境教育政府間会議(Intergovernmental Conference on Environmental Education)」で、「トビリシ宣言」と41項目にわたる勧告が出された。トビリシ勧告の2つの環境教育の基本的な目標は、「個人および地球社会は、その環境のあらゆる側面の相互作用の結果もたらされた自然や人工環境の複雑な特性を理解し、環境問題を予測し、解決し、環境の質を管理する活動に参加するための知識、価値観、制度および実際的技能を獲得すること」や「現代社会は経済的、政治的、生態的相互依存関係があることを明らかにし、環境の保護と改善を保障するような国際間の新しい秩序のための基礎として、国家間、地域間に責任感と連帯感を育成する手助けとなるべき⁸⁷⁾」だとされている。

1980年に発表された「世界環境保全戦略」は日本にはほとんど影響を与えなかったが、ドイツなどのヨーロッパ諸国の環境教育に大きな影響を与えた。このなかで「人間だけでなく植物と動物を含めた新しい倫理に適合する心構えと態度をはぐくみ強化すること」が環境教育の任務であるとしている(阿部,2008,p.15)。

1992年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで「環境と開発に関する国連会議(United Nations Conference on Environment and Development)」が開かれた。

会議では、総論にあたる「環境と開発に関するリオ宣言」と行動計画にあたる「アジェンダ21(Agenda 21)」などが採択された。「アジェンダ21」の第36項が「教育、意識啓発および訓練の奨励」という環境教育の行動計画であった。本行動計画はトビリシ会議の宣言と勧告を下敷きで作成され、特に、「持続可能な開発に向けた教育の新たな方向付け」を掲げ、「環境教育」に「開発教育」を加え、環境教育と開発教育の統合をはかったことに特

⁸⁷⁾ UNESCO, Intergovernmental Conference on Environmental Education-Final Report, ED/MD/49, 1978

徴がある。現在の「持続可能な開発のための教育(ESD)」の国際的流れは、この地球サミットから始まったのである(阿部,2008,p.19.)。

この国連環境開発会議以降、「持続可能な」という概念は国際会議のキーワードになっているが、この言葉はドイツの林野政策が地球規模の環境思想に果たした貢献の一つでもある。この概念は 18 世紀以来、ドイツの林業会で、「持続性」や「持続可能な利用」とさかんにいわれてきた流れを汲む。木材林業で「持続性」といえば、木を伐採する際に、植林の継続によって確保可能な再生中の樹木数をできるだけ超えないように配慮することをさす。19 世紀に中央ヨーロッパで森林破壊があったものの、生態系全体の破局にいたらなかったのは、持続を求める森林経済が体系的な対応策をとった結果である(レーマン,2005,p.25)。持続的な資源利用を可能とするためには、自然な樹齢区分がきちんと行われていなければならない。つまり、全樹木の樹齢層のすべてにわたり目的別に同じ質、同じ本数を確保しておかねばならない。この概念とコンセプトが十分有効だったために、「持続可能性」という森林における原理は社会の他の分野にも広がり、例えば、都市計画の分野にも応用されている(レーマン,2005,pp.25-26)。

1997 年には「環境と社会に関する国際会議」が開かれ、「テサロニキ宣言」が採択された。この会議は、社会や環境の変化に対応した新たな環境教育の枠組みの提起を意図した会議であった。テサロニキ会議において、環境教育は、開発教育や人権教育、平和教育、民主主義教育といったあらゆる教育課題と連携・融合した総合的な環境教育であるとされた。

2007 年にはテサロニキ会議からの 10 年を記念した国際環境会議がインドのアーメダバードで UNESCO やインド政府などによって開催された。同会議では ESD の具体化に向けた多様なワークショップが催されたが、過去の会合のような環境教育の方向付けをする各国政府代表者によるハイレベル会合は行われなかった(阿部,2008,pp.20-21)。

7.1.2.日本における環境教育

環境教育の国際的な流れに対して、日本ではどのような動きがあったのであろうか。日本の環境教育のはじまりは、1960 年代にはじまる水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市喘息などの公害問題からであった。1960 年に四日市につくられた石油化学コンビナートにともなう大気汚染により、喘息患者が発生し、児童・生徒をも巻き込む形で広がった。その結果、子どもの生存権保障の立場にたち、環境破壊から子どもを守り、地域を守る教育活動として公害教育が始まったのである(高橋,2002,p.18.)。

ここでは、日本の環境教育の歴史を阿部(阿部,2008)、鈴木(鈴木,1994)の著書をもとに整理してみることにする。

1965 年

各地で自然保護運動が活発に展開され、日本学術会議が「自然保護について」の勧告を内閣に対しておこなう。

1967年

「公害と教育」文科会が三重県教組主宰の教育研究集会で設けられた。

1971年

自然保護団体の全国組織として全国自然保護連合が発足する。

小中学校学習指導要領（社会科）の一部改正がおこなわれ、公害学習が明記された。その結果、文部省によって公害教育が着手され、都道府県教育委員会などによる公害教育指導資料が作成・配布された。

1975年

全国小中学校公害対策研究会は、全国小中学校環境教育研究会に名称を変更している。

1976年

環境教育研究会（東京学芸大学を事務局にした研究団体、1989年に解散）が作られ、機関誌「環境教育研究」を発行する。

1981年

国立教育研究所（1979年度から開始）のメンバーなどによる「環境教育の研究」が報告されるが、内容は主として海外の環境教育の紹介であった。とくに、ベオグラード国際会議で決められた「憲章」（いわゆるベオグラード憲章）が会議に出席した榊原康男によって解説されており、環境教育の国際動向を日本に紹介する役割を果たした。しかし、逆に日本での環境教育の先駆ともいえる公害教育や自然保護教育についての評価は見られていない。

1987年

環境庁が自治体の環境教育指針の策定を支援する地域環境教育カリキュラム策定調査事業を開始。

1988年

環境庁が「みんなで築くよりよい環境を求めて」と題する環境教育指針をとりまとめる。これは、日本の政府機関による初めての環境教育計画に位置付けられる。

環境教育の直接的導入には消極的であった文部省は、1987年の臨時教育審議会答申を受けて、①知識編重の教育を見なおす新しい学力観、②体験学習の重視、③地域との連携、④学校五日制、⑤生活科の新設、などを打ち出した。これらはいずれも環境教育に関連する施策であったが、かならずしも学校での環境教育の推進にはつながらなかった。学校現

場では環境教育は重要視されておらず、その取り組みは個々の学校にまかされていたためである（阿部治,2008,p.18）。

1990年

地球環境問題の激化を背景に文部省は「環境教育指導資料」の作成に乗り出した。

環境教育研究会を引き継ぐ形で日本環境教育学会が発足し、日本における環境教育研究の組織的基盤が作られた（鈴木,2004,p171）。

1993年

従来の公害対策基本法に代わる環境基本法が制定される。

同法第 25 条「環境の保全に関する教育、学習等」には、「国は、環境の保全に関する教育及び学習の振興並びに環境の保全に関する広報活動の充実により事業者及び国民が環境の保全についての理解を深めるとともに、これからの環境の保全に関する活動を行う意欲が増進されるようにするため、必要な措置を講ずるものとする。」と記されており、日本の法律で初めて環境教育がとりいれられた。

地球環境基金が政府によって設立され、環境教育をはじめとする NGO や市民による環境保全活動を支援する役割を果たしている。

1994年

「環境基本計画⁸⁸」が閣議決定される。その内容は以下のとおりである。

「持続可能な生活様式や経済社会システムを実現するためには、各主体が、環境に関心をもち、環境に対する人間の責任と役割を理解し、環境保全活動に参加する態度及び環境問題解決に資する能力が育成されることが重要である。このため、幼児から高齢者までのそれぞれの年齢層に対して、学校、地域、家庭、職場、野外活動の場等、多様な場において互いに連携を図りつつ、環境保全に関する教育及び主体的な学習を総合的に推進する。

その際、自然の仕組み、人間の活動が環境に及ぼす影響、人間と環境の関わり方、その歴史・文化等について幅広く理解が深められるようにするとともに、知識の伝達だけでなく、自然とのふれあいの体験等を通じて自然に対する感性や環境を大切に思う心を育てることを重視する。特に、次世代を担う子どもに対しては、人間と環境の関わりについての関心と理解を深めるための自然体験や生活体験の積み重ねが重要であることに留意し、そのための施策の充実を図る。」

⁸⁸環境庁編,1994,『環境基本計画』, pp.66-69.

1999年

中央環境審議会は、「これからの環境教育・環境学習」と題する環境教育の指針をとりまとめた。

2004年

「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」に基づいて策定された基本方針では、環境教育を推進していくための具体的措置が盛り込まれている。同法は環境省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省の五省が所管しており、従来は環境教育を主要な政策として取り組むことができなかった農林水産省、経済産業省、国土交通省が環境教育に正面から取り組むことが可能となり、環境教育の幅を広げることにつながった。

日本の学校（義務教育）における環境教育

文部省による「環境教育指導資料」は、学校での環境教育推進のきっかけにはなったが、その推進は個々の学校に任されていた。しかし、1990年代になると文部省は積極的に環境教育の取り組みをおこなうようになる。

第15期中央教育審議会（1996年）は、現代は先行き不透明の時代であるとし、これからの子どもたちに必要な能力は「生きる力」であることを指摘した。「生きる力」とは自分で物事を考え、判断し、行動する力と健康であると文部省は述べている。そして、体験学習の推進と同時に情報化・国際化・環境問題などの現代的課題への取り組みの重要性を打ち出した。その結果、答申のなかに環境教育の取り組みが大きく位置づけられたのである。さらに生活科の延長ともいえる「総合的な学習の時間」を小学校3学年以上、高校までの必修授業として位置づけた。文部省が総合学習で取り組む課題として環境、福祉、国際、情報を例示したことで環境教育を総合学習のひとつとして取り入れる学校が急増した。

しかし、総合学習の導入と同時におこなわれた学校週五日制度の導入や授業時間の削減に対して、学力低下を招いたとの批判が産業界や保護者などから出たことや、経済協力開発機構(OECD)の国際学力テスト(PISA)の成績が不振だったことなどから、新学習指導要領(2008)においては総合学習の時間は半減することとなる。

2006年の教育基本法の改正に際して、「環境の保全の態度を養うこと」が教育の目標に加わり、教育基本法の改正を受けた学校教育法の改正(2007)では義務教育の目標のひとつとなった。(中略)総合学習の時間の削減とあわせて、環境教育の扱いは十分とはいえない(阿部治,2008,pp.25-27)。というように、日本では環境教育の普及、内容が十分ではないことが指摘されている。

7.2.環境教育とはなにか

ここまで、環境教育がどのように考えられ発展してきたのかという、世界的な流れと日本国内でのおおまかな流れについて述べてきたが、環境教育とは何か、という根本的な問題を考えてみたい。

日本では、公害問題をどう解決していくか、公害を起こさない社会をつくる人を育てるという教育から、海外の動きに応じつつ環境教育へ移行していくが、行政レベルで環境教育の取り組みが本格的に展開され始めるのは1987年以降である。それまでは環境教育という言葉が日本でも定着するようになるが、実践活動は必ずしもそれに伴わず、全体としては低調であった（鈴木,2004,p169）。1970年代初頭には公害教育、自然保護教育が取り込まれるようになったが、いずれも公害反対運動や自然保護運動への行政や企業などの抵抗により、広範な活動とはならなかった（阿部,2008,pp.12-13）。と述べられているように、日本の環境教育は、制度化され、政治的に抑えられた狭い意味での環境教育であり、全体的に広がらなかったといえる。

そして近年、日本の学校教育の中でも環境教育という言葉聞くようになったが、環境教育関連の計画が立てられていないこと、全体として扱う内容・機会に偏りがあること、環境教育を取り上げる際に扱いやすい環境問題に偏りがちであること、目標の設定が広範囲すぎるなどという問題があげられている（堀,2007,p.90）。また、教師側は環境教育が系統的でない、一方、子どもにとっては環境学習で入ってくる知識が断片的であるという問題があり、環境教育は総合学習で取り上げる場合が多いので「子どもたちに環境問題に関心を持ってもらえれば、あるいは環境と環境問題に関わりがあれば何を取り上げてもよい」ということになり、子どもたちにとっても教える教師にとっても断片的なものになりがちである（堀,2007,p91）。つまり、現代の日本での環境教育は、学校教育のなかで、おもに理科教育のなかで取り上げたり、総合的な学習の時間などで環境教育を教科として扱うなど、環境教育の全体性がみえない、狭められたものになっているのである。このような問題が起きてくるのは、「環境教育」とは何か、という根本的なことをよく考えた上でおこなっていないということが原因のひとつとしてあげられる。日本では公害教育や自然保護教育という言葉が先行していたが、国際的な動きの影響と環境問題に対する認識の変化もあって、環境教育という言葉が使われ出すようになる（鈴木,2004,p.169）。と述べられているとおり、日本では国際的な動きの影響から環境教育というものが輸入された形で導入されてしまっているがゆえに、環境教育とは何かということを明確に提示できていない。

原子によると、環境教育は、自然教育、自然保護教育、野外教育、農村学習、都市学習、進歩主義教育運動などの流れを受けて、自然環境破壊や都市部での環境汚染が顕現化した1960年代後半に、問題解決型の教育として登場した（原子,1998）、としている。上記の環境教育における国際的な動きのなかで、国際会議等で採択された宣言や条例などでも、たとえば1975年のベオグラード憲章で採択された環境教育の具体的な目標では、環境問題に

対する関心を持ち、環境保護や環境改善に参加する意欲を身につけ、環境問題を解決するための技能を身につけることが表現されており、1977年のトビリシ宣言と41項目にわたる勧告では、「環境問題を予測し、解決し、環境の質を管理する活動に参加するための知識、価値観、制度および実地的技能を獲得すること」と明記されている。つまり、環境教育は環境問題の解決を担う教育として登場したのである。

しかし原子は、環境教育は単に環境問題解決の手段としての教育を指すだけではないと指摘している。18世紀末以後に西欧諸国を中心にして起こった産業革命によって社会が変化していき、その結果、教育も変化していった。私たちが今、一般的に指している教育とは、産業的・工業的な教育、産業・工業を原理とする教育であり、これに対して、環境を原理とする教育が **environmental** な教育、環境教育である、と原子は述べている。環境教育を「**environmental** な教育」としてとらえているのである。

御代川・関(2009)によると、環境教育の目的は、「環境を理解し、環境問題に気づきあるいは問題を予測し、その問題の分析と解決を助け促す知識と能力を学習者に獲得させ、環境問題の解決に取り組む市民を育成することである(御代川,関,2009,p.263)。」としている。しかし「環境」といっても、どのような「環境」なのかがよくわからない。

では、「環境(environment)」とはなにか。どのような意味が含まれているのだろうか。**Environment** という言葉の意味は、1970年代から複数の語彙や曖昧な内容が付されるようになる。1971年には国際フランス語評議会によって、**Environment** とは、「生物と人間活動に直接・間接の、即時的・長期的な影響をもたらすと考えられる物理的・化学的・生物的なすべての作用と社会的要因(マターニュ,2006,p.234)」であると定義され公認された。しかし、物理的・化学的・生物的な作用と社会的な要因から環境をとらえようとしても正しくとらえることができない。人間が主体となり環境をとらえる場合、そこには人間の内面的なものが含まれてくるからである。

鬼頭は環境倫理学をとらえるときに、その前提として「環境(environment)」とはなにかをきちんと考えていく必要がある、と述べている。そして、「環境」とは、「取り囲むもの」であり、「主体」があってはじめて「環境」がある。それゆえ、そのときの環境は「自然」に限らないのである。環境には、自然的環境、社会的環境、精神的環境の3つの側面がある(鬼頭,2009,p.15)、としている。環境問題をとらえるときに、自然的環境、人間がつくりだした社会的環境、そして個々の人間が持つそれぞれの精神的環境という互いに密接に関連している問題を、全体としてとらえることなく自然的環境の問題にのみ焦点を当て、とらえてしまうと、その環境問題を正しくとらえることができない。

「環境教育」を考えるときも同様に、その前提として「環境(environment)」とはなにかを考える必要がある。そして、理科教育としての環境教育や教科教育としての環境教育ではなく、もっと広く、人間をとりまく自然的環境、社会的環境、精神的環境の3つの領域を全体として考えられなければならない。私たちが考えるべき「環境教育」は、自然的環境、社会的環境、精神的環境の3つを全体としてとらえ、単に環境問題解決に限定するこ

となく、自然と人間、人間と人間の間を考えた、そのなかで人がどのように生きていくべきなのかということを考える教育なのである。

7.3. 森の幼稚園とエコロジー

あるべき環境教育の姿が見えてきたが、森の幼稚園はそのような教育、つまり自然的環境、社会的環境、精神的環境の 3 つを全体としてとらえる環境教育がなされているといえる。それは、文章においてもラインバッハの森の幼稚園の規約のなかで的確に表現されている。

ラインバッハの森の幼稚園の目的の第一番目に、「子どもたちを小学校にあがるまで、社会教育を通して個々の世話と就学前教育を可能にし、社会構成の中で、ヒューマニズムとエコロジーの意識を育てる⁸⁹」

„Zweck des Vereins ist es, den Kindern bis zur Einschulung durch sozialpädagogische, individuelle Betreuung und vorschulische Erziehung zu ermöglichen, im sozialen Gefüge einer Gruppe ein humanitäres und ökologisches Bewusstsein zu entwickeln.“

と記されており、「エコロジーの意識を育てる」ということが森の幼稚園の目的のひとつとして掲げられているのである。エコロジーという言葉は日本語にすると、生態系、生態学などという意味として使われるが、ドイツやスイスの人々にとっては、限られた自然に責任を持ち、次世代に残していくようにというニュアンスが含まれるようである。では、ここでいう「エコロジー」という言葉は、どのような意味をもっているのだろうか。

7.3.1. エコロジーの言葉の歴史

エコロジーという言葉は 1866 年、ドイツ人博物学者であるエルンスト・ヘッケルによって生み出された。ヘッケルはギリシャ語で家を意味する「オイコス」と学問をあらわす「ロゴス」を合わせて「エコロジー」という造語を生み出したのである。その「エコロジー」の意味は、「生物及び、生物と外界のさまざまな関係についての科学」であった（マターニュ,2006,p.97）。

19 世紀に生態学が科学研究の一分野として成立した。それは、ドイツ文化圏の人々が担ってきたものである。彼らは、生態学という言葉を知らなかったにもかかわらず、今日の生態学者たちが使っている基礎的な用語を最初に生み出し、定義してきた。「エコロジー」は、個体を取り巻くさまざまなレベルを対象としていた。

19 世紀後半から特に生態学や生態系という意味が強い「エコロジー」という言葉が存在していたが、1960 年代から 70 年代にかけて、「エコロジー」という言葉は社会的思想言語として新たな意味を持ってきた。1960 年代以降の先進諸国の急速な経済成長を背景として、資本主義の生産至上主義や、それと連動する消費社会の矛盾や悪弊を正そうとする動きの

⁸⁹ Elterninitiative Naturkindergarten e.V. Rheinbach Satzung Stand: 15.10.2010 より筆者翻訳引用

なかから新たな意味を持つ「エコロジー」という言葉が広がり始めたのである。資本主義批判としてのエコロジーの思想や運動が登場した時期は、同時に、資本主義が新自由主義的グローバリゼーションを推進する初期微動を開始した時期でもあった。そして、1980年代から90年代にかけて新自由主義的グローバリゼーションが本格化し、エコロジー運動も政治の表舞台に出現しはじめる。たとえば、先進諸国における「緑の党」の創設や自然保護運動の高まりなどがそうである。しかしその後、エコロジー運動の流れは急速にグローバリゼーションの波に飲み込まれて雲散霧消するか、資本主義の自己調節機能のなかに取り込まれるかして、現在にいたっている（杉村,2008, p.141）。エコロジーという言葉は、生態学や生態系という意味と社会的な思想を含む意味が曖昧に重なり合っている。

7.3.2.エコロジーとはなにか

エコロジーとは、もともとは一般に生物と環境の関係を扱う学的分野のことである。近年において、日本でエコロジーというと、言葉の意味としては生態系、生態学として使われるが、一般的には環境問題が語られる。しかし、環境の問題を環境の問題としての視点でのみとらえ、解決しようとしても無理がある。環境問題は、環境の問題と社会の問題、人間の心のあり方という3つをあわせて考えることによって環境問題を解決していくことにつながっていくのである。そのことを三つのエコロジーの概念として提唱しているのがフェリックス・ガタリである（ガタリ,2008）。環境の問題は単に環境の問題だけにとどまるのではなく、全体にかかわってくる。自然環境、人間が作りだした社会環境、そして人間の内面のあり方、人間の生き方にかかわる精神環境というものがかかわってくる。この考え方が三つのエコロジーの根源にある。

ガタリの三つのエコロジーの考え方は、鬼頭のいう環境の3つの側面である自然的環境、社会的環境、精神的環境と同じとらえかたである。

7.3.3.森の幼稚園におけるエコロジー

森の幼稚園と、このエコロジーの考え方は、どのようにかかわってくるのだろうか。第6章でとりあげた森の幼稚園の特徴を整理してみると以下のような事柄が浮かび上がってくる。

●Förster とのかかわり

Förster が毎日森に出入りし、森を管理しているというドイツの社会的な仕組みにより、森の幼稚園の子どもたちは、まったくの自然の森のなかであそんでいるわけではなく、ある程度の安全性が考えられた上で活動している。そして、森で仕事をする Förster の姿を見る機会があるので、誰かに意図的に教えられることがなくても、人の手を加えて生態系を維持する方法を日常的に学んでいる。また、Förster から森や森に生息する動植物のことなどを教えてもらう機会があり、森や自然についての知識を専門的に習得することができる。

●町の人々とのかかわり

町に隣接している町の森で、森の幼稚園が展開されているため、町に住んでいる多くの人々が森を訪れるという構造から、森の幼稚園の子どもたちは、幼稚園の友だちや先生とのふれあいはもちろんのこと、**Förster**を含め、森に自由に出入りする町の人々との接点を持つことができている。子どもたちは森のなかで、いつ、どこで、どんな人と出会うかわからない。子どもたちはその場の状況に対応していかなければならないのである。子どもたちにとって、森を訪れる町の人々とのかかわりは、社会のことについて知るだけでなく、コミュニケーション能力の促進にもつながっている。

また、森の幼稚園の子どもたちは、森を訪れる町の人々はもちろんのこと、森を訪れない町の人々に加えて公務員である **Förster** や市長など、さまざまな人々に見守られて育っている。

●不確実な自然

管理された森とはいえ、次に何が起こるかわからない自然のなかで子どもたちは過ごしている。森のなかを歩いていてどのような場面や場所で、どのような生き物に出会うのか予期せぬことが多い。また、天候の変化が常にあり、それによって自分たちが対応する術を考え、行動をとらなければならない。つまり、危険な自然から身を守ることを学んでいる。そして、動物の死や自然現象を体験することによって、人間にはどうすることもできないこと、人間の限界を知る。また、動植物と出会うことによって、自然や自然の仕組みに興味を持ち、生態系に支えられて生かされていることを実感する。

森の幼稚園の子どもたちは、森のなかで五感を使って自然を感じ、自然の神秘や偉大さに感動し、動物、植物、自然現象がどのようにかかわりあっていて、そのなかで自分たち人間がどのように寄り添っていくのか、ということを考えていく。森や自然、自然界の仕組みについて興味を持ち、知識を習得することや、不確実な自然とのふれあいのなかで生命にふれることによって、生態系に支えられて生かされていることを実感として知るのである。これらの経験、体験は、子どもたちの精神的な思いや価値観として、それぞれの子どもたちのなかに刻まれていくのであろう。また、**Förster** の森での働きを日常的に間近で見ていることによって、人の手を加えて生態系を維持する方法を学んでいく。それは、人間は自然と切り離された存在なのではなく、自然の一部であることを知ることにもなる。

子どもたちは、森の幼稚園にただで森を訪れる町の人々や **Förster** とのかかわりを持つことができる。そのことを通して対応能力、コミュニケーション能力を身につけ、社会的な視点を身につけていく。また、森のなかでひとりになることは滅多にないというほど、町の人々がよく訪れる森で活動することによって、森を訪れる町の人々はもちろんのこと、さまざまな職業の人たち、市長や **Förster** に見守られながら育っていることがわかる。つま

り、森の幼稚園の子どもたちは、市民と行政が連携して地域社会によって育てられているのである。このような地域社会が連携して教育を支えることは、社会教育として重要な視点である。森の幼稚園があることによって、地域社会の人々や行政とのつながりが強くなる。日本で社会教育というと、例えば、ボーイ・スカウト、子ども会、少年団、児童施設、児童文化などに参加する子どもたちを地域社会で支えていくことととらえられる。つまり学校教育以外の場所でおこなわれる教育を学校教育の「補足」として地域社会で支えていくことととらえられることが多い。しかし森の幼稚園には、森の幼稚園そのものに社会教育的な要素も含まれているのである。

Försterによって森が管理され、地域の人々によって見守られている「安全性」が確保されている森の幼稚園だが、同時にそこには「不確実な自然」がある。これはどのようにとらえられるであろうか。森の幼稚園では、悪い天候というものはなく、天候に合わせた服装をすることによって、自分たち人間が自然に合わせるという考え方がなされる。つまり、自分の身を自然から守る教育がなされている。これは、野外教育でおこなわれている教育と同じことである。野外教育とは、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持っておこなわれる自然体験活動の総称⁹⁰」であるととらえられ、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動がおこなわれる。たとえば、青少年自然の家などでのキャンプは、学校教育で実施されることがよくある。「青少年にとっての野外教育は、自然の厳しさや恩恵を知り、動植物に対する愛情を培うなど、自然や生命への畏敬の念を育て、自然と調和して生きていくことの大切さを理解させる機会を与えることとなる⁹¹」とあるように、「自然の厳しさを知る」、つまりは自然の中に出かけていき、さまざまな活動をおこなうことによって、サバイバル精神を養い、危険を回避したり安全を確保したりする能力や自らの安全は自らが守るという意識を高める教育がなされている。

しかし、自然のなかで危険を回避したり、安全を確保したりすることだけではなく、その自然の厳しさとどのようにつきあっていくかということも考える必要がある。鬼頭は、「自然には恵みもあり、保護し、恵みを受けられるようにするのが必要であると同時に、自然には脅威もあり、その脅威とどうつきあうのかということも考えなければならないのである（鬼頭,2009,p.14).」と述べている。自然は、人間が管理できる面とコントロールできない面を持っている。森の幼稚園での安全だが不確実な自然という場、それは、

⁹⁰ 文部科学省「青少年の野外教育の充実について」青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議 1 野外教育の概念

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm

(2012年1月15日取得)

⁹¹ 文部科学省「青少年の野外教育の充実について」青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm

(2012年1月15日取得)

Förster が手を加えて生態系を維持し、管理している森（自然）のなかであそぶことによって、子どもたちは、人間が自然を管理することができることを知る一方で、次に何が起こるかわからない不確実な森（自然）のなかであそぶことによって、自然は人間がコントロールできない面を持っており、人間には限界があることを知ることなのである。子どもたちは、安全性と不確実性という 2 つの面がある自然のなかで、自然や人間とどのようにつきあっていくのかということを学んでいる。

このように森の幼稚園の特徴をみると、狭い意味でのエコロジー、つまり、生態系、環境問題、自然保護や環境汚染などという意味だけではなく、それらを含めた人間同士のつながりがある社会、自然と人間のつながりがある社会、また、動植物や自然現象が含まれた全体的な自然、そして、人間の感情、思いや価値観などの内面的な精神といった広い意味でのエコロジーを森の幼稚園では意識している。だからこそ、ラインバッハの森の幼稚園の規約には、「社会構成のなかでヒューマニズムとエコロジーの意識を育てる」という目的が掲げられているのである。

また、森の幼稚園は、社会教育的、野外教育的な要素を含んでいるということがいえる。しかし、日本では、環境教育、社会教育、野外教育はそれぞれ別の枠でとらえられてしまっており、それぞれの教育の要素は別のものになってしまっている。それゆえに、森の幼稚園は、従来の日本での狭められた意味でとらえられた「環境教育」ではとらえきれない。森の幼稚園は、社会教育、野外教育の視点も含めた自然的環境、社会的環境、精神的環境を全体として見るといった広い枠組みで見たときにはじめてとらえることができるのである。

7.4. 森の幼稚園における自然とふれあうことの意味

筆者が初めて森の幼稚園を訪れたとき、話には聞いていたが、本当に子どもたちは、「森」の中であそんでいる！限りない空間、自然のすべてがあそび道具になり、毎日違う発見がある！いくら大声を出しても、いくら走り回っても大丈夫、そのスケールの大きさに、ただただ驚いたことを覚えている。一見、単なる森で、子どもたちはあそんでいるように見えるだけだった。しかし森の幼稚園が展開されている森の背景を調べていくうちに、Förster が手を加えて森を管理、維持していること、Förster は人と自然、人と人をつなげる役割を持っており、森の幼稚園の子どもたちにとっても重要な役割を果たしていること、森を訪れる地域の人々は、何気なく散歩やスポーツなどをしにきているのだが、実は、森の幼稚園の子どもたちにとって、コミュニケーション能力や社会性を身につける上で、その役割を果たしていること、安全性が考慮されているが、次に何が起こるかわからない「不確実」な自然の中に出かけていき、人間の限界を知ることができることなどが見えてきた。子どもたちは、毎日、森という自然の中に出かけていくことによってもちろん、さまざまな動植物に出会い、新しい発見をしていく。それに加えて Förster や幼稚園以外の森を訪れる人々との接点を持つことができていることによって、自然、社会、精神という 3 つの領域

での環境とふれあっている。

このような参与観察記録が記録されている。

2004年5月7日（金）雨

11:30 いつもの森のコースを歩き始める。子どもたちは道に咲いている草花や、落ちている木の実、コケなどを拾い集めている。

12:00 「マリコ、こっちを見ちゃダメだよ」と子どもたちに言われ、後ろをむいて歩く。「もう、見ていいよ」と言われ、ふり向くと、みんなが集めた植物で、私のために大きなオブジェをつくってくれていた。なんだかすごいぞ。太陽のかたちにつくられている。そして、真ん中には木が立てられている。「これは、いつもマリコに太陽の光があたっていますよ」という意味。そして、木はボクたち生き物に酸素を提供してくれている。だから木は生きていくために必要なもの。マリコにも、いつも必要なものが与えられますよ」という意味が真ん中の木に込められているんだ。」とマティアス（6歳の男の子）が説明してくれた。みんな輪になって座って、一言ずつメッセージを言ってくれた。マティアスは、「日本に帰っても、いつも、マリコが神さまから守られますように。いいことがたくさんありますように。そして、またいつか、この森の幼稚園にもどってきてね」と言ってくれた。いつも私と手をつなぎたがらなかったヤン（5歳の男の子）は、「もし日本で森の幼稚園をつくる時、子どもたちといい関係をつくってね。マリコにたくさんの幸せがありますように。日本に気をつけて帰ってね」と言ってくれた。

たった5年や6年しか生きていない子どもたちが、本当にこのようなメッセージを私に残してくれたのだ。かつて私が幼稚園児だったとき、太陽の意味、人間が生きていくために必要なものは何なのか、また、人間同士の関係について、自分の中で明確にし、発言することができたろうか？もう、そんな昔のことは忘れてしまったが、そんなことは考えもしなかったと思う。やはり、毎日自然の中で、本物の自然物に触れ、自分で何かを考える時間がたくさんあるから、このような言葉が自然に出てくるのかもしれない。そして、このようなオブジェを見ていると、言葉で説明してくれた以上にその意味の深さが伝わってきた。言葉で言い表せない「何か」というのは、とても強い印象として心に刻み込まれる。人生を悟っているかのような子どもたちのメッセージは私にとってとても衝撃的で、私の「森の幼稚園」への興味が、いっそう強くなった。

一般的に幼児期における環境教育というと、幼児にできるだけ自然環境にふれさせること、自然とふれあうことを通して環境への興味を持ち、環境問題を解決していく人間を育てることであると示される、つまり自然体験が強調される。しかし、どのような自然とのふれあいなのか十分に言及されていない。その「自然とふれあうこと」の内容こそが、環境教育において考えられなければならない重要なことである。

森の幼稚園において自然とふれあうということは、単なる自然そのものとのふれあいだけではない。人間は自然と切り離された存在ではなく、自然のサイクルの一部であることを認識する「Förster とのふれあい」、いつ、どのような場所で、どのような人に出会うかわからないことで、それに対応していくコミュニケーション能力が育ち、地域社会とのつながりをもつことができる「森を訪れる町の人々とのふれあい」、次に何が起きるかわからない状況に対応していくことが求められ、人間にはコントロールできない自然があること、人間には限界があることを知る「不確実な自然とのふれあい」がある。

森の幼稚園において自然とふれあうということは、さまざまな意味を持つ自然や、自然にかかわる人々とふれあいのなかで、自分自身が生かされていることを感じ、また、どのように生きていくのかということを考えることなのである。

7.5. 森の幼稚園が環境教育に果たす役割

環境問題は、環境問題そのものだけに焦点を当てても解決できない。人間が引き起こしてしまった環境問題には必ず、人間の社会的な問題や精神的な問題がかかわっているからである。それらの問題を全体としてみることによって初めて、環境問題をとらえることができる。環境教育にとって重要なのは、ものごとを見るときに、そのことにかかわるさまざまな関係を考慮しながら、全体としてとらえることである。しかし、現代の日本の環境教育には、そのような視点が希薄である。人と自然の関係が切り離され、地域社会のつながりが薄くなり、科学技術が発達したために日常生活において、人間がコントロールできることが増えた。科学があれば便利なものが次々と生まれ、誰にも頼ることなく生きていくことができると思っている人さえいる。現代社会の人々は「つながり」がない生活をおくっているのである。それゆえに環境教育を総合的な学習の時間のなかで「教科」として取り扱い、理科教育のなかで環境問題のみに焦点を当てた授業をし、断片的な知識だけを習得しているという現実がある。

森の幼稚園では「Förster とのふれあい」「森を訪れる町の人々とのふれあい」「不確実な自然とのふれあい」のなかで、ものごとの「つながり」を実感として知ることができる。その視点が、ものごとを見るときに、そのことにかかわるさまざまな関係を考慮しながら、全体としてとらえることにつながるのである。

先行研究で紹介した通り、井上は幼児期の環境教育とは、「幼児期の発達理解を元に、子どもの主体的な遊びを重視しながら、持続可能な社会形成につながる環境観を形成する営み」である（井上 2009）、と述べている。ものごとのつながりを実感として知り、全体とし

てとらえる森の幼稚園の教育は、まさに「持続可能な社会形成につながる環境観を形成する営み」なのである。森の幼稚園は幼児期の環境教育を本質的に果たしているといえるのではないだろうか。また、森の幼稚園は環境教育の役割を果たすだけでなく、現代の教育に求められている教育をも果たしているといえる。

日本の文部科学省は、1996年7月19日の第15期中央教育審議会答申において、環境教育の取り組みを大きく打ち出すとともに、「豊かな人間性など時代を超えて変わらない価値のあるものを大切にするとともに、社会の変化に的確かつ迅速に対応する教育が必要である」こと、さらに「子どもたちが、それぞれ将来、自己実現を図りながら、変化の激しいこれからの社会を生きていくために必要な資質や能力を身につけていくこと」が重要であるという今後における教育のあり方を打ち出した⁹²。また、それらの教育をおこなっていくためには、家庭や地域社会が連携して地縁的な地域社会の教育が必要であることを述べている⁹³。

これまで述べてきた森の幼稚園の特徴、すなわち、人間は自然と切り離された存在ではなく、自然のサイクルの一部であることを認識する「Förster とのふれあい」、いつ、どのような場所で、どのような人に出会うかわからないことで、それに対応していくコミュニケーション能力が育ち、地域社会とのつながりをもつことができる「森を訪れる町の人々とのふれあい」、次に何が起きるかわからない状況に対応していくことが求められ、人間にはコントロールできない自然があること、人間には限界があることを知る「不確実な自然とのふれあい」という要素は、今、教育全体において求められている、「地域社会や自然とのつながりのなかで、社会や環境の変化に的確に対応し、生きていくために必要な資質や能力を身につけていく」という教育である。森の幼稚園は、環境教育を超えた教育全体のあるべき姿なのである。

⁹²文部科学省中央教育審議会「第1部今後における教育の在り方」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701e.htm
(2012年1月26日取得)

⁹³文部科学省中央教育審議会「第1部今後における教育の在り方」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701c.htm
(2012年1月26日取得)

謝辞

本研究をすすめるにあたって、また、本論文をまとめるにあたり、たくさんの方にお世話になりました。

まず、ラインバッハの森の幼稚園の先生、特に **Liselotte Dams** 先生、**Gabriela Böhme** 先生には学部時代から長くお世話になり、森の幼稚園のことだけでなくドイツの文化や生活についてまでたくさんを教えてくださいました。幼稚園の子どもたち、保護者の方々にも感謝いたします。**Förster** の **Hans Lenzen** 氏にはドイツの森について知りたいとしつこく訪問させていただくことを快く受け入れてくださり、詳しく教えてくださいました。ラインバッハ市長の **Stefan Raetz** 氏は学部時代から気にかけてくださり、私のような日本の一学生が小さな研究活動をすることに興味を持ってくださり、さまざまな面で協力してくださいました。

なによりも、私を、森の幼稚園に導いてくださった老川順子先生・**Markus Radscheit** 氏ご夫妻には感謝してもきれないご厚意をいただきました。右も左もわからない私のドイツでの生活全般、また研究活動にも全面的にご協力くださり、家族のようにかわいがっていただき面倒をみていただきました。

ベルリンの森の幼稚園の **Alfred Cybulska** 先生には、私のつたない研究に多大なる興味を寄せてくださり、寝る間も惜しんで議論してくださり論理的な部分にご助言をいただきました。留学先の **Stuttgart** 大学では、専門外にもかかわらず、指導してくださった **Ortwin Renn** 教授には、専門的なドイツ語がわからない私にも親切に根気強く接してくださり、ご助言をいただきました。**Max Oehninger** 氏にはドイツ語の文献や資料を読むにあたって、ドイツやスイスの文化や背景も含めてわかりやすく解説してくださり、翻訳のお手伝いをしていただきました。ドイツ留学、ドイツでの研究活動、またドイツでの生活にかかわってくださったすべての方々に感謝申し上げます。森の幼稚園というものを通して、さまざまな出会いがあり、私の人生が形作られてきたのだと思います。

指導教官である鬼頭秀一教授には本当にお世話になりました。研究活動において、怠惰な面が多くあった私に対しても辛抱強く見守り、たくさんのご助言、ご配慮をいただきました。また、さまざまな相談を親身になって受け止めてくださいました。私が長い間、森の幼稚園に携わり、研究活動を続けていくことができたのも、ご理解ある鬼頭先生がいらったからこそだと思っております。本当にありがとうございました。

また、神田順教授からはさまざまな視点からご助言をいただきました。鬼頭研究室のみならず、特に先輩である福永真弓さんや折戸えとなさんにはたくさんのご指導とサポートをいただきました。他の研究室のみならず森の幼稚園に興味を寄せていただき、ご助言をいただきました。全員のお名前をあげることはできませんが、本当にお世話になりました。

最後に私を陰で支え、研究活動を応援してくださった両親に感謝します。

【参考文献】

- 阿部治, 1992, 「生涯学習における環境教育」『生涯学習としての環境教育実践ハンドブック : 21世紀に向けて地域のより良い環境づくりのために』, 第一法規出版.
- 阿部治, 2008, 「世界と日本の環境教育の歩み」, 日本環境教育フォーラム編, 『日本型環境教育の知恵』, 小学館クリエイティブ.
- Bickel, K., 2001, *Der Waldkindergarten Konzept Pädagogische Anliegen Begleitumstände Praxisbeispiel Wyk auf Föhr*; NordenMedia.
- 藤岡貞彦編, 1998, 『環境と開発の教育学』, 同時代社.
- 福田靖, 2006, 『森の幼稚園と環境教育のかかわり-五感を使って自然を体験する-』, 紀要 visio: research reports 35 九州ルーテル学院大学.
- FORSTCONSULT RUDOLPH & TAUSCH., 01.01.2004, *Forsteinrichtung Stadt Rheinbach Allgemeiner Teil*.
- FORSTCONSULT RUDOLPH & TAUSCH., 2004, *Forstgeschichte des Stadtwaldes Rheinbach*.
- ガタリ, F., 2008, 杉山昌昭訳, 『三つのエコロジー』, 平凡社. [原著: Guattari, F., 1989, *Les trois ecologies*, Galilee.]
- Gebhard, U., 1994, *Kind und Natur*, Westdeutscher Verlag.
- Gebhard, U., 2009, *Die Bedeutung von Naturerfahrungen in der Kindheit*, Jahrestreffen der Zertifizierten Natur- und Landschaftsführer-innen(ZNL).
- 『月刊社会教育』編集委員会編, 1978, 『社会教育とはなにか』, 国土社.
- Gorges, R., 2000, *Waldkindergartenkinder im ersten Schuljahr-eine empirische Untersuchung*, Hohenstein.
- 浜田久美子, 2008, 『森の力』, 岩波書店.
- 原子栄一郎, 1998, 「持続可能性のための教育論」, 藤岡貞彦編, 『環境と開発の教育学』, 同時代社.
- ヘフナー, P., 2009, 佐藤竺訳, 『ドイツの自然・森の幼稚園: 就学前教育における正規の幼稚園の代替物』, 公人社. [原著: Häfner, P., 2002, *Natur-und Waldkindergärten in Deutschland : eine Alternative zum Regelkindergarten in der vorschulischen Erziehung Bürgstadt*].
- ヘルマント, J., 1999, 山縣光晶訳, 『森なしでは生きられない: ヨーロッパ・自然美とエコロジーの文化史』, 築地書館. [原著: Hermand, J., 1930, *Mit den Bäumen sterben die Menschen : zur Kulturgeschichte der Ökologie*].
- 堀雅宏, 2007, 「環境教育をどのように進めるか」, 横浜国立大学教育人間科学部環境教育研究会編, 『環境教育-基礎と実践-』, 共立出版.
- Huppertz, N., 2004, *Handbuch Wald Kindergarten Konzeption Methodik Erfahrungen*,

PAIS-Verlag Oberried bei Freiburg i. Br.

- 今村光章, 2002, 「環境教育の意義と特質」, 川嶋宗継, 市川智史, 今村光章共編, 『環境教育への招待』, ミネルヴァ書房.
- 今村光章, 2005, 「環境教育から持続可能性を実現する教育へ」, 今村光章編, 『持続可能性に向けての環境教育』, 昭和堂.
- 今村光章, 2009, 「幼児教育・保育と環境教育-教材論の立場から」, 『環境教育』 Vol.19-1, pp.109-112, 日本環境教育学会.
- 今村光章, 2011a, 「森のようちえんとは何か-用語『森のようちえん』の検討と日本への紹介をめぐる-」, 『環境教育』 Vol.21-1, pp.59-67, 日本環境教育学会.
- 今村光章, 水谷亜由美, 2011b, 「森のようちえんの理念の紹介-ドイツと日本における発展とその理念を手がかりに-」, 『環境教育』 Vol.21-1, pp.68-75, 日本環境教育学会.
- 今村光章, 水谷亜由美, 2011c, 『ドイツの森のようちえん活動の実際』, 岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究第13巻.
- 今村光章編, 2011d, 『森のようちえん自然のなかで子育てを』, 解放出版社.
- 井上美智子, 2009, 「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」, 『環境教育』 Vol.19-1, pp.95-108, 日本環境教育学会.
- 井上有一, アラン・ドレングソン共編, 2001, 『ディープエコロジー-生き方から考える環境の思想』, 昭和堂.
- 石亀泰郎, 1999, 『さあ森のようちえんへ: 小鳥も虫も枯れ枝もみんな友だち』, ばるす出版.
- 環境庁編, 1994, 『環境基本計画』, 大蔵省印刷局.
- 木戸啓絵, 2010, 『森の幼稚園の保育の特質について-ホリスティック教育の視点から-』, 第58回関東教育学会発表資料.
- 木戸啓絵, 2010, 『現代の幼児教育から見たドイツの森の幼稚園』, 教育人間科学部紀要第1号.
- 北村昌美, 1981, 『森林と文化-シュバルツバルトの四季-』, 東洋経済新報社.
- 鬼頭秀一・福永真弓共編, 2009, 『環境倫理学』, 東京大学出版会.
- 古賀琢也, 2007, 『ドイツの森の幼稚園の教育活動について』, 広島大学教育学部[未刊行].
- レーマン, A., 2005, 識名章喜・大淵知直訳, 『森のフォークロアドイツ人の自然観と森林文化』, 法政大学出版局, [原著: Lehmann, A., 1999, *VON MENSCHEN UND BÄUMEN Die Deutschen und ihr Wald*, Reinbek bei Hamburg.].
- Lenzen, H., 1983, *Stadtwald Rheinbach, Vor den Toren der Stadt, Eifel-und Heimatverein Rheinbach.*
- マターニュ, P., 2006, 門脇仁訳, 『エコロジーの歴史』, 緑風出版, [原著: Matagne, P., 2002, *COMPRENDRE L'ÉCOLOGIE ET SON HISTOIRE*, Delachaux et Niestle SA, Lonay-Paris.]
- Miklitz, I., 2004, *Der Waldkindergarten Dimensionen eines pädagogischen Ansatzes.*,

Weinheim BELTZ.

御代川貴久夫・関啓子共著, 2009, 『環境教育を学ぶ人のために』, 境思想社.

森田勇造, 2006, 『人間力を高める特別活動としての野外文化教育』, 社団法人青少年交友協会.

Naumann, G., 1999, *Zur Forstgeschichte des Flamersheimer Waldes*, Ministerium für Umwelt Raumordnung und Landwirtschaft des Landes Nordrhein-Westfalen.

日本環境教育フォーラム編, 2008, 『日本型環境教育の知恵』, 小学館クリエイティブ.

岡部翠編, 2007, 『幼児のための環境教育スウェーデンからの贈りもの森のムッレ教室』, 新評論.

小川利夫, 1998, 『社会教育の歴史と思想』, 亜紀書房.

大高泉, 1998, 「ドイツの環境教育」, 奥井智久編, 『地球規模の環境教育』, ぎょうせい.

大高泉, 2000, 「ドイツの環境教育」, 田中春彦編, 『環境教育重要用語 300 の基礎知識』, 明治図書出版.

Petra, M. Bezdek, U., 2004, *Spielraum Wald Praxisideen und Spiele für Kindergruppen.*, Don Bosco.

Rosso, S., 2010, *Waldkindergarten Ein pädagogisches Konzept mit Zukunft?*, Diplomatica Verlag GmbH.

佐伯胖, 2001, 『幼児教育へのいざない円熟した保育者になるために』, 東京大学出版会.

関谷央子, 2009, 『日本における森のようちえんの理念および活動意義』, 立教大学大学院異文化コミュニケーション学科, [未刊行].

菅原潤, 2007, 『環境倫理学入門風景論からのアプローチ』, 昭和堂.

鈴木善次, 1994, 『人間環境教育論』, 創元社.

高橋正弘, 2002, 「環境教育の基礎理論」『環境教育への招待』川嶋,市川,今村編,ミネルヴァ書房,p.18

田中春彦編, 2002, 『環境教育重要用語 300 の基礎知識』, 明治図書出版.

東方真理子, 2004, 『ドイツの森の幼稚園の実態に関する調査研究』, 恵泉女学園大学人文学会恵泉アカデミア第9号.

東方真理子, 2005, 『幼児期における自然とかかわることの意味』, 恵泉女学園大学人文学会恵泉アカデミア第10号.

UNESCO, 1987, Intergovernmental Conference on Environmental Education-Final Report, ED/MD/49

百合草禎二, 2002, 『ドイツ・アウグスブルクの「森の幼稚園」: 実践と理論』, 心理科学研究会.

【参考パンフレット】

- Absatzförderungsfonds der deutschen Forst und Holzwirtschaft, 2007, Waldbild
HOLZABSATZFONDS.
- Die Stadt Rheinbach stellt sich vor, 2008.3, Stadt Rheinbach.
- Elterninitiative Naturkindergarten e.V. Rheinbach, Unser Pädagogisches Konzept
Gesetz- und Verordnungsblatt für Berlin 61.Jahrgang Nr.22 30. Juni 2005.
- Gesetz- und Verordnungsblatt für das Land Nordrhein-Westfalen-Nr.25 vom 16.
November 2007.
- Gesetz über Tageseinrichtungen für Kinder vom 29. Oktober 1991 (GV. NRW. S. 380),
zuletzt geändert durch Gesetz vom 21. Dezember 2006 (GV. NRW. S.631).
- Integrierter Waldkindergarten Waldmäuse Pädagogisches Konzept, 2008.(Berlin).
- Kinder früher fördern Das neue Kinder Bildungsgesetz in Nordrhein-Westfalen, 2008,
Ministerium für Generationen, Familie, Frauen und Integration des Landes
Nordrhein-Westfalen.
- Landesverband der Wald-und Naturkindergärten NRW e.V., 2004, Handbuch Qualität
im Waldkindergarten.
- Landesbetrieb Wald und Holz NRW, 2009.9, Regionalforstamt Rhein-Sieg-Erft Wald für
Mensch und Natur.
- Landesverband der Wald-und NaturkindergärtenNRW e.V. Handbuch Qualität im
Waldkindergarten,2007.(NRW).
- Ministerium für Schule, Jugend und Kinder des Landes Nordrhein-Westfalen, MSJK
10/2003
- Naturpark Kottenforst-Ville, 2004, KRAUT UND RÜBEN.
- Naturkindergarten Unser Pädagogisches Konzept, 2006.(Rheinbach).
- RHEINBACH, 1971, Eifelverein, Hauptgeschäftsstelle Düren, Kaiserpöatz.
- Verwaltungsaufbau Stadt Rheinbach 2008.01.01.
- Verlagsgesellschaft Unser Wald mbH, 2009, UNSER WALD.
- Waldkindergarten In der Waldau, PÄDAGOGISCHES KONZEPT, 2009.(Bonn).

【参考ウェブサイト】

Bekante Natur-und Waldkindergarten 20. Juni 2010.

<http://www.waldkinder.de/> (2011年1月23日取得)

Bundesministerium der justiz.

http://www.gesetze-im-internet.de/gg/art_20a.html (2012年1月10日取得)

Forstwirt/in.

<http://www.forstwirtausbildung.nrw.de/ausbildung/forstwirt/index.htm> (2011年12月15日取得)

Landesbetrieb Wald und Holz Nordrhein-Westfalen, Berufsausbildung zum/zur Wald-und Naturkindergaerten Landesverband BW e.V

<http://www.waldkindergartenlandesverband.de> (2011年5月21日取得)

文部科学省「青少年の野外教育の充実について」青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm

(2012年1月15日取得)

Rheinbach

<http://de.wikipedia.org/wiki/Rheinbach> (2011年5月23日取得)

ラインバッハの森の幼稚園 参与観察記録 1

2004年4月5日(月) 曇り時々晴れ、雨、ヒョウ

先生：3人 子ども：10人(男7人女3人)

08:30 ちらほらと先生が車でやってくる。今日は、イースター休暇をとっている人が多いらしく、5人ほど子どもたちはお休み。

ラインバッハには2つの森グループがあり、15人以上だと多すぎて面倒を見るのが大変という理由から各グループには最大15人の子どもたちがいる。15人がベスト。また、室内グループと森グループの2つに分かれているのは、森グループは天候上、午前中までしかできない。しかし、高学歴の保護者が多いため、午後も働きに出る親が多いので、午後も開園できる室内グループもある。でも、将来は森グループも長い時間開園したいと、ひとりの先生は話していた。

08:40 出発。森に続く小道を子どもたちは手をつないで歩いていく。3歳から6歳の子どもたちが入り混じっているため、大きい子は小さい子の面倒をよく見るようになる。

09:00 森の入口に到着。みんな手をつないで輪になってごあいさつ。でも、手をつなぎたがらない子もいる。しばらくみんなで待っているけど、手をつながなくて、最終的にヤナ先生が手をつなげさせていた。「おはよう」の歌を歌って、ひとりの男の子が、1,2,3,4、...というふうに、子どもの人数を数える。今日は10人。次に女の子が逆から数えていく。9,8,7,6、...というふうに。(数の学習) 数え終わると、ヤナ先生が、石の話 시작했다。みんな、先生の質問に答えたり、自分の意見を言ったり、気がついたことを言ったりして、盛り上がっていた。発言が多い。その後、パウワーゲンという小屋のあるところまで少し歩く。パウワーゲンは、避難小屋として使われている小屋で、中には遊び道具や工作物などが保管されており、子どもたちが作業をするスペースもある。子どもが15人と、大人が4人は入ることができるスペースがある。意外に広い。

子どもたちはそれぞれ自由に歩き、いろいろなものを発見していく。石を見つけることに熱中して、大きい石、いろんな形の石、小さい石を見つけて、気に入った石をリュックサックに入れている子もいる。ある男の子は、ものすごく小さい石を見つけて、「ほら見て、すごく小さい石!!」と言ってうれしそうに見せにきてくれた。歩いている途中で、一人の男の子が突然転びだ

した。これはどうやら、意図的に自分から転んでいるらしい。何度も転んで、どうやったら痛くなく転べるか試しているようだった。友だちとかけっこの競争をしている子もいる。川で木の枝をパチャパチャやって遊んでいる子たちもいた。

09:30 バウワーゲンに到着。バウワーゲンのまわりでそれぞれに遊ぶ。バウワーゲンについているハンドルをまわして車ごっこをしている子、年齢の違う男の子と女の子2人が木の破片に釘を打ち付けて、どのくらいの力で木から釘がはずれるのか、2人で引っ張って試していた。少し離れたところで木につる下げたブランコに乗って遊んでいる子どももいる。先生が持ってきた粘土を板に打ち付けて遊んでいる子、粘土に自分の手を当てると、跡形がつくことを発見して、面白がって何度も繰り返している子、粘土でクレープを作っとうれしそうに「食べて食べて！」と持ってくる子、麻ひもの先に小枝をくくりつけて、小枝を犬に見立てて、引きずり回して犬の散歩ごっこをしている子……。突然雨が降ってきたので、急いでフードをかぶる。「少し、雨が降ってきたねえ」と、私に報告しにきてくれた男の子（ダーヴィッド4歳）がいた。ひとりで木を土の中にぐりぐり埋めて遊んでいる子もいる。雨がヒョウに変わって、またダーヴィッドが「ヒョウだ！」と知らせに来てくれた。

10:30 水を近くの川から汲んできて、石鹸で手を洗う。それからリュックサックを持ってバウワーゲンの入口の前に並んで、順番に中に入っていく。順番を待っている子どもが、退屈なので歌を歌い始めた。ひとりが歌い始めると、次第にみんなが歌う。そして、いつのまにか輪唱になっていた。バウワーゲンの中にみんな座って「いただきます」の歌を歌い、朝ごはん。ごはんを食べている時にひとりの先生が絵本を読み始めた。先生は語りかけながらお話を始める。子どもたちは口々に先生の質問に答えたり、意見を言ったりしていた。朝食は普通は毎日バウワーゲンの中で食べる。夏の間は、森の中の子どもたちが気に入った場所で食べる。夏でも天気が雨だったり寒かったりする日はバウワーゲンの中で食べる。

11:10 朝食を食べ終わり、再び外へ。野原の片隅でおトイレをすませて、また自由に遊び始める。先生のアイデアでゲームをする子どもたちもいれば、ひとりで遊ぶ子もいる。

11:45 木の枝や、遊んだものを片付け始める。帰りの準備。先生が片付け始めた

ら、子どもたちも自ら手伝っていた。帰り道、私が先生と話しているときでさえも、先生は子どもたちの方に目を向けていて、少し離れたところで、丸太を積んでいる上に登ろうとしている子どもに注意していた。途中で、またヒョウ混じりの雨が強く降ってきた。また急いでフードをかぶる。帰り道は少し違う道を帰った。石見つけの続きをしたり、かけっこしたり、道にかかっている線の数を数えたり……。いろんな子がいる。そして、集合場所と同じ解散場所まで手をつないで歌を歌いながら仲良く帰る。解散場所に到着したら、手をつないで輪になって、先生が、今日の出来事を問いかける。今日は何が降ってきたかな？子どもたちは口々に、雨！ヒョウ！雪！とそれぞれに発言する。そして、先生は、上をみてごらん。青い空だね。太陽もきれいだね。と言うと、子どもたちは空を見上げる。帰りの歌を歌い終わって、さようならのごあいさつ。その後、すごい勢いで子どもたちは走っていった。お迎えが来るまで公園の遊具で遊ぶ。

2004年4月6日（火）曇り、雨、ヒョウ、晴れ

子どもの人数：5人。途中で2人増えて7人に。先生：2人

きのうとは違う、もう一つのグループに参加。

08：30 子どもたちが集合場所に集まってくる。

08：50 出発。今日もイースター休みをとっている子どもも多く、人数は少なめだった。途中の広場に到着し、手をつないで輪になって朝の歌をうたい、それからまた森の中へと出発。子どもたちのお気に入りの場所。倒れている大きな木に5人ほどの子どもたちが乗り、バスごっこをしていたり、落ち葉のふかふかの地面に転がったり……。「ここは、子どもたちのファンタジーを引き出すから、自然のものしか使わないの」と先生が教えてくれた。日本の幼稚園とはスケールが違う。子どもたちは大声を出してもうるさくないし、みんなそれぞれに、自分の興味のあることを発見して、それに熱中している。

10：00 バウワーゲンの中で朝ごはん。バウワーゲンの中には、絵本、地球儀、自然のものでつくった工作物、ゲーム、粘土や絵の具など、人工的なものがたくさんある。だけど、それらは、本当にたまにしか使わない。森の中には自然の土もあるし、自然の色もあるから。

子どもたちはバウワーゲンの中に入る前に一列に並んで先生が持ってきたペットボトルのお湯で手を洗う。この光景を“Waschen Strasse”と言うらしい。

(子どもたちが一列にきれいに並んで手を洗っているから)そして順番にパウワグンの中に入る。「いただきます」の歌を歌って食べ始める。今日はひとりの保護者(レア 6歳の女の子のお母さん)が付き添ってきていたので、彼女が絵本を読み始めた。(時々、保護者が手伝いに来ている)読み方がとても上手。子どもたちはその絵本に釘付けだ。途中で、先生が、「食べることを忘れないでね」と子どもたちに注意するほど、すいこまれていた。

10:30 食べ終わって再び外へ。イースターの飾りの工作をするために森の中で材料を探す。ひとりの男の子が森の道で転んでも、泣くどころか、ゲラゲラ笑って、もう一回転んだりしている。今日は、とても寒いからみんなでかけっこして温まる。木の実のようなものがついている枝をたくさん集めて子どもたちはパウワグンに持って帰る。ヨエル(4歳の男の子)はその枝を鐘にみたてて、「見て見て!リング、リング!」と言って素朴な笑みを浮かべていた。かわいい・・・。

11:10 パウワグンの隣の広場で、温度計と、方向指示器と、雨量計の観察。自然の中で実践を通して観察しているから、子どもたちは興味津々。その後、パウワグンに入って、活動。場所が狭いので、保護者が絵本の続きを読むグループと、森で集めてきた材料で工作するグループの2つに分かれていた。工作しながら、「ヤン(4歳の男の子)のおうちはイースターの飾りをつくった?」「まだ。でもタマゴはあるよ」と、イースターの話が飛び交う。自分のセンスによって飾りをつくっていく。子どもたちはどの色のリボンがいいか、自分で決めて先生に要求する。工作が出来上がった子や、絵本に飽きた子どもたちが、お互いに交代して、工作をつくったり、絵本を見たりしている。

11:30 パウワグンの中でみんな座って先生が歌を歌い始めた。ひとりの男の子が、「二つに分かれて輪唱したら面白いよ!」と提案して、歌ってみたら成功した。先生は、「すごいね。やったね!」とその男の子を誉めていた。

11:50 帰宅準備。集合場所に向けて歩き出す。

2004年4月7日(水) くもり

子ども:11人、先生:4人

今日もイースターのため、子どもの人数が少なく、ひとつのグループしかなかった。

森の幼稚園の子どもたちは、とても自由でストレスがない。水溜りのところでパチャパチャやって、服が汚れても誰にも怒られない。時々、ケンカをして、先生が止めに入ることもあるが。

今日は新しい子どもが体験入園のためにお母さんと来ていた。森の幼稚園に通うのが初めてでも、自ら発言したり、ほかの子どもといっしょに水溜りで遊んだりして、すぐに溶け込んでいた。森の幼稚園ではファンタジーを引き出すことがしやすい。

先生が森の中にシートを広げて、その上で、昨日の工作の続きを始めた。興味を持った子どもたちだけがやってきて、いっしょにつくっている。そのほかの子どもたちは、それぞれに遊んでいる。木登りをしたり、倒れている木の上に乗ってバスごっこをしたり、木の周りで海賊ごっこをしたり・・・。(木登りは2メートルの高さまでと決めている。先生の目が届かなくなるから)

木の幹の皮がはがれていて、そこから白い蜜が出ていたのを発見した子どもが、先生を呼んで、なにやら話している。先生は、“Der Kosmos-Waldfuehrer”という森の図鑑をリュックから取り出して、その木の蜜を調べている。その汁は粘々していて、お風呂に入れるとアレルギーが治る作用があるらしい。私が記録をとっていると、マティアス(6歳の男の子)が、「この蜜もノートに貼ればいいのに」と、蜜をとってくれた。そして、私が、リュックサックを背負ったまま、ウロウロしていると、マティアスが、「リュックサックは重いから、下ろしたほうが楽だよ」とわざわざ言いに来てくれた。マティアスはこのグループの中では一番年長者で、とても賢い。よく気がつくし、優しい。みんなのリーダー的存在。今年の8月から小学校に通うことになっている。

これから5人ぐらいの男の子が、インディアン風のテントをつくるらしい。適当な木を見つけてきて、大きな木に、三角錐の形に立てかけている。長くて大きい木を発見して、大喜びしている男の子たちもいる。「見て！こんな大きな木を見つけたよ！」と、得意気に報告しに来てくれた。大きくて、ひとりで運べない木は、2人で協力して運んでいる。方向を変えるときに、頭を使わないと曲がれないことを発見。2人で調節しながら上手に運んでいた。

森の幼稚園の子どもたちは、毎日森で遊んでいるから、どうやったら危ないか、自分自身で体験して、わかっている。テントの構成も自分たちで計画を立ててつくっていく。先生から麻ヒモとハサミをもらって、木と木をヒモでつないでいく。「冬は寒いから手袋をしなくてはいけないのだけど、手袋をしたままだと、ハサミが持てないでしょ？これが冬の

問題なの(笑)」と先生が言っていた。2,3ヶ月すると、子どもたちがつくったテントも壊れてきて、地面の上に倒れる。なるべく自然の麻ヒモを使っているが、麻ヒモを動物が食べたら、身体に良くないから、先生があとから回収して、自然の循環を乱さないようにしているらしい。

2004年4月8日(木) 曇り時々雨

先生：3人 子ども：男6人 女1人

09:15 いつもの森の入口で手をつないで輪になってあいさつ。先生が、「今日は何人？」と問いかけると、数えたい子が子ども的人数を数える。今日は、イースター期間でおやすみの子どもも多く、2つあるグループが1つで、少なかったので、「大人は何人？」と聞くと、「4人」合わせて何人？という具合に算数の勉強へと発展していった。

09:30 バウワーゲンの前のいつもの森に到着。雨が降ってきた。ダーヴィッドはひとりで遊んでいる。大きな木に木の棒を立てかけて、滑り台をつくりはじめた。「見て！するする～」と言いながら、手を滑らせていた。その後、土を木の破片でかき集めて何かやっている。同じ時間、ラッセル(4歳の男の子)はいつもの倒れている木の上にまたがって、(その木は馬代わり)ピストルに見立てた木の枝を持って、「バキュン、バキュン！」と叫んでいる。

10:10 バウワーゲンにもどって朝ごはん。

10:30 食べ終わり、再び外へ。女の子はバウワーゲンの中で工作をしている。男の子は、森の中の違う場所に行って、つくりかけのテント作りの続きを始めた。「その木をとって！」「はい、どうぞ」「ありがとう」というように、みんな協力して、夢中になりながらひとつのテントをつくりあげていく。でも、なぜかダーヴィッドはそのテントを壊したがる。ダーヴィッドはとてもフレンドリーな男の子だけど、ひとりで遊ぶのが好き。彼のお母さんはとてもいい人だが、ダーヴィッドという時間が多く、彼が自分でできることも、全部世話を焼いているから、それが問題。だとガビ先生は教えてくれた。

11:30 バウワーゲンにもどる。帰り道はまた、違った道をたどっていく。ひとりの男の子は道におちている2本の棒を拾って、それをすり合わせて火を起こすまねをしていた。ダーヴィッドは、大好きな犬の足跡を見つけて喜んでいく。バウワーゲンには暖房があるので、少し手を温めてから森の入口まで戻

る。ラーラ（4歳の女の子）は木の破片を見つけて、気に入ったので、「リュックサックに入れて！」と言って、私のところに持ってきた。

2004年4月13日（火）くもり時々雨

先生：4人、子ども：最終的に8人（男5人、女3人）

今週いっぱい、イースター休暇をとる子どもたちが多く、今朝は子どもがなかなか集まってこない。

08:50 先生4人、子ども5人（男3、女2）、新しい子ども（パウラ）のお母さんひとり、パウラの妹一人、が森に向かって出発。少し行くと、大きな木に、白い木の実がなっているのを発見。子どもたちは手をつないだまま、その大きな木を眺めている。リロ先生が小さな植物を見つけて、子どもたちに知らせている。むこうから、白い犬を連れてお母さんと、男の子がやってきた。ヤン（男の子5歳）だ。みんな手を振って迎える。子どもの数が6人に。

9:20 森の入口で手をつないで輪になって、朝の歌をうたう。そして、今日は人数が少ないので、ひとりずつ名前を聞いていく歌も歌った。それから森に入る。ダーヴィッド（4歳の男の子）が、トナカイの角に似た木の枝を見つけて、ひとりでトナカイごっこをしている。パウワーゲンに向かう途中で、3人の子どもたちが地面に座り込んで木の枝で土をぐりぐりやりはじめた。リロ先生が付き添って、子どもたちが気の済むまで待っている。道を歩きながら、ヨハネス（3歳の男の子）が「迷わないようにね・・・」と言いながら道に矢印を書いていた。

10:15 今日は曇っているけど少し暖かいから外で朝ごはん。ヤンは夢中で土いじりをしている。「ぼく、お腹空いてないよ」と、アピール。

10:30 パウワーゲンの前でシートを広げて座って輪になって手をつないで歌をうたう。今日は、人数も少ないせいか、それとも外で食べているせいか、みんな静か。食後にマティアス（6歳の男の子）とヨハンナ（3歳の女の子）がやってきて子どもの数は8人に。子どもたちは途中から入っても、すぐに溶け込む。特にマティアスは、とっても社交的。とても自然な形で、しかもとても楽しそうに遊び始めた。最近、ヨハネス（3歳の男の子）が私によく話しかけてくる。大きな目をきらきらさせて、何かを見つけたら、私に近づいてき

て（ちょっと遠慮ぎみに、笑）見せて、どんな枝だとか、説明してくれる。
雨が降ってきた。

11:05 帰る準備。帰り道、マティアス（6歳の男の子）が気に入った石をいくつか見つけて拾ってリュックサックに入れている。先生たちはみんな明るい。おらかな人が多い。言うことをきかない子がいたので、彼をベンチに座らせてお説教している姿も・・・。

道を歩きながら、近くにいたヨハネス（3歳の男の子）が、私に花の名前を教えてくれた。彼は、この森の幼稚園に通い始めてから、まだ半年しかたっていないのに、植物の名前を本当によく知っている。そして、森の幼稚園の子どもたちに、今はどんな時期？と尋ねると、「春、夏、秋、冬！」と教えてくれる。どうして？と尋ねると、「～の木の芽が大きくなりはじめたから春なんだよ。」「～鳥が飛んできて、巣を作り始めたから夏なんだよ。」「～の葉っぱが黄色や赤に変わり始めたから秋なんだよ。」「葉っぱが散り始めて、動物たちの姿がみえなくなってきたから冬なんだよ。」などというように、彼らは、それぞれの季節を身体全体を通して感じ取り、それぞれの季節の変わり目や特徴を知っている。これらは、毎日、森の幼稚園に通うことによって培われてきたものだという。

木登りをしている子がカーニバルごっこをし始めた。葉や土を投げて「タメレー」（お菓子をちょうだい）と叫んでいる。毎日、子どもたちは、自分の持っている想像力と創造力を働かせて遊ぶ。「働かせる」のではなくて、自然に働くのかもしれない。なぜなら、自分の想像力で遊ぶことは、とても楽しいから。

2004年4月14日（水）晴れ

先生：3人、子ども：12人（男8人、女4人）

森の幼稚園には2つのグループがあって、それぞれ15人ずつ。その中で、女の子は各3人ずつ。普通の室内グループは25人だけどラインバッハの室内グループは20人。うち男の子が3人。

09:00 今日人数が少ないため一つのグループ。いつもは森の入り口だけど、今日は集合場所で輪になって手をつないで歌をうたう。私の隣は、たまたまラッセル（4歳の男の子）。いつもはやんちゃなラッセルなのに、今日はとってもかわいい。私を見上げて満面の笑みを浮かべている。そして、なにやら発言をたくさんしている。「えっと、えっと、・・・」というかんじ。森へ出発。ラーラ（4歳の女の子）はパウラ（3歳の女の子、新しい子）の妹が乗ったバ

ギーを押して、まるでお母さん気分。パウラが道の端にカスターニアンという木の芽を見つけて観察している。昨日は、リロ先生がカスターニアンを見つけて子どもたちに知らせていたが、今日は子どもたちが自分から発見した。そうこうしているうちに、向こうからヤン□がやってきた。ヤンのお母さんは、毎日、ヤンの送り迎えのついでに犬の散歩をしている。(逆か?)そして、先生と、いつもお話している。ここで先生と保護者の交流も深まっていく。アンドア(3歳の男の子)が転んだ。ラッセルが木が倒れて入り組んでいるところでひとりで遊んでいる。森の中で、いつも遊ぶ場所はいくつかあるが、その中のひとつは、子どもたちが遊びすぎて、壊れてきているから、場所を変えて遊ぶようにしている。子どもたちが木の根元を掘りすぎて根っこがむき出してきているのが問題。

09:45 バウワーゲンに到着。バウワーゲンの横の広場に集まってまるくなってイスに座る。

09:50 リロ先生が絵本を読み始める。でも、ちょうど読み始める前に、先生の携帯電話に電話が・・・みんな笑っている。本のタイトルは“Der Baum”。ひとつの種から芽が出て大きな木になるという内容。土の中で種から芽が出始めた場面を子どもたちひとりひとりにまわして見せる。ラッセル(4歳の男の子)は真剣な表情。先生はみんなの目の前に、植木鉢に入った、本物の植物を置く。子どもたちはその絵本を見た直後に、目の前に置かれた本物の植物に釘付け。私の隣に座っているラーラ(4歳の女の子)は、パウラの妹が気になって仕方ない様子。どうやら、彼女は赤ちゃんが大好きらしい。マティアス(6歳の赤毛の男の子)がお母さんと2人の弟といっしょにやってきた。

10:00 先生からひとりずつ名前を呼ばれたら、“Waschen Strasse”に並ぶ。

みんなが朝ごはんを食べ始めた。今日は天気もいいので外で食べる。先生が絵本を読み始めた。とちゅうで、しばらく鳥のさえずりに耳をかたむける。のどかなひととき。

10:30 食べ終わる。子どもたちが弁当箱を片付けていると、先生が歌を歌い始めた。

10:40 アンドアはひとりで遊び始めた。多くの男の子たちは、テント作りに夢中になっている。子どもたちはよくテントをつくりたがるとコニー先生は言う。でもその理由はわからないらしい。そこで、子どもたちにどうしてテントをつくるのか聞いてみた。アンドアは、「テントはすぐに壊れちゃうからまた作

るんだ」と言った。マティアスは、「テントを作りながら、いろんな面白いものが見つかるからテント作りは大好き。そして、ティッピーのインディアン遊びが大好きだから」と答えてくれた。

11:40 遊びは終わり、子どもたちは再び、パウワーゲンの横の広場にもどる。そして、手をつないで、終わりの歌をうたう。帰り道は、先生の提案で、かけっこしながら帰る。その後、2人1組になって仲良く手をつないで帰る。先生がリードして歌を歌い始める。子どもたちが一生懸命大きな声で歌っている姿はなんとも、ほほえましい。

12:25 集合場所（解散場所）に到着。アンドアがお母さんを見つけると、すごい笑顔と勢いでとびついていった。保護者の迎えを待っている時、男の子たちが砂場で砂堀の競争をしている。とってもゆかいな光景（笑）今日はとても暖かくて開放的な気分になれた。

2004年4月15日（木）晴れ

先生：3人

子ども：はじめは6人（男4人、女2人）最終的に11人（男8人、女3人）

08:45 ラッセル（4歳の男の子）が恐竜のおもちゃを持ってきた。とってもうれしそうに得意気に見せにきた。でも、彼のお母さんが、これは幼稚園に持って行ってはダメ。と言って持ってかえってしまったのでラッセルは泣き出してしまった。代わりに麻ヒモをもらったらしく、笑顔で帰ってきた。今日はとっても天気がいい。みんな、冬の上着から夏の上着に変わっている。

09:00 出発。今日は、今の時点では6人だから3人ずつ手をつないで歩く。

09:15 森の入口に到着。ラッセルは、突然、「タターッタッタッタター」と言って、にわとりみたいに走り出した。ラッセル（4歳の男の子）とモーリッツ（4歳の男の子）は仲良し。森で、子どもたちの行動を見ていると、個人個人の性格がよくわかるような気がする。ヨハネス（3歳の男の子）が木に登ってバナナとりのまねをしている。降りてきてその辺に落ちている枝を2つに割って「2本のバナナ～」と言ってラッセルとモーリッツのところに持っていた。でも、2人は、バナナなんかには興味はないという様子。少し年下のヨハネスはがっかり。モーリッツとラッセルはピストルの形の枝を見つけて打ち合いっこをしている。彼らは、その辺にある石や枝を投げたりしているけ

ど、人にめがけては投げない。自分たちが、森で活動していて、危ないことを知っているから。そのうちに、ラッセル、モーリッツ、ヨハネスが地面に座り込んで土を掘り出した。モーリッツは面白い形の石を見つけて掘っている。それからいつの間にか3人は石集めに集中しはじめた。ラーラ（4歳の女の子）はこの間から枝折りに夢中になっている。どれくらいの力でどのくらいの太さの枝が折れるのか試している。モーリッツがうしろに投げた木の破片が、うしろの子どもに当たりそうになった。それを見ていたリロ先生が、「モーリッツ、うしろに子どもがいるよ。投げるのなら、周りをしっかり見て、危ないか確かめて投げなさい」と注意していた。ヨハネスが石を集め終わって、たくさんの石を見せに来てくれた。「見て見て！すごく小さな石！」小さな小さな石を見つけて気に入る子どもが多い。

子どもの人数が今日は少なめだからコニー先生が途中で帰った。そして、ヤン（4歳の男の子）が途中からやってきた。ラッセルが石を持って帰りたがっているが、かばんがないことに気づく。自分で少し考えてから、彼は、自分のジャケットのポケットにたくさんの石をつめはじめた。森の幼稚園の子どもたちは、先生に聞く前に、まず、自分で考えて、解決方法を見出していく力があると思った。

10:00 マティアス（6歳の男の子）がお母さんと2人の弟（ヨハネス、ダーヴィッド）といっしょに来た。森の入口で、みんなで手をつないで輪になって歌をうたう。今日は少し遅めのスタート。ラーラが子どもの人数を数える。しかし、ひとり少なく数えてしまった。他の子どもたちからブーイング。もう一度数えなおして、急いでパウワゲンに向かう。そして、子どもたちはリュックをおいて“Waschen Strasse”に並んで手を洗う。先生が水を持ってくるのが遅かったので、みんな「ヴァッサー！ヴァッサー！」（水！水！）の合唱（笑）パウワゲンの隣の広場に輪になって座る。ヨハンナ（3歳の女の子）が席を探している。それに気づいたラッセルが「ここに座ればいいよ」と声をかけている。かわいい。でもフラれてしまった（笑）ラッセルはちょっとショックを受けている様子。手をつないで鳥のさえずりに耳を傾けて深呼吸して、「さ、歌を歌い始めましょう！」と先生が言う。ごはんの歌。そして、朝食を食べ始める。ちょうど、ラッセルのお父さんがラッセルの弟を連れて自転車で通りかかった。ごはんはないけど、ちょっとみんなといっしょに座ってみる（笑）いつの間にか子どもの数が11人に。今日の食事中はみんなでおしゃべり。食べ終わったマティアスが温度計のところに行って気温を測っている。子どもたちは、毎日、天気や気温を調べて自分たちで記録する。4月は天

気が変わりやすいから得に面白い。先生は、「Wind und Wetter」（風と天気）という本を読んで、地球の営みを子どもたちにわかりやすく説明する。

11:05 食後、みんなで遊び始める。ラッセルは木をドリルに見立てて「ズズズズー」と言いながら、地面を掘るマネをしている。みんなで、また違う場所（何箇所かある決まった遊び場）に移動した。マティアス（6歳の男の子）が私に、近くに咲いている花を教えてくれた。そして、「本に、はさんだらいいよ」と言って、摘んでくれた。それを見ていたヨハネス（3歳の男の子）も、同じ花を摘んで私にくれた。マティアスにちょっとジェラシーらしい（笑）また、マティアスは、コケを発見して、私に知らせに来てくれた。「コケだよ。これもリュックサックに入れればいいよ」と自ら私のリュックサックに入れてくれた。本当によく気がつく子だ。

女の子2人がお母さんごっこを始めた。男の子たちはテントを作っている。ヨハネスはひとりで遊んでいる。ラッセルは片隅で、ひとりでおしっこ。したくなったら自分です。マティアスとラッセルとモーリッツが少し離れた茂みの中で、なにやら動物ごっこをしている。タイガーごっこらしい（笑）私が近づいていいたら、「ガウッ」とか言って、威嚇された。ヤンも加わり、オレンジのジャケットを着て「ガオー」と言ってやってきた。子どもたちは自然の中で何も道具を与えなくても自分たちで遊び始める。

12:00 先生が集合の歌を歌うと、散らばっていた子どもたちがさっと集まってくる。水筒の飲み物を飲みたい子は飲み、おしっこをしたい子はする。帰り道、すごい勢いで走っている男の子がすごい勢いで転んだ。でも、本人は全然気にしない様子。

12:10 帰りながら、ヨハネス（3歳の男の子）が木の枝を拾って、自分の好きな形になるように計算して折っている。3歳にして計算するなんて、すごいなあ。（でも、たまたまうまく具合に割れただけか??）みんな手をつないで並んで歌を歌いながら帰る。

12:30 集合場所に到着。そして解散。

2004年4月16日（金）晴れ

先生：3人、途中で2人。子ども：9人（男7人、女2人）

08:45 集合場所に到着。私は「おはよう！」とみんなに声をかける。ブランコで

遊んでいたレオン（4歳の男の子）が、満面の笑顔で「おはよう！マリコ！」と返してくれた。とってもうれしい。今日は出発が遅い。9時を過ぎているのにまだ公園にいる。ラーラ（4歳の女の子）はまた、パウラの妹の赤ちゃんと遊んでいる。ヨハネス（3歳の男の子）は歌を歌いながらやってきた。いつもはおとなしい子なのに、今日はちょっと違う様子。

09:05 集合場所で、手をつないで輪になって歌をうたう。そして、今日の人数を数えたい子が、ささっと手を挙げる。今日は一番速かったヨハネス（3歳の男の子）が数える。でも、まだ5までしかまだ数えられない。みんなで手伝って最後まで数えられた。みんなで歌を歌っている最中、パウラ（3歳の女の子）は地面に落ちている大きな落ち葉が気になる様子。歌が終わってから、目の前に何本も並んでいる木の観察を始めた。“Buche”（ブナ）という名前の木だと先生は子どもたちに教えている。そして、その木の特徴を実物を見ながら説明する。アンドア（3歳の男の子）は、さっきから、落ちている木の枝と枝をすり合わせて削っている。

09:30 2人1組になって手をつないで出発。アンドアは手をつなぎたがらない。先生が困っている。マティアス（6歳の男の子）が花のつぼみをたくさん持ってきて、「これも記録しているノートに貼ればいいよ」と、生き生きしながら、私のリュックサックに入れてくれた。本当に優しくて気が利く。みんなで道路を横断する時、パトカーがやってきた。子どもたちが横断し終わるまで待っている。「おはよう、子どもたち！」とマイクで言っている（笑）スピーカーを通して、けっこう大きく聞こえる。子どもたちが横断し始めると、「気をつけてわたるんだぞ。はやく、はやく！」とジョークをとばしている。そして、わたり終わると、「またな、子どもたち」と言って、手を振ってくれた。子どもたちは笑顔で答える。先生も、うしろに止まっていた車のおじさんも、大笑い。とてもユーモアのある警察官だった（笑）今日は、いつもと違う道を歩く。ラーラはずっとバギーを押している。押し方もだんだん慣れてきて、うまくなってきた。道路を横断するとき、「左見て右見て左見て、さ、渡りましょう！」とリロ先生は子どもたちに教えている。どこの国も似たような教え方だ。アンドアは、横断せずにひとりですくまっている。コニー先生はアンドアに近づいていって、説得している。ようやくアンドアは動き始めた。「いろんな性格の子がいるし、特にアンドアは、新しい子だからね」とコニー先生が言った。美術館の前を見て歩く。いろんなオブジェが展示してある。レオン（4歳の男の子）は自分の気に入ったオブジェの前で、ずっと観察して、それがどんな形なのか、違う子どもに一生懸命説明している。アンドア（3

歳の子)は、パウラの妹(1歳)を連れて、彼女にいろいろ説明している。彼はけっこう面倒見がいい。というか、森の幼稚園の子どもたちは、どの子も小さい子や、弱い人に対して、とっても優しい。今日はパウラゲンに行かずに、自分たちで好きな場所を決めて朝ごはん。ラッセルは相変わらず、他の子に対して面倒見がいい。場所が変わっても、並んで手を洗うこと、歌をうたうことなど、毎日同じことをする。毎日同じことをすることで、リズムを乱さないようにしている。手を洗い終わって、みんな待っているのに、アンドアは食べ始めてしまった。とちゅうで、彼自身が、気づき、中断していた。いつものように手をつないで歌を歌っていただきます！私はアンドアの隣に行って食べ始めた。「おいしい？」と聞いてみた。アンドアは「うん・・・」と食べている。他の子どもたちは、鳥や花、動物や木の絵がたくさん描かれた絵を、みんなで囲んで見ている。そして、まわりにある、本物の花や鳥を見つけるというゲームだ。

11:10 森の近くに移動。今日はとっても天気がいい。野道を歩いていると、空に飛行機が飛んでいるのを見つけて叫んでいる子がいる。ずっと石拾いに夢中になっている子、力の限り、思いっきり走っている子。時には、道に転がっている壊れた車のランプを拾って、その破片を再び組み立てている。アンドアのお姉ちゃんは、小学校に行っているけど、今は春休みだから、ちょくちょく幼稚園に遊びに来ている。彼女は、葉っぱを組み合わせで丸いものをつくり、「マリコ、見て！バスケットボールだよ」と見せに来てくれた。マティアスがペットボトルや、ゴムでできたタイヤの一部や、プラスチックなど、人工的なものを集めてきて、袋に入れている。リロ先生は、子どもたちは、誰も何も言わなくても、自然にごみを見つけて、拾うようになると教えてくれた。

12:00 帰りの準備をして帰る。ハイキング気分で、帰り道はまた違った道を通って帰る。

12:25 集合場所に到着。みんなで手をつないで輪になって終わりの歌をうたう。

2004年4月19日(月) くもり
先生2人 子ども12人(男9、女3)

イースター休暇も完全に終わり、今日から本格的な森の幼稚園が始まった。たくさんの子どもたちが集まってくる。2つの森グループに、各グループ2人の先生がつく。私は、1

つのグループに参加。

08:55 出発。森へ向かう途中、大きなトラックが止まっていて、工事をしていて。土をたくさん運んでいる。子どもたちは興味津々。安全な時を見計らって、子どもたちは駆け足で、トラックのそばを通過する。久しぶりに会った子どもたちは大はしゃぎ。みんなで木の枝を持ってピストルごっこを始めた。アンドア（3歳の男の子）が振り向いた拍子に転んだ。泣くどころか、そのスリルを面白がっている。

09:30 バウワーゲンに到着。バウワーゲンの隣の広場においてある温度計に、マティアス（6歳の男の子）たちが集まって観察している。そして、その男の子たち4人が、「風がこっちから吹いているから、この風受けがこっちに向いて動くんだ」とか何とか言いながら、話し合っている。

09:35 子どもたちがリュックサックをおいて“Waschen Strasse”に並び始める。先生が、手を洗う歌をうたいながら、子どもたちにペットボトルの水をかけていく。今日は、少し寒いので、朝ごはんはバウワーゲンの中で食べる。

09:50 バウワーゲンの中で、子どもたちは輪になって座る。リロ先生が鳥の話をはじめ。その後、リロ先生がいろんな鳥の特徴を話し始める。そして、子どもたちがその鳥の名前を当て始めた。時々、子どもたちがわからないと、リロ先生は、その問題の鳥の鳴き声をマネして見せる。鳥クイズ？でひとしきり盛り上がりながら朝の歌をうたう。その直後、ささっと何人もの手が挙がる。先生が指名して、ひとりの男の子が今日の子どもの人数を数え始めた。そして、「いただきます」の歌を歌って朝ごはん。子どもたちは食べ始める。しばらくして、リロ先生が本を読み始めた。“Die Eule Federweis”というタイトルの本で、ふくろうとたまごが出てくるお話。リロ先生は途中から、子どもたちに絵本を見せないで、お話を読むだけ。子どもたちは、自分の頭の中で、お話の光景を想像する。子どもたちは大きな目をくりくりさせながら先生のほうを見つめている。アンドアは静かにしないから、とうとう先生に怒られてしまった。「今は本を読んでいる時間だから静かにしなさい！」と。絵本のお話を聞きながら、ヤンが、ふくろうの鳴き声をマネし始めた。そして、みんなも、いっせいに鳴く（笑）ほほえましい光景だ。絵本を読み終える頃にはごはんを食べ終わっている。その後、外へ出て、おしっこをしたい子はする。アンドアがルーペ（虫眼鏡）を持ってきて、「これ、ぼくのルーペ」と言って報告に来てくれた。森の中のテントの中で木と木をすり合わせて「ナ

イフ」と言って木を削っている。アンドアは危ないことばかりする。「アンドアは、ここで学ばなければいけないことがたくさんある」とガビ先生は言っていた。レオン（4歳の男の子）がアンドアに「いっしょに遊ぼうよ」と誘いに来たのに、アンドアは「いやだ」と言ってひとりで遊び始める。女の子たちは、2本の大きな枝を見つけてきて、それを松葉杖に見立てて「足が痛い～」と叫んでいる（笑）

11:45 バウワーゲンにもどる。

12:00 バウワーゲンから集合場所に戻る。

12:15 集合場所に到着。みんな輪になって座る。ヨハンナ（4歳の女の子）が集めてきた鳥の羽を、みんなの前で並べている。マティアスが森で見つけてきた木の破片に虫が乗っているのをみんなの前で見せている。そして、座りながら終わりの歌をうたって終了。

2004年4月20日（火）くもり

先生2人 子ども10人（男8人、女2人）

08:50 森へ出発。

09:05 森の入口で、いつものようにみんなで輪になって手をつないで朝の歌を歌う。マリオス（6歳の男の子）が片足で立つと、他の子もマネして片足で立ちはじめた。

09:20 バウワーゲンの近くで、子どもたちは遊び始める。バウワーゲンのとなりの広場に、花を植えている場所があり、そこに子どもたちが集まって観察しはじめた。これから、彼らも種を植えるらしい。男の子も女の子も、土の中からミミズやゲジゲジを見つけ出して、興味深そうに手のひらに乗せて観察している。子どもたちは先生からスコップを手渡される。そして、並んで森の中へ出発。ヨジア（5歳の男の子）が木の棒でスコップをたたきながら、「ディンドン！」と叫んでいる。どうやら鐘ごっこらしい。今日はダイズを植える。先生が持ってきた植木鉢（半分、透明になっていて、土の中が見える）に、先生に教わりながら、子どもたちが順番にスコップで土を入れていく。ミミズを見つけては、うれしそうに持ってきて、大事に植木鉢に入れている。そして、種をもらって、ひとりずつ土の中に植えていく。子どもたちは大は

しゃぎ。その植木鉢は、パウワーゲンの横の広場の花壇のそばに置いた。その後、マティアス（6歳の男の子）がどこからか緑の葉っぱを持ってきて、「自然の色だよ」と言いながら、私のノートに葉っぱをすりつけて、緑色にしてくれた。彼は、自然の利用の仕方をよく私に教えてくれる。

10:10 子どもたちは、いつものように“Waschen Strasse”に並ぶ。今日は、ヤン（5歳の男の子）も先生を手伝って、みんなにペットボトルの水をかけてあげていた。

10:20 パウワーゲンに入って朝ごはん。輪になって座って手をつないで「いただきます」の歌を歌う。

10:50 朝ごはんを食べ終わって外へ。女の子たちは、昨日の続きの病人ごっこ？（木の枝を松葉杖の代わりにして、「足が痛い」と言っている）をしている。男の子たちは、木の枝を持って、ピストルごっこ。打ち合いをしている。

リロ先生にインタビュー

Q、パウワーゲンの役割は何ですか？

A、パウワーゲンは、子どもたちがつくった工作物を保管したり、遊び道具なども保管している。また、春から秋にかけては、小学生たちがよく、森の中をマラソンしたり、活動しに来るので、やかましくなる。そんなときには、パウワーゲンの中でお話したり、本をよんだりする。また、冬はとても寒いから、朝ごはんを食べる時や、とても寒い時に、避難小屋として使用する。

パウワーゲンには、地球儀やハンドメイドの世界地図が張られている。いくつかの国には、星がついている。子どもたちが日ごろ、歌っている歌や、朝ごはんの時に読む絵本や、みんなでするゲームなどが生まれた国に星と番号をつけているらしい。子どもたちが毎日の生活の中で、影響を受けているものがどこから来たのか、そのもとを知る必要がある。身近なものが、広い世界の国からやってきているんだということを知り、社会の勉強にもなる。

11:30 マティアス（6歳の男の子）、ヨジア（5歳の男の子）、ヨエル（4歳の男の子）（ヨジアとヨエルは兄弟）とダーヴィッド（4歳の男の子）が地面に穴を掘っている。ダーヴィッドは、木の根元で、おしっこをしている犬のまねをして、見て見て！と言っている。相変わらずだ・・・（笑）でも、それからひとりどこかへ行ってしまった。マティアスとヨジアとヨエルが楽しそうに、

でも真剣に穴を掘り始めた。マティアスが穴を掘っている時に、「あ、ヨジア！見て！早く来て！」と何かを発見した様子。白と赤と茶色の3種類の土が分かれているのを発見した。赤い土を持ってかえりなよ。と私にくれた。マティアスは、途中でバウワーゲンに戻り、土を入れるためのバケツを持ってきた。しばらくして、ピンク色の土も発見した。私が、「どうしてピンク色の土があるんだろうね」と言うと、マティアスは「わからない。時々、ピンクの土がでてくるの」と言う。「あ、見て！ピンクと赤と茶色と白の土がでてきたよ」と説明してくれた。

12:05 先生の集合の声がかかる。マティアスは、自分の掘った穴を、土をかぶせて元通りに埋めていた。バウワーゲンの隣の広場にもどって帰る準備。ヨジアは、誰も気づかないような、イスのそばに生えている葉っぱが虫に食われて穴があいていることを発見して、マティアスに報告している。みんな輪になって座り、先生が、植物の話始める。先生は、本物を見せながら、植物が土の中でどうなっているのか、説明している。「地面から出ている茎よりも、長い根が土の中にあるんだよ」というふうに。

12:15 マティアスが時間に気づいて、「もう帰らなきゃ！」とみんなに言っている。帰り道、マリオスも、マティアスと同じように葉っぱを持ってきて、私のノートを緑色にしてくれた。マティアスは、森の中から乾電池を見つけて、ゴミ袋は？と先生に聞いている。2人1組になって手をつなぎ、帰る。マリオスは私と手をつなぎたかったみたいだけど、子どもと手をつながなきゃダメだよ。とレア（6歳の女の子）に注意され、ちょっと残念がっていた（笑）

2004年4月21日（水）くもり とても暖かい日

先生 2人 子ども 15人（男12人 女3人）

今日は消防署にある救急車の見学。森の幼稚園は、毎日森の中だから、森以外の環境を知るために時々、救急車、消防車、警察、病院、図書館など、公共施設の見学に行く。目的地までの道のりの中でも、大きな道路を横断したり、歩道を歩く時のマナーを知ったり、社会へでるための勉強をすることがいっぱい。

08:45 いつもとは違う集合場所に集まってくる。子どもたちは到着してすぐに公園の遊具で遊びだした。だけど、ダーヴィッド①（4歳の男の子）はひとりで、小さいタイヤを転がしてひとり言を言いながら（笑）遊んでいる。リロ先生がベンチに座ってギターを弾き始めた。

- 09:00 公園の片隅で、いつものように輪になって手をつないでリロ先生がギターを弾き始めた。そして、朝の歌をうたう。
- 09:15 2人1組で仲良く手をつないで出発。アンドア（3歳の男の子）が手を土の上に乗せて、手についた土の香りをかいでいる。私のところにも、「かいで！」と言って手を持ってきた。うーん、まさしく土のおいだ。まずは、室内グループの幼稚園がある学校の前の広場に行き遊んでいる。大きなオブジェが芝生の上に建っている。男の子たちはそれによじ登ろうとがんばっている。だけど、身長がたりなくて、どうしてもひとりだと上に上れない。マティアスが自分の手を組んで、それを踏み台代わりにして、近くにいたヤンに、「僕の手の上に乗って！そしたら上にのぼれるかも！」と提案している。子どもたちは、頭を使いながら遊んでいる。その後、広場に咲いている花を摘んだり、ねっころがったり、それぞれに遊んでいる。マティアスは、最近、穴掘りに夢中だ。どこに行っても、穴を掘っている。
- 09:45 再び出発。子どもたちは、よく転ぶが、走りながら転んでも全然泣かない。アンドアは大きな石を抱えている。みんなはもう出発しているのに、アンドアだけは動きたがらない。彼は、これから、たくさんのことを学ばなくてはならない。普通の道路に出て、自転車と歩道がいっしょになっているところを歩く。先生は、「ここは人と自転車が通れる道よ」と教えている。途中で大きな木が立っているそばを通りかかる。「うおー！大きな木！」という歓声がかかる。大きな道路は交通量がいっぱいでもとても危ない。左右の安全を確認して渡らなくてはいけない。信号の意味を知らなくてはいけない。森では経験できないことを、子どもたちは学んでいく。
- 10:25 消防署に到着。とてもきれいな建物だ。おにいさんが出迎えてくれた。2階の広い会議室のようなところに通された。今日は、“Waschen Strasse”はなし。トイレで手を洗う。
- 10:30 いつものように「いただきます」の歌を歌って朝ごはん。リロ先生が救急車の話をはじめ。子どもたちの朝ごはんの中身は、パンにチーズやハム、ジャムをはさんだものや、リンゴなどが多い。
- 10:40 リロ先生がギターを弾いて歌い始めた。子どもたちは朝食を食べ終わる。

10:50 おにいさんが救急車のお話を始める。そして子どもたちに質問する。子どもたちは、手を挙げて口々に自分の意見を話し出す。おにいさんは子どもたちの意見を聞いた後、再び話を続ける。そして、カギがたくさんついたものを子どもたち一人一人に見せてまわる。「知ってる？見たことある？」と聞きながら。それからまた話を始める。子どもたちの表情は、少しつまらなそう(?)眠そうに、おにいさんの話を聞いている。でも、その割には、質問に答えたり自分の意見をよく言っている。おにいさんは真剣に子どもたちの意見に耳をかたむけている。今度はOHPを見せ始めた。どんな時に救急車を呼ぶか、いろいろなシチュエーションのOHPを見せる。次に、救急車の電話番号は？と子どもたちに問いかける。番号は「112」だ。救急車に乗ったことがある？という質問に、子どもたちは誰も手を挙げない・・・と思ったら、リロ先生がひとり手を挙げた(笑)みんな笑っている。おにいさんは次々と質問する。アンドアはいつも落ち着かない。とうとう寝始めてしまった(笑)

11:15 救急車の見学に行く。1列に並んで出発。ダーヴィッドは相変わらずよく話しかけてくる。まず、建物の中を見学。キッチン、受付、コンピュータ室、シャワー室、などおにいさんが一部屋ずつ説明してくれる。更衣室に行って救急士のくつについて説明してくれた。とても軽くて、先のほうが固くなっている。そして、救急車があるところに到着。子どもたちは、救急士の服を面白そうに試着している。その後、救急車の中を見ておにいさんの説明を受ける。

11:40 見終わって2人1組手をつないで部屋に帰る。リロ先生が帰る前にケガをしたとき、どうすればいいか？というまとめを話している。

12:00 部屋に戻って歌をうたう(リロ先生がギターをひく)おにいさんが最後をしめくくっている。

12:05 終了。

2004年4月22日(木) 晴れ とても暖かい。

毎週木曜日は年長組の日。普段は年齢が混ざったグループで活動しているが、週に1日、年長組みグループをつくって小学校へあがれるかテストをする。

先生1人 子ども6人(男4人、女2人)

08:45 子どもたちが次々集まってくる。そして自然に遊び始める。親と先生との

会話が絶えない。ラーラ（5歳の女の子）が人形を持ってきて「この人形はとってもとってもとっても高いの」と言っている。

08:55 森へ出発。森の中でリロ先生が植物の性質を子どもたちに教えている。「すぐ小さいのもあるね」と言っている。森の中と森の外で気温を測ることは重要。夏は森の外に比べて森の中のほうが涼しいし、冬は森の外に比べて森の中のほうが暖かい。子どもたちは毎日の天気と気温を調べるのと同時に、月ごとに森の気温と森の外の気温も測っている。パウル（4歳の男の子）は、道に落ちている木の枝を肩に乗せて「ハイホー」と言いながら小人ごっこをしている。

09:30 バウワーゲンに到着。今日は暖かいので外でプロジェクトをする。バウワーゲンの中から長いすとテーブルを出して広場に運ぶ。子どもたちは大きなテーブルを運ぶのに、どうすれば一番運びやすいかを考える。折りたたみ式のテーブルだったので、足を折りたたんで上手にみんなで協力して運んでいた。地球儀を持ってきて地理の学習。ザスキア（6歳の女の子）は「ラインバッハはどこ？」と聞いている。リロ先生は、地球が太陽のまわりをどうまわっているかということの説明をしている。マリコはどこからきたのかな？「日本!!!」と言いながら、いろんな国を見ている。私は日本語で「山」「川」「木」の漢字を書いて、子どもたちに教える。子どもたちは興味津々。集中力が素晴らしい。観察力が高く、私が書いたものをそのままそっくり真似して書いてくれた。そして、私の説明もよく聞いてくれている。子どもたちに、「日本語を話せる？」と問いかけると、みんな口々に「山!」「川!」「木!」と言っている。「わお。すごいねえ」と言うと、リロ先生はひとりで笑っていた。日本語の勉強をしてから色塗り。先生が絵を書いた紙を子どもたちに渡している。月ごとに色塗りの絵のテーマが違う。4月はタンポポと蝶の絵。「タンポポは何色？」と聞きながら、先生は色の塗り方を説明している。そして、蝶の図鑑の写真を見せて、いろんな種類の蝶がいることを伝えている。

10:45 色塗りをそれぞれ気に入った場所でやっている。とつものどか。自由で、圧迫感が全然ない。

11:00 “Waschen Strasse”に並ぶ。今日の子どもの人数はとっても少ない。先生がいなくても、みんな輪になって手をつないでいつものように「いただきます」の歌をうたって食べ始める。リロ先生は小学校の音楽の先生をしていたらしい。私が子どもたちの使った色鉛筆を片付けようとしたら、「大人が片付ける

ことも時には必要だけど、これは、子どもたちが自分で片付けるのがいいと私は思うの」とリロ先生が言った。

11:20 朝ごはんを食べ終わり、輪になって座り、歌をうたう。子どもたちは、自分たちで色鉛筆やいすやテーブルを片付け始める。子どもたちは2日前に植えた植物の種も忘れずに観察している。森で遊んだり、小川で遊んだり、(マリオスが小川から水を汲んできて微生物を観察している) 子どもたちは今日も元気いっぱい。リロ先生は、森で子どもたちが集めた木の実や葉をファイルしているものを見せてくれた。そして、”Kosmos Naturspiele Welche Baeume kennst du schon?” というゲームを見せてくれた。これは、このゲームで何枚もの違う木の絵を見た後、実際に森に出かけていき、ゲームで見た同じ本物の木を探すというものだ。そうすることによって、木が、身近だということをかんじるようになる。私が写真をとっていると、マティアスが、森の中にはきれいな場所がたくさんあって写真がいっぱいとれるよ!と教えてくれた。

12:15 帰り道、マティアスが、道端に咲いているタンポポを摘んで、「黄色い鼻!」と言って、鼻にタンポポの花粉をこすりつけている。自然の中での遊び方を彼は知っている。そして、そのへんに咲いている花をたくさんつんで、「お父さんの身体の調子が良くないから花をあげるんだ」と言っている。とってもやさしい。これは何ていう花?ときいたら、摘んだ全部の花の名前を教えてくれた。マティアスと2人で歩いていたが、彼は、いろんなことをお話してくれた。私がつまらなくないように配慮してくれているようにも見えた。

12:30 解散場所に到着。とっても面白かった。いろんな性格の子、いろんな年齢の子がいっしょになって遊ぶことはとてもいいことだと先生と保護者が話しているのが聞こえた。

2004年4月23日(金) 雨のち晴れ

今日は朝から雨。久しぶりの雨だけど、自転車で8キロの道のりを走らなくてはいけないので、まいっちゃうなあ。ちょっとブルーな気分でお家を出た。

08:45 子どもたちが集まっている。なんだか晴れの日よりも、子どもたちははしゃいでいるように見える。すごい勢いで水溜りに入ってパチャパチャしている。

- 09 : 15 まだ雨が降っている。森の入口で、みんなで手をつないで静かに雨の音を聴く。それから子どもたちは、上を見上げて雨を肌で感じている。口を開けて雨が口の中に入ってくるのを待っている子もいる。子どもたちはとっても雨が好きなように見えるけど、ラーラとヨエルに聞いてみたら、べつに好きじゃないらしい。
- 10 : 15 アンドアがお腹が空いて自分でお弁当箱をとりだしている。今日はパウワージェンの中で朝ごはん。ガビ先生が”DAS VIER-Farben LAND”という本を読み始めた。赤青黄緑の4色の世界があって、人々が生活しているけど、それぞれの世界は一色しかないから、つまらなくて、子どもたちは怒り出す。でも、最後には、4つの世界の境界線で子どもたちが出会って、仲良くなり、全部の色がある世界になるというお話。この本は、どんな肌の色の人間も、どんな個性を持った人間も仲良くし、差別がない世界平和を願っている本だ。先生が読み終わってから、子どもたちは興味津々。「もう一回！もう一回！」の声があがる。子どもたちは、その本を自分たちで読み始めた。マティアスとマリオスは何か真剣に話し合いながら、その絵本を読んでいる。
- 11 : 00 食べ終わっておしっこ。ヨジアがテーブルを拭いている。外は晴れてきた。外で遊ぶ子どもたちと、中でゲームをする子どもたちがいる。自然の草花や木の実がかかっているカードをひいていく。子どもたちは、今まで森で見してきた自分の経験をもとに、その絵を見て、その植物の名前や特徴（おいしいとかどんな色をしているとか）を話している。時々、このような自然との関わりがあるゲームをして、知識を高めていく。いつの間にかレアが歌をうたいはじめた。彼女は、カスターニアンカードを引いて大喜び。なぜなら、習ったばかりの植物だから。森で遊んでいるグループのところに行くと、男の子たちはインディアンのテントをつくっている。マティアスが木の種を拾って私にくれた。ちゃんと、実践して、わかりやすいように説明してくれる。マリオスはテントの前で弓矢をつくってとばしている。マティアスは大きな木を持って「インディアンの長」を演じている。
- 12 : 00 パウワージェンの隣の広場に集まる。今日はマリオスの6歳の誕生日会。手づくりのろうそくを木のオブジェにさして、火をつける。誕生日の歌をうたって、ひとりずつマリオスにお祝いの言葉を言う。それからマリオスの胴上げを6回して（6歳の誕生日だから）、おしまい。

12:20 誕生日の歌を歌いながら帰る。

2004年4月24日(土) 晴れ

今日の午後、今、私が通っている一つの森グループは、家族同伴でメッケンハイムという隣の町へ羊を見に行く計画だ。私も誘われて行ってきた。時々、保護者主催の、このようなプログラムがあるらしい。

午後3時過ぎ、パウル(4歳の男の子)とお母さんが車で迎えに来てくれた。パウルのお母さんのマリオンはとても明るくておねえさんみたいな人だ。車の中では世間話で盛り上がる。一軒の農家に到着。おお、幼稚園の子どもたちのお父さんやお母さんや兄弟がたくさんいる。みんな幼稚園のことや家族のことについての話題が絶えないようだ。子どもたちは、子どもたちで、草原の上を駆け巡ったり、木登りしたりしている。今日は、みんな普段着だけど、水溜りを見つけては、森の幼稚園にいる時の感覚でバチャバチャ入っていく。近くにいたお母さんたちが顔を見合わせて「はあ〜」という様子(笑)しばらくしてリロ先生が子どもたちを呼び集める。そして、並んで出発。今日はとっても暖かい。タンポポがたくさん咲いている。まわりには田園風景が広がっている。羊の牧場までの道のりの間に、牛の牧場の前を通りかかった。そこで、牛も見学する。そして、また歩いて羊牧場に到着。子どもたちは少し疲れている様子。でも、羊の鳴き声や姿に興味津々。「マリコ！見て見て！羊！羊！」と叫んでいる(笑)ひとしきり見学した後、お茶を飲みに行く。ドイツ人は週末の午後にお茶をしながらお話しするのが大好きだ。7時過ぎ、幼稚園の保護者たちがぼちぼち帰り始める。

2004年4月26日(月) 晴れ

先生2人 子ども12人(男9人、女3人)

08:40 集合場所に到着。今日の集まりは遅い様子。レア(6歳の女の子)がおばあちゃんとお母さんとやってきた。レオンとヨハンナが、さっきからブランコに乗りながらジョークを言い合って笑っている。

09:30 集合場所に輪になって座る。そして少し早い「いただきます」の歌をうたって朝ごはん。リロ先生がお話をはじめ。リスやワシやモグラの特徴を先生が話して、子どもたちがそれを当てる。みんなパパッと手を挙げる。まちがっていてもみんな思い思いのことを発言している。とっても楽しそう。先生は、チョウの成り立ちを説明して、「マリコ！わかる？」と質問してきた。ちょっと考えてから、「うーん、わかりません」と答えたら、ヤン(5歳の男

の子) やマティアスが真剣に、一生懸命に私の目を見て、違うドイツ語の単語を使って教えてくれる。マティアスがタンポポをとって、本にはさんで記録にしたらいよいよと言ってくれた。

10:15 仲良く手をつないで出発。今日はいつもと違う方向へすすんでいく。今日は、救急隊員から本物の救急車についてお話を聞くことになっている。救急車が集合場所に来ていて、今日はその中を見学する。なんとヤン①のお父さんがいる。彼は医師らしい。子どもたちは、救急隊員から救急セットの中を見て説明を受ける。救急隊員は、ものを見せたり、実際に触らせたり、実践して見せたり、子どもたちの興味を引き出すようにわかりやすく説明している。中を一通り見た後は、外に出て、救急車のサイレンの音を聞く。めちゃくちゃうるさい。子どもたちは、耳をふさぎながらも、大喜び。「もう一回！もう一回！」の大合唱。

11:05 終了。救急車は帰っていった。少し時間があるので、2つある公園のどちらで遊ぶかを子どもたちに聞く。多数決により決まる。その前に、集合場所に座って、先生が持ってきたリンゴジュースを飲む。みんなが飲み終わる頃、マティアスが自らみんなのコップを集めて片付けの手伝いをしている。

11:30 みんな公園で遊び始めた。パウル(4歳の男の子)が小さな幼虫を見つけて目を大きくして見ている。それから先生からルーペ(虫眼鏡)を借りて観察している。私にもうれしそうに報告に来てくれた。そして、大切そうに手の上に乗せてみんなの方へ行ってしまった。今度はレアも、もう少し大きい幼虫を見つけてきた。おうちに持って帰るんだと言って、パウルと2人で話合っている。パウルは葉を持ってきてその上に虫を乗せている。ダーヴィッド①は砂場で砂を掘って、犬のマネをしている。相変わらずだ(笑)

12:30 再びみんな輪になって手をつないで歌を歌って解散。

2004年4月27日(火) 晴れ

先生2人 子ども14人

09:15 集合場所で手をつないで輪になって歌をうたう。太陽がいっぱいであれしいなあという内容の歌。その後、ラーラ(5歳の女の子)が人数を数え始めた。

10:10 図書館へ出発。ラインバッハの街を少し探検してから行く。マティアスが、

芝生でカエルのマネをしている（笑）天気がよくてとても気持ちいい。街へ出る時は、いつも社会のお勉強。交通ルールを学んだり、大きなバスや、いろんな形の自動車、お店に並んでいるパンやおもちゃを見たり、古い酒屋の中を通り抜けたり……。2人1組になって仲良く手をつないで歩く。

11:00 図書館に到着。図書館の人とあいさつをする。そして座って、図書館についてのお話を聞く。子どもたちは集中している。そして、質問にはパパッと手が挙がる。鳥の本のお話が出てきた時、今の森の幼稚園のテーマだから、子どもたちの中で「おお〜」という声があがる。この前習った鳥の歌をレアが歌いだした。そして、これまた偶然、タンポポの絵本の説明もされた。ちょうど、きのうのテーマだったのでリロ先生が「ワーオ!!!」と言って、とても驚いていた。子どもたちは、図書館についての説明の最後のほうになると、集中力が切れてきた様子だ。ねっころがったり、手遊びをする子がでてきた。でも、図書館の人が絵本を読み始めると、子どもたちは絵本に釘付け。とても上手な読み方だ。

11:50 絵本は終わり、子どもたちは自分の興味のある本を探している。彼らはみんな本に興味を持っているようだ。

12:00 集合場所に帰る。帰り道も、習った交通ルールを実践しながら帰る。マリオス（6歳の男の子）が2本の枝だけを使って、それを頭に当ててトナカイになったり、向きを変えてウシになったり、枝を頬のところに持ってきてナマズになったりしている。すごい想像力だ。たった2本の小枝でも、考えようによっては、いろんな使い道があり、いろんな可能性をもっていることを彼は発見したようだ。パウル（4歳の男の子）が大きなミミズを見つけて得意そうに持ってきた。

12:30 集合場所に到着。歌をうたって解散。

2004年4月28日（水）晴れ

4日ぶりの森。ヨジア（5歳の男の子）が突然私のところにやってきて、「ガビ（先生）とマリコとボクは同じ靴だね」と知らせてくれた。すごい観察力だ。とリロ先生と話した。ラーラとレオンが道の端に咲いている花を観察している。今の時期は、葉に小さなチョウの幼虫やタマゴがついている。子どもたちは、幼虫が食べた後の葉の小さな穴でさえ見逃さない。ヤンとパウルが歩きながら小さな木を縦笛に見立てて「ターターター」と歌っ

ている。この子たちを見ていて、音楽は本当に重要だと思った。自然に口ずさむことができるのがすごくいいと思う。

09:20 いつも遊ぶひとつの場所に到着。男の子たちはいつもピストルごっこが大好きだ。昨日、私は夜中まで友人と会っていて友人の家に泊まったのでボンから通園。すごく眠い。リロもガビもとても眠いらしい（笑）ラーラが家から包帯を持ってきてドクターごっこをしたいらしい。おととい見た救急車の印象がまだ残っている。レオンはその辺に生えている植物を食べて味をためしている。

09:30 バウワーゲンに到着。子どもたちは植物（自分たちが植えた）を観察する。それからバウワーゲンの隣の広場に座って歌をうたう。今日の子どもの数をみんなで数える。あ、マリオスがいない。どうしたのかと思ったら、ジョウロに水を汲んできた。そしてみんなで植えた植物に水をやっている。これは、先生に頼まれたわけでもなく、自ら行動していることだ。マリオスが水をあげおわってみんなの輪の中にすわる。ヤンが個人的にもう一度人数を数えて、人数が揃ったので、ひとりで納得している。地面にねっころがって、先生の説明を聞きながらカスターニアンに自分になったつもりになる。種から芽が出て大きく成長して・・・というように両手を広げたりして、自分自身のイメージで身体全体で表現している。その後、輪になって、みんなで歌いながら種から芽が出て大きくなる場所を表現している。

10:00 “Waschen Strasse”に並ぶ。ラーラが、「今日は私がみんなに水をかけたい！」と言って、リロ先生にお願いしている。レオンも「今日はボクがみんなに石鹸を配りたい！」とってチューブから石鹸をだしてみんなにあげている。みんな、自分がやってみたいと思うことをしっかりと伝えている。朝ごはんを食べている時、リロ先生が昨日、図書館で借りてきた絵本を読み始めた。森のクマさんのお話。絵本を読んでいるとき、子どもたちはみんな真剣な表情だ。

11:00 絵本が終わり、お弁当箱のお片づけ。そして、おしっこをしたい子はおしっこ。お、私の隣でマリオスがロボットの真似をしてカクカク動いている。ヨジアが水量を測っている。今朝、少し雨が降っていたので、けっこうたまっている、「おお〜」と言っている。

11:10 森の中のいつもの遊び場で遊び始めた。パウルが小さなクワガタを見つけ

てみんなに見せて知らせている。他の子どもなら怖がるけど、パウルや森の幼稚園の子どもたちは恐れない、とガビ先生は教えてくれた。パウルはそのクワガタを地面において、その虫がどのような行動をとるかずっと見ている。毎日同じ場所で土をほったり、跳んだり跳ねたりして遊ぶから木の根がむき出しになってしまう。それが今の森の幼稚園の問題。

11:55 子どもたちはバウワーゲンにもどる。

12:10 集合場所に向けて歩き始める。ヤン①のお父さんが馬に乗って通りかかった。リロ先生が馬に乗せてもらっていた。ドイツでは乗馬がとても人気らしい。歩いている途中で、パウルが「トラ！」と言って地面に爪をたてて爪あとを残している。

12:20 集合場所に到着。少し時間があるので輪になって座って昨日借りてきた本を読む。ヤンが読みたがって、得意気にその本の内容を説明している。本人は本を読んでいるつもりらしい。その後、子どもたちは絵を見て自分の意見を言い合って話し合っている。

12:30 解散

2004年4月29日(木) くもり

今日は、先週と同じく、6歳の子どものみのクラスがある。6人の6歳児(男4、女2)

08:50 集合場所で春を見つける。新芽を見つけたり、新緑の木を見上げたり、春の花を摘んだり……。見つけた春を箱の中に入れる。

09:15 一列にならんで出発。ひとりが歌をうたいはじめるとみんな歌い始める。とても楽しい。子どもたちは、自分がきれいだと感じた植物を摘んでくる。表現できなくても、まず、自分で感じる事が重要だと思う。集合場所に前にはスポーツセンター建設の工事をしている。その前を通りかかると、子どもたちはその工事をずっと見ている。そして、マティアスがおじさんに何か質問している。本物の自然を毎日毎日見ているから、時々自然の中にごみ落ちてしていると、それがとても汚く思えて気になる。そして、拾ってきれいにしたくなる。(私が最近感じてきたこと) マティアスが大きなナメクジを見つけてみんなに見せている。女の子も気持ち悪がるどころか、興味津々。手の上にのせて観察している。カレーの匂いがする植物を見つけて匂いをかいで、

「うーん、おいしい！」とみんな叫んでいる。マティアスがまた、大きなカタツムリを見つけたので、道の端の緑のところにのせてあげている。

- 10:00 バウワーゲンに到着。"Waschen Strasse"に並ぶ。
- 10:10 バウワーゲンの隣の広場で歌をうたって朝ごはん。中学生の集団がよくランニングをして通り過ぎていく。犬の散歩をしている人、散歩しているお年寄り、サイクリングを楽しんでいる人・・・いろいろな人がバウワーゲンの横を通り過ぎていく。そして、子どもたちは、挨拶を交わす。今日は、絵本がどこかへ行ってしまった。だから読めないとリロ先生が残念そうに言うと、マティアスとマリオスがバウワーゲンから探してきた。マティアスは記憶力がとてもいい。子どもたちは、目的を達成するために自分でいろいろ考えて行動してみる。リロ先生はびっくり。そして、絵本を読み始めた。先生の存在はとても大きい。なんだか安心感がある。絵本を読んでいる時、鳥の鳴き声が聴こえた。その声が、グワー、グワー、グワーという不自然な声だと子どもたちは察知したようだ。鳴き声だけで、どの鳥かがわかり、レアが図鑑で調べている。普通はクエー、クエー、クエーと鳴くので今日はその鳥は病気かもしれないと子どもたちは話し合っている。毎日自然とふれあっているから、少し声を聞いただけで鳥の鳴き声の変化に気づく。自然の音を聞くことはとても重要だとリロ先生は言う。まずは自然の中で身体をつかって感じる。そしてその翌日や翌週に前に森で聞いた鳥の鳴き声や見つけた植物などを図鑑で調べてみる。本物を見続けること、また、毎日聞いて観察することによって少しの変化に気づくことができるようになる。
- 10:45 食後、さっき集めてきた植物を自分の好きな形に並べてみる。それぞれのセンスが問われる。それを家に持って帰ってファイルする。
- 11:20 森でひとしきり遊んだ後はバウワーゲンでタンポポとミツバチの色塗り。ハチの歌をうたいながら。同じハチのうたを日本語でうたったら、みんな笑った。ザスキア（6歳の女の子）にもう一度日本語をかいてほしいと言われて、山、川、木を書いたら、他の子も興味津々。注目の的だった。ヨハネス③も私が書いている文字を見て「すごいへんなの。ボクらの字と全然違うね」と言って笑っている。
- 12:30 集合場所に到着。保護者の連帯がすごい。先生が病気の時、代わりにくる人（保護者）を決めて、そのリストを配っていた。

2004年5月3日（月）晴れ

先生：2人 子ども：13人（男11人、女2人）

今週は、いつもの森を休ませるためにメアツバッハという違う森に出発。パウルが大きな虫眼鏡を持参。しかもピンセット付き。虫つかみ用らしい。みんなに見せている。アンドアに見せたら、「いい虫眼鏡だね」と言われたので、パウルは「ありがとう」と返している。ほほえましい光景だ。アンドアが鳥の羽を見つけて自分の鼻にこしょこしょこすりつけて感触を味わっている。そして、自分のジーンズのポケットに入れていた。ラーラとパウルとレオンが虫眼鏡で観察している。虫の食べた葉の穴を見つけて、「見て見て！」と叫んでいる。小川で水の中の石を観察している子どももいる。

09：40 いつものように輪になって歌をうたって人数を数える。そしてこれから進む方向をみんなで決める。そして、自らササッと並ぶ。すごいぞ。ヨハネスが小さな小さな尺取虫を見つけて「見て見て～！」とやってきた。アンドアは相変わらずよく話しかけてくる。大きな目をもっと大きくして。散歩をしていた5人ぐらいのお年寄りが「これは森の幼稚園なの？すごいわねえ。すばらしいわねえ」と、みんなで話している。マティアスとヨエルは穴を掘っている。

10：20 リロ先生が遊んでいる子どもたちのかたわらでギターを弾き始めた。ラーラはふかふかの落ち葉の上にダイブしているし、マティアスははまだ穴を掘っている。思いっきり走ったり、思いっきり叫んだりしている子もいる。アンドアは、近くの大きな木に抱きついていて。何を感じているのだろうか？パウルが大きなミミズを見つけてうれしそうに触っている。私は、森の幼稚園に来て、転んでも泣いている子を見たことがない。

10：40 “Waschen Strasse”に並ぶ。ダーヴィッドが墨を見つけて、「火をたいたあとだね」と言っている。

10：55 今日はパウルとアンドアが一日中、仲良しだ。今日は好きなところに座っている。リロ先生が「静かに～、しー」と言っている。そして耳を澄ますと鳥の鳴き声が何種類も聴こえる。風の音、植物が重なり合う音、飛行機の音も聞こえる。みんな目を閉じて、よく耳を澄ます。しばらくして、リロ先生が歌を歌い始めた。「いただきます」の歌もうたって、朝ごはんを食べ始める。

11:15 リロ先生が子どもたちを集めてギターを弾いて歌いだす。マティアスが M を私のノートに書いて、「ムー」と言っている。「マティアス、マリオス、マリコ・・・」みんな「ムー」の「M」ではじまるね。と教えてくれた。マティアスが日本語に興味を持っている。

11:30 一列に並んで帰り道につく。いつもの森ではないので、先生もちよっと道に迷っている。帰り道の途中で花を摘んでいる。レオンが私に花を摘んでくれた。少し時間があるので、森の中に入って、輪になって座って歌を歌う。今月は鳥がテーマ。鳥の歌を何曲か歌う。鳥が結婚する時はどうするかな？という質問に子どもたちは考える。先生は、本を読みながら説明する。マティアスが雄鳥になって口笛をふいてメス鳥を呼ぶ。そしてレアがメス鳥になって、マティアスのもとに飛んでいく。その光景はなんともかわいらしい。そして、みんなで鳥の歌を歌う。「アンドアは、森の幼稚園に通い始めたばかりの子どもだから、ルールがわからずに、自分勝手なことをしたり、すぐに怒ったりする。でも。アンドアがこれからどんなふうになっていくかをみることができるから私はとても幸せで運がいいと思う」とリロ先生が話してくれた。

12:30 終了。

2004年5月5日くもり

先生2人 子ども:12人

マティアスは本当によく植物の名前をよく知っている。森を歩きながら、道に咲いている花を摘んで私にくれた。それは、小さな小さな花だったけど、名前をよく知っている。そして、私に教えてくれた。マティアスはほとんどの植物や木の名前を知っていて私に教えてくれる。

森の幼稚園を好きかと聞くと、好きだと答え、その理由をこう話してくれた。「家にあるおもちゃだと、同じものしかなくて、決まった遊びしかできないから、つまらない。でも、森の幼稚園では、1本の木の枝がピストルになったり、動物の角になったり、刀になったり、いろいろなものになるから面白い。そして、森の中では、いろんなことを考えることができるから楽しい。」

森の入口にある、鳥の看板を見ながら、どの鳥を知っているか、みんなで話し合う。川のところに来ると、ヤンが大きな石を引き上げようとしている。リロ先生がリュックサック

クからロープを取り出してきて、これで引き上げればいいよ。とヤンに渡している。みんなの注目のもと、ヤンは自分で石にロープをくくりつけてみんなで引き上げた。そして、ふたたびみんなで、その大きな石を川の中へ投げた。ドボーンという大きな音と、水しぶきがとぶ。みんな大喜び。

最近、子どもたちを見ていて、森の幼稚園の子どもたちは、小さなものにとっても敏感に反応すると思う。大きな虫よりも、小さな小さな虫を見つけたときのほうが、よく見せに来るし、みんなに報告している。また、小さな花をよく摘んでいる。

2004年5月6日（木）くもり

年長組の日

08:45 マティアス（6歳の男の子）が大きいカスターニアンの木の下に、小さいカスターニアンが芽が出ていることを発見して、「わーお。すごいね」という感じで、みんなで観察している。

09:15 いつものひとつの森の遊び場に到着。この前、図書館で借りてきた”Tokyo”の写真集を見せて、日本の東京について、子どもたちに説明する。全然違う町並みや容姿に驚きの表情。そして、パウワーゲンに向けて歩き出す。「この森は、第二次世界大戦のときに攻撃にあって、ぼこぼこにやられた。今もその爆弾の後が穴となっていくつも残っているの」とリロ先生は教えてくれた。たしかに、いたるところにぼこぼこ穴があいている。

09:25 パウワーゲンに到着。パウワーゲンのとなりの広場に座って”Tokyo”の本の続き。その後、子どもたちは好きなことをして遊ぶ。レアはパウワーゲンの中でひとりでカエルとイチゴの色塗りをしている。パウワーゲンのとなりの広場では、マティアスが自分たちの植えた植物の手入れをしている。「これはKresseという植物で上のほうが食べることができるんだよ」と言って食べさせてくれた。空を見上げると、3羽のトンビが円を回って飛んでいる。「おお！」と言ってみんな空を見上げる。

10:25 “Waschen Strasse”に並ぶ。レアがみんなに石鹼を配ろうとしてチューブから石鹼を出そうとしている。しかし、うまくでない。私が手伝って、チューブを押したら、勢い余ってチューブとたくさん出て周りの草にかかってしまった。「あ・・・」と思っていると、リロ先生が、「だいじょうぶ。この石鹼は”Lava Erde”といって溶岩からできているの。だから、植物にかかっても平気。森で

は、できるだけ自然に近いものを使用しているのよ」と教えてくれた。

10 : 30 朝ごはんの歌を歌い、食べ始める。先生が絵本を読み、子どもたちは食べながら聞いている。とちゅうで、双子のマリオスとユリアンの集中力が切れて、ナイフでその辺の木の枝を削り始めた。リロ先生は、この2人は、まだ小学校にあがれないと考えていると話してくれた。

11 : 50 朝ごはんは終わり、パウアーゲンの中に入る。リロ先生の教え方を見ると、次に何をしてくれるのか、とてもわくわくする。そして、常に子どもたちの興味を失わないように進めていく。これからみんなでドイツ語と英語と日本語の学習をする。円になってテーブルを囲んで座る。ユリアンの鼻がでている。リロ先生は、ポケットからティッシュを取り出し、ユリアンに渡す。そして、ユリアン自身に鼻をかませている。ドイツでは、6歳になっても、鼻をかむことができない、服を着ることができない、歯を磨くことができない、トイレの後、おしりを拭くことができない、という子どもがたくさんいる。また、6歳になってもオムツが外れない子どももいて、問題になっているという。それは、親が、子どもがひとりでできることでも、なんでもしてしまうから。そして、リロ先生は続けて言った。「この森の幼稚園では、子どもたちは何人かといっしょにグループになって遊ぶことも多いが、時にひとりで遊ぶ子どももいる。ひとりで遊ぶことはとても重要。なぜなら、ひとりで絵を描いたり、もの思いにふけったり、人間以外の動物や植物に触れて何かを考えたり、自分自身の中で自分に出会うことはとても重要で、人間にはそれが必要だから。でも、一般的な幼稚園では、ひとりで遊ぶ時間はあまりない。なぜなら、ひとりで遊んでいて、危険なことが起こったとき、対処できないから反対する親が多い。とても残念だ」森の幼稚園では、「ひとりの時間を持つこと」をとても大切にしていると私は思う。

雨、雪、鳥、巣、など自然に関する単語と、数字と、月(1月、2月、3月、・・・)をドイツ語、英語、日本語で学習する。子どもたちは、漢字の成り立ちに興味津々。リロ先生も漢字は絵みたいで面白いと言っていた。あつというまに時間が過ぎ、帰らなければいけない時間が来た。リロ先生はとても残念がっている。「あー、時間が短い。残念ね。でも、来年からは朝7時頃から午後2時ごろまで森の幼稚園を開園する予定だから楽しみだわ」と張り切っている。

12 : 20 時間ぎりぎり集合場所に向かって出発する。リロ先生は、最近、幼稚園の会議や、いろいろなことをしていて、仕事が多すぎる。だからもっとゆっくりする時間が必要だと言っている。時間があるときは、友だちと哲学につ

いて話し合ったりするらしい。それがとても楽しいの。と帰り道に歩きながら笑顔で語ってくれた。

12:30 到着。今日はガビ先生に車で家まで送ってもらった。ガビ先生も最近幼稚園の仕事と家の仕事で忙しくて、寝る時間も少ないし、自分の時間が持てないと残念がっている。家族にも、ちょっと忙しすぎだと言われるらしい。

2004年5月7日（金）雨

今日は朝からどしゃぶりの雨。

08:40 森に到着。雨でも子どもたちは12人いる。レオンは到着して、すぐに水溜りの中にバチャバチャ入っていった。泥水が近くにいた私にもかかり、びしょびしょ・・・。

09:10 手をつないで輪になって朝の歌をうたい、人数を数えてから森へ出発。今日は5月なのにとっても寒い。一部の子どもたちも少し神経質な様子。いつも立ち寄って遊ぶ小川のところも今日は通り越して進んでいく。移動中も子どもたちは、ナメクジやカタツムリなどを見つけては、手にとって観察している。パウル（4歳の男の子）は寒くて雨が降っているので早く帰りたいと言っている。彼は、今朝、幼稚園に来た時から機嫌が悪かった。

10:00 朝ごはんの時間だが、今日はいつもの森ではないので、パウワージェンがない。外で朝ごはんを食べなければならない。ヨハネス（4歳の男の子、マティアスの弟）がわき道にそれたところに大きな木がたくさん生えている場所を発見した。「あそこでごはんを食べればいいよ！」と先生に提案している。全然知らない道を進んで、うっすらとした森に入る。木の隙間から雨が滴り落ち、雨の音が聞こえる。子どもたちはリュックからシートをだして、なるべく雨がかからないような木の真下に座る。今日はリロ先生がひとりずつのところにまわってペットボトルの水をかける。「いただきます」の歌を歌って食べ始める。パウルは寒くて手がかじかんで、お弁当箱をうまく開けることができない。隣に座っていたレオンにお願いしている。ヤンの今日の朝ごはんには、長いソーセージが2本も入っていたので、「やったあ！」とひそかに喜んでいる（笑）今日は、雨が降っていて寒いから、だんだんみんな神経質になってきた。突然、パウルが泣き出した。理由はわからない。朝から機嫌が悪かったし、雨だからかなあ。それを見たレオンもつられて泣き出してしま

った。レオンが泣き出すと、パウルは泣き止み、ティッシュをとりだして、レオンの涙を拭いてあげている。それを見て、ガビ先生と私は大笑い。今日はとても寒いので、食べ終わった子どもから、走るゲームを始めだした。マティアスやヤン、ヨジアやヨエルはいつものようにはしゃいでいるけど、レオンは今日はあまり騒いでいない。やはり雨で、森の中はいつもより薄暗く、寒いから神経質になっている。少し長い間、このゲームを続けて身体を温める。

11:30 いつもの森のコースを歩き始める。子どもたちは道に咲いている草花や、落ちていた木の実、コケなどを拾い集めている。

12:00 「マリコ、こっちを見ちゃダメだよ」とマティアスたちに言われ、後ろをむいて歩く。「もう、見ていいよ」と言われ、振り向くと、みんなが集めた植物で、私のために大きなオブジェをつくってくれていた。なんだかすごいぞ。太陽のかたちにつくられている。そして、真ん中には木が立てられている。「これは、いつもマリコに太陽の光があたっていますよ」という意味。そして、木はボクたち生き物に酸素を提供してくれている。だから木は生きていくために必要なもの。マリコにも、いつも必要なものが与えられますよ」という意味が真ん中の木に込められているんだ」とマティアスが説明してくれた。みんな輪になって座って、一言ずつメッセージを言ってくれた。マティアスは、「日本に帰っても、いつも、マリコが神さまから守られますように。いいことがたくさんたくさんありますように。そして、またいつか、この森の幼稚園にもどってきてね」と言ってくれた。いつも私と手をつなぎながらなかったヤンは、「日本で森の幼稚園を作るとき、子どもたちといい関係をつくってね。マリコにたくさんの幸せがありますように。日本に気をつけて帰ってね」と言ってくれた。

たった5年や6年しか生きていない子どもたちが、本当に、このようなメッセージを私に残してくれたのだ。かつて私が幼稚園児だったとき、太陽の意味、人間が生きていくために必要なものは何なのか、また、人間同士の関係性について、自分の中で明確にし、発言することができたろうか？もう、そんな昔のことは忘れてしまったが、そんなことは考えもしなかったと思う。やはり、毎日自然の中で、本物の自然物に触れ、自分で何かを考える時間がたくさんあるから、このような言葉が自然に出てくるのかもしれない。そして、このようなオブジェを見ていると、言葉で説明してくれた以上にその意味の深さが伝わってきた。言葉で言い表せない「何か」というのは、とても強い印象として、心に刻み込まれる。人生を悟っているかのような、子ども

たちのメッセージは私にとって、とても衝撃的で、私の「森の幼稚園」への興味が、いっそう強くなった。

今日は、たしかに憂鬱な日だった。本当に、私も早く帰りたいと何度も思った。でも、「雨がたくさん降っていて、とても寒いからといって、森に出かけるのをやめてしまうと、それは本当の『森の幼稚園』ではない。どんな天候の時の森をも知る必要がある。そうでなければ、本当に自然を理解することができない」とリロ先生は森を歩きながら教えてくれた。そして、リロ先生は、歩きながら歌をうたったりして、少し神経質になっている子どもたちを景気づけようとしていたし、ガビ先生もどんな時も笑顔で、子どもたちを見守っている。先生方の包容力はとても大きいと思う。子どもたちへの配慮が、とても心がこもっていると思った。

ラインバッハの森の幼稚園 参与観察記録 2

2004年5月10日（月）くもり

今日から、もう一つの森グループへ参加します。

先生：2人 子ども：12人（男12人、女2人）

久しぶりの幼稚園。朝、8時過ぎに家を出る。昨日まで雨が降っていたから朝靄がすごい。まだ少し、薄暗い中、自転車を走らせる。あ、今まであたり一面に咲いていたタンポポがいつの間にか綿毛に変わり、黄色い野原が白い野原になっている。

08：30 集合場所に到着。ちょっとドキドキして行ったけど、「ようこそ！この森グループへ！」とヤナ先生が迎えてくれた。子どもたちが通園してくる。中には、ひとりの保護者が2、3人の子どもを相乗りさせて車でやってくる。

08：45 森へ出発。子どもたちは手をつないで歩く。ラッセル（4歳の男の子）とユリアン（6歳の男の子）が協力してみんなのリュックサックが入ったリアカーを押している。ラッセルが、道に大きな穴を発見した。水溜りだ。リアカーのタイヤが入ると、ハマってしまうと思っただけで、少し立ち止まってから、その穴をよけて通っていた。うしろから車がやってきた。一番後ろを歩いていたユリアンが、車に気づき、「車！車だよ！」とみんなに知らせている。ラッセルがリアカーを引いて、馬のように見えるから、コニー先生は馬の歌をうたいだした。こうやって、先生も子どもたちの想像力を引き出そうとする。でも、ラッセルは平然とした様子。

09：05 森の入口に到着。金曜日から日曜日まで降り続いた雨によって溝に水が流れ、小さな川ができています。なかなか流れが速い。子どもたちは、「あ、水だ！」というふうに、川ができていることを自ら発見する。そして、どうして川ができたのか子どもたちは考える。近くの大きな水溜りの中へ子どもたちはバチャバチャ入っていく。ラッセルは近くにあった木の棒を川につっこんで、どれくらいの深さがあるか調べている様子。みんな輪になって並び始めた。ヤナ先生が川の話をはじめます。ライン川の話、アマゾン川の話・・・。日本語で川は何て言うの？と聞かれたので、「カワ」と答えると、子どもたちは、「カワ」「カワ」と口々に発音する。私の隣にいたラッセルは、川についてよく発言している。そして、子どもたちは集中して先生の話をよく聞いている。ひとりの男の子が数を数え始めた。そして、違う男の子が逆から数を数える。

そして、ヤナ先生がスペイン語で数え始めた。その後、5月のテーマは鳥だからコニー先生が図鑑の絵を見せながら、鳥の話をはじめます。

09:25 再び歩き出す。ヨハネス（3歳の男の子）は私との久しぶりの再会で、ちょっとうれしい様子。「見て！～花が咲いているよ」と教えてくれた。コニー先生が丸太を発見。何に見える？と子どもたちに質問して盛り上がっている。いつものひとつの遊び場の前にも小さな川ができていた。これも雨によってできた川だ。いつの間にかコニー先生と子どもたちが、その小さな川を何度もパチャパチャと渡っている。「ペンギンがおうちに帰るところ」「ゾウが川を渡る場所」などいろいろ場面設定しながら。コニー先生は子どもたちが楽しく遊べるように手助けをしている。「おお！わあ！」と言って、さっきから水を足で蹴飛ばして水しぶきが跳ぶのを楽しんでいる。ラッセルは先生からもらった麻ヒモを木の枝にくくりつけてそれを川になびかせ、水がどれくらいの速さで流れているのか調べているようだ。雨が降った後で泥土で滑って転んでも、子どもたちは全然気にしない。ヨハネス（6歳の男の子）が長い木の枝に麻ヒモをくくりつけて小さい木をまたその先にくくりつけて川に投げて釣りごっこをしている。少し離れたところでは、男の子が3人、木に登って何か会議？を開いている。そして、なにやら木を木で削り始めた。あ、いつも散歩しているおじいさんが通りかかった。川で遊んでいる子どもたちに話しかけている。子どもたちは、それに応答している。そして、おじいさんに何か教わっているようだ。一人の女の子は木の厚い皮に棒を立てて緑の葉を帆代わりにしている。そして小さな船をつくった。大きな切り株の穴のあいているところを下にして川の中に立てる。その穴がトンネル代わりになり、そこに船を流して遊び始めた。すると、ヨハネス（6歳の男の子）やモーリッツ（4歳の男の子）もやってきて遊びに参加している。ヨハネス（3歳の男の子）が私のところに近寄ってきて「見て！茶色い石！」と見つけためずらしい石を見せに来てくれた。子どもたちは、先生の話の聞くときも集中してよく聞く。ラッセルが川の中で少し大きめの石を見つけて手で拭いている。女の子2人（ヴェロニカ5歳とザスキア6歳）が川の水で手を洗っている。「あー冷たい！あうっ！」と言って目をつぶっている。感触を肌で感じている。男の子たちは石集めに夢中で、川の冷たい水の中でも平気で石をとっている。

10:20 “Waschen Strasse”に並ぶ。私も水（少し温かいお湯）を子どもたちの手にかけてまわる。

10:35 遊んでいた場所の片隅で輪になって座る。いつものように手をつないで歌

を歌って食べ始める。食べながら誕生日の話をしている。ごはんちゅうは、それぞれにおしゃべり。とっても楽しそうだ。「この水筒の中にはコーラが入っている」とか、「ビールが入っている」とか言って、飲んだ直後に、「あ、やっぱりリンゴジュースだった」とか言ってジョークをとぼしている子もいる（笑）

10 : 55 食べ終わっておしっこをしたい子はそこらへんに散らばっておしっこをする。そしてまた自由に遊び始める。ヨハネス（6歳の男の子）は、さっきの釣りの続きをしている。雨が降ってきた。急いでフードをかぶる。コニー先生はニワトリのオブジェを木の枝と新聞紙と、のり（ジャガイモのでんぷんでできた）と麻ヒモで作っている。これは全部無料だし、自然に戻る材料だ。「太ったチキンを作るから、もっと新聞紙を丸めなくっちゃ」と言っている。

11 : 45 ヤナ先生が集合の声をかける。散らばっていた子どもたちが集まってくる。そして、先生は子どもの数を数える。

11 : 50 バウワーゲンに立ち寄って、以前にひとりずつ植えたヒマワリの鉢を持って帰る。自分で描いたヒマワリの絵も鉢に刺さっている。もう、芽が出始めたヒマワリもある。子どもたちは、一列に並んで先生が来るのを待っている。「両手で持って落とさないようにね」とヤナ先生は子どもたちに注意する。ラーラーラー・・・と口ずさみながら子どもたちは歩いていく。コニー先生は、バウワーゲンで「のり」をつくっている。明日、また使う「のり」の準備だ。帰りながらラッセルはタンポポを摘んでいたの、私は、マティアスに教えてもらった「黄色い鼻っていうあそびを知っている？」と聞いてみた。そしたら、ラッセルは「うん」と言って鼻にたんぽぽをこすり始めた。やはり、森の幼稚園の子どもたちは、みんな知ってるんだ。鼻だけでなく、おでこや頬にも。そして、「にー！！」という笑顔で私のほうを向いて顔を見せてくれた。

12 : 20 集合場所に到着。まだラッセルはわき道に咲いているタンポポをとって、もっと「黄色い鼻」をしようとしている。そばにいたヨハネス（5歳の男の子）がそれを見て面白がっている。ヨハネス（3歳の男の子）がヒマワリの鉢を持ってきて「これはヒマワリで芽が少しでてるんだ」と説明してくれた。ラッセルは迎えに来た弟にヒマワリの鉢を持たせてあげている。優しいおにいちゃんだ。今日はもう一つのグループが違う森へ行ってしまったので、集合場所は保護者の数も子どもたちの数も少なく、なんだかさみしい。

2004年5月11日(火) くもり

先生：2人 子ども：7人(男5、女2)

- 08:55 森へ歩き出す。パウラ(3歳の女の子)は今日はお父さんといっしょに来ている。歩きながら道に落ちているストローを発見して、何かお父さんに言っている。ユリアン(6歳の男の子)とヨハネス(5歳の男の子)が花を摘んでいる。そして本にはさんで押し花にしている。コニー先生は、“ファイヤーバーム”というトゲトゲがある葉に私の手を触れさせた。とても痛い。みんな笑っている。子どもたちはこの葉を怖がるという。でも、その植物は料理するととてもおいしいらしい。子どもたちはその知識を知っている。
- 09:20 森の入口に到着。水溜りに木の皮を浮かべて、パウラのお父さんもいっしょに遊んでいる。輪になって手をつないで2曲ぐらい鳥の歌をうたう。
- 09:35 バウワーゲンに到着。“Busshard”という鳥が飛んでいる。とコニー先生は私に知らせてくれた。子どもたちは、私によく話しかけてくるが、私が彼らの話しているドイツ語が理解できないと、子どもたちは伝えることを諦めずに例えをつかったり、違うドイツ語で説明してくれる。コミュニケーションをとるための方法は一つだけではないということを幼稚園児にして把握している。ユリアンがアウトバーンと言って小さい丸太を転がして「かっこいい!」と言っている。私が、「アウトバーン??」と聞くと、「うん。日本語ではなんていうの?」と聞いてきたので、「道路」というと、「ドウロ、ドウロ!」と言って、ヤナ先生に報告している。ヤナ先生は、「ユリアンは日本語が話せるのね」と言って笑っている。モニカ(4歳の女の子)が小さな小さなナメクジを発見して「小さなナメクジを見つけたの」と言って指に乗せてやってきた。
- 10:25 ヴァッシュシュトラッセに並ぶ。ヤナ先生が物語を読み始めた。絵本ではない。子どもたちは自分の頭で想像する。
- 10:50 朝ご飯を食べ終わる。森へ探検に行く。昨日の川がなくなっていることにヨハネスが気づいたようだ。子どもたちを自由に遊ばせるのは、とても重要な方針。子どもたちがどうしても助けが必要な時だけ、私たちが手伝う。例えば、危ないことをしていたり、道具の使い方がわからないときは教えてあげる。とヤナ先生は言う。子どもたちは、カタツムリを発見。ただのカタツ

ムリだけではなくて、ちゃんと、「～カタツムリ」という固有名詞まで知っている。

2004年5月13日（木）くもり

リロ先生、子ども：5人

年長組クラス

09:00 集合場所に座って先生のお話を聞く。この前、リロ先生はユリアンとマリオス（双子の兄弟）が通うことになっている小学校に行ってきた。明日はマティアスとレアが通うことになっている小学校見学だ。とても優しく、いい先生だったと言っている。ユリアンがよく、これは日本語で何ていうの？と聞いてくる。レアが病気だっていうと、病気は日本語で何？とか、医者日本語で何て言うの？とか・・・子どもたちは、本当によく人の話を聞くし、いうことを守る。レアがその辺の草をとってきて砂場に植えて、小さなガーデンをつくっている。その後、子どもたちは、自然のものを使って絵を描き始めた。まず、子どもたちは、それぞれに散らばって材料を探して集める。それから土を水に溶かして木の枝で描き始める。赤っぽい土、茶色い土、こげ茶色の土など、土にもいろんな色がある。子どもたちはそれを使い分けて描いていく。そして、葉や花で自然の色をつける。その使った植物の名前を子どもたちはすべて把握している。マティアスは「古代の人間のマネ」と言って石で字を書き始めた。みんな木や太陽や鳥など自然のものを描いている。同じ自然の絵でも、マティアスはワイルドに描いていて、レアはちょっと上品に描いている、とリロ先生といっしょに観察した。マリオスはあまり落ち着きがない。リロ先生は、マリオスの双子の兄弟のユリアンは小学校へあがれると思うけど、マリオスは、もう一年幼稚園に留まらなければならないと思う。と話していた。子どもたちは夢中になって絵を描いている。

10:35 ヴァッシュシュトラーセに並ぶ。レアはお腹が空いたので、ひとりで歌を歌って食べ始めた。マティアスがやってきて隣に座った。レアがひとりで食べているのを見て、「一人で歌をうたったの？」とびびっている（笑）マティアスもひとりで歌い始めた。

11:00 食べ終わって、リロ先生が近くの木から木の実をとってきて説明している。子どもたちは先生の近くに集まる。ヨハネスが虫眼鏡を持っている。目を大

きくしてみたり、面白いことを考えついて実行している。マティアスも、自分のかぶっていたニット帽子を顔までかぶって「ウォー」と言いながらお化けごっこをしている。まだ5歳と6歳児だが、彼らと遊んでいると、楽しい。楽しませてくれる。そして、なぜか充実感がある。

11:10 片付け始める。絵を描くときに使った土などを葉っぱでふいてきれいにする。その後、並んで少し離れた小川があるところに移動する。マティアスが川からおたまじゃくしをとってきた。必ず私にも見せてくれる。そして、気の済むまで観察が終わると、川にもどっていた。レアはリロ先生と草をたくさん集めて人形を作っている。ヨハネスは草むらにかくれておっこ。ユリアンとマリオスは小川の近くで大きな木を引きずって遊んでいる。今日はとっても寒い。子どもたちは、急な坂でもすごい勢いで走っていく。運動能力がとっても高いと思う。

11:50 切り株の周りに座って折り紙を始める。私は子どもたちにツルの折り方を教えてみる。今月は鳥がテーマだし、複雑な折り方だからみんな興味津々。でも、ちょっと折り方が難しく、途中で集中力が切れてきた。でも、レアとマティアスは最後まで自分でやろうとしている。時間がかかっても、最後までできあがった。折っている最中に、変化していく折り紙の形を見て、いろんなことを想像し、パカパカやったり、ブーンとか言って走らせたりしている。子どもたちは、本当にちょっとした小さなものから想像して楽しむことを知っている。その後、何種類かの葉と実を持ってきて、どれとどれが対になっているか当てっこしている。こうやって、知識を身につけていく。

12:25 集合場所に戻る。レオンのお母さんが通りかかって、レアが折った折りつるを見て、「わお。きれいだね。」と言っている。やはり、折り紙は珍しいらしい。マティアスは、迎えを待っている時、砂場で何度も転んで、転び方の研究をしている。見ていると面白い。

2004年5月14日(金) 晴れ

先生:2人、子ども:9人(男6人、女3人)

08:50 手をつないで出発。ラッセル(4歳の男の子)とヤン(3歳の男の子)が木の幹が丸くえぐれているような形になっているのを発見して、話し合っている。2人だけ、みんなから少し遅れをとった。私が、「前へ進んで!」と声をかけると、きちんと言うことを聞いてくれる。

- 09:00 森の入口に到着。輪になって手をつないで歌をうたう。私の隣はラッセル。拾ってきた石を片手に持っている。でも、どうにかして手をつなごうとする。小さな手に大きな石を持っていても、工夫して私と手をつないでいた。ヤナ先生が「拾ってきた石をみんなに見せて！」と言ったので、ラッセルはひとりずつに見せてまわる。みんな興味津々。少し尖っていたので、触って「痛い！」とジョークをいう子もいる（笑）
- 09:15 いつものひとつの遊び場へ移動。ナータン（4歳の男の子）は見つけた小さい石をたくさんリュックサックに集めている。気がついたら、数日前に、雨によってできた小さな川はなくなっている。ヨハネス（3歳の男の子）は私に、よく、拾った石を見せに来てくれる。ヨハネスが持っていた枝にたまたま青虫がついていた。ヤナ先生が通りかかって、「おお」と言っている。リュックから図鑑を取り出して、「大きくなったらこんな蝶になるんだよ」と、同じ青虫を探して説明している。ナータンとユリオス（3歳の男の子）は、少し離れたところの木に登って摘んできた花を並べている。コニー先生とヤナ先生は子どもたちといっしょに遊んでいる。3歳、4歳になると、子どもたちは、自分で材料を探し、おうちを作り始める。ヨハネスとモーリッツ（4歳の男の子）は土を水で溶かして、土の色で新聞紙を茶色に塗っている。ラッセルとヤン（3歳の男の子）はファイアーケーファ（赤い虫）を見つけて虫眼鏡で観察している。パウラ（3歳の女の子）はひとりで遊んでいる。でも、ラッセルによばれていっしょに遊ぶことにしたい。ヨハネスとモーリッツは仲良く並んでおしっこをしている。ラッセルは家を作る材料になりそうなものを探しながら、いろんな形の石を発見している。ヨハネスは暑いらしく、ジャケットをぬいで、自分のリュックサックにはさんでいる。ナータンとユリオスは木の取り合いをはじめた。ケンカをして落ち込んでも、すぐに次にすることを自分で見つけて取り組んでいる。
- 10:30 ヴァッシュシュトラッセに並ぶ。子どもたちは水がかからないように足を広げている。大きな木のまわりにすわって朝ごはん。ヤンは、誰かのリュックサックとまちがえたと言っている。そして、コニー先生は大笑いしている（笑）みんな手をつないで自然と地球に感謝していただきます。今日は「いただきます」の歌はうたわない。コニー先生が、ヤナ先生の手の手甲に木の枝や石を当てている。ヤナ先生は目をつぶってその感触を頼りに、それが何なのかを当てる。手の平だと簡単にわかってしまうけど、手の手甲は難しい。私もやってみただけど、難しかった。こうやって、先生も、自然に対する感覚を

鍛えているようだ。でも、とても楽しそうだった。

10:55 朝ごはん終了。ヤナ先生がナイフの使い方を子どもたちに教えている。子どもは本当に頭がいい。ナータンは、木登りをするにもどこが一番上りやすいか考えて上っている。「マリコも上に登っておいでよ」と言ったので、私が「登れない！」と言うと、じゃ、向こうから登ってきて！こうやって、こうやれば登れるよ。と登り方を教えてくれる。私が、途中まで試してみると、「そう、そう、それでいいんだ」とアドバイスをしてくれる（笑）しまいには、自分が木から下りてきて、実践して登り方を教えてくれた。そして、私を仲間に入れてくれた。なんだかうれしかった。

12:00 帰る準備。ラッセルがカタツムリを見つけて騒いでいる。みんな虫眼鏡がとてもお気に入りのようだ。

2004年5月17日（月）おもいきり晴れ

先生：2人 子ども：14人（男11人、女3人）

08:50 いつものように手をつないで出発。

09:00 森の入口で輪になって手をつないで歌をうたう。そして、人数を数える。今日は手を挙げるのが一番速かったヨハネス（3歳の男の子）が数える。今日の子どもの人数は多いけど、最後までひとりで数えられた。えらいぞ。ヤスパ（3歳の男の子）は「タトゥー、タター、タトゥー、タター」と救急車のサイレンのマネをして走り出すが、なぜか両手を広げて飛行機の格好になっている（笑）

09:10 バウワーゲンに到着。荷物を置いて再び歩き出す。移動中に散歩をしているお年寄りと子どもたちが会話を交わしている。こうやって地域の人たちとの交流が深まっていく。今日は本当に天気がよくて、暑いからみんなジャケットを脱ぎだした。ラッセルがそのへんの草をとってきて鼻をかんでいる。すげーワイルドだなあ。ナータンがカタツムリを見つけて見せに来てくれた。そして、よく石を拾っている。毎日毎日同じことをしていても、飽きない。

10:10 私にとってはじめての場所に到着。とてもきれいな場所だ。池や川があり、日が木々の隙間から差し込み、澄み切った青空が隙間から見える。そして、その空が池の水面に写っている。息を呑むほどきれいな場所だった。毎日、

本物の自然を見ることによって、子どもたちは、人生の中でも何が本物なのか、見分けることができるようになるのかもしれない。とにかく、自然の美しさに心を奪われた。ナータンは、さっきから見つけたカタツムリを「家に持って帰ってお母さんに見せるんだ」と張り切っている。

10:15 ヴァッシュシュトラーセに並ぶ。ユリアンが目のある木を見て「キ！キ！」と言っている。日本語を覚えてくれているのでうれしい。水を日本語で何て言うの？と質問された。女の子3人はとても仲がいい。外で食べると本当に気持ちがいいし、おいしく感じる。ヤナ先生が動物の話 시작했다。たちまちみんな議論になる。そして、よく手があがり、意見も多い。

10:50 食べ終わり、近くの小川で遊び始める。ナータンは、少し曲がっている小さな小さな枝を見つけて、口のところに持ってきて「歯！歯！」と言ったり、地面にたてて「橋！」と言って、楽しんでいる。

11:40 帰る準備。ヤスパーが「ぼくが一番先に並んだんだ」と、ラッセルと言いつ合っている。帰り道、みんなのリュックサックをのせたリアカーをおしていると、ユリアンとヨハネスが手伝ってくれた。しばらくして、ヨハネスが、「ボクに引かせて！」と言ったので、お願いした。そしたら、「ミヒヤエル・シューマッハ！！！」と言って、すごい勢いでリアカーを引いていった（笑）ユリアンに、「森の幼稚園は好き？」と聞くと、「うん！」と即答で帰ってきた。「なんで？」と聞くと、少し考えてから、「自然の中で遊ぶのはとても楽しいし、いろんなものを発見できるから」としっかりと理由を答えてくれた。

今日は、自然の魅力を魅せられた気がする。本当にきれいな森だった。この自然の美しさも、雨の日も寒い日も毎日森に行っているからわかるのかもしれない。子どもたちは、とても楽しんでいたし、気持ちよさそうだった。

2004年5月18日（火）晴れ

先生：2人 子ども：12人（男9人、女3人）

08:50 いつものように仲良く手をつないで出発。子どもたちは歩き出す。「おはよう！」と言って子どもたちのところに近寄っていくと、ヨハネス（3歳の男の子）が手をつないでくれた。

09:00 森の入口に到着。輪になって手をつないで歌をうたい、人数を数える。そして、今日、いない子は誰か、みんなで確認する。バウワーゲンに少し立ち寄ってから、いつものひとつの森の遊び場に行く。それぞれに遊び始める。来週は、森で劇をするので、新聞紙と枝と麻ひもでつくった小道具の色塗りをする子どもたちもいる。私も手伝った。紙コップに土を入れて水で溶かす。あつという間に絵の具のできあがり。3種類の色がある。私は、土の色で塗るのは初めて。きれいな色が出る。夢中になって塗っていたので、ほかの子どもたちの観察を忘れてしまった。

10:10 ヴァッシュシュトラーセに並ぶ。輪になってすわり、手をつないで、歌をうたっていただきます。時々、ヤナ先生が、「静かにー」と言って、子どもたちは鳥のさえずりに耳をかたむける。

10:40 食べ終わり、そのままみんなでミーティング。来週は森で劇をするから配役を決めて練習する。タイトルは「ブレーメンの音楽隊」だ。ユリアンが劇中に私のところに来て私が記録をとっているところを観察している。私が、「みんなといっしょに劇をしなくちゃいけないよ」と言うと、「うん、そうだね」と言って、もどっていった。彼らは、今、やるべきことをしっかりと把握している。ヨハネス（5歳の男の子）がやってきて、私の記録ノートの日本語を見ると、「やっぱりへんな文字！」と言って去っていく（笑）名前を日本語で書いてあげたら、「おおー」と言ってみんな集まってきた。

11:05 動物の色を塗る子、他のことをして遊ぶ子、いろんな子どもがいる。ユリアンがカタツムリを見つけて目を押ししたりして遊んでいる。日本語でなんていうの？としきりに聞いてくる。本当に、日本語に興味を持っているようだ。

11:40 片付け始める。みんな、先生の言うことはちゃんと聞くし、聞き分けがいい。

2004年5月19日（水）晴れ

先生：2人 子ども：12人（男10、女2）

08:35 子どもたちが集まってくる。子どもたちを送ってきた保護者と先生は、まるで友達感覚でいろんなことについて話し合っている。

08:50 出発。ユリアン（6歳の男の子）とヤン（4歳の男の子）とユリオス（3

歳の男の子) が協力してリアカーを押している。

- 09:10 森の入口に到着。輪になって歌をうたい、少しゲームをする。それから子どもの人数を数える。レナード(5歳の男の子)がまず、数え、ラッセル(4歳の男の子)が逆の数字から数える。途中で危うかったけど、最後まで数えられた。満足そうな顔をして、とってもうれしそう。私もとてもうれしくなる。そして、みんなで誰が来ていないか確認する。こうやって、自分たちの友だちを気にかけるようになるし、来ていない子を忘れない。
- 09:15 パウワーゲンに到着。昨日、つくりあげた劇用の動物の工作を持って、森の中へ。ユリアンはリアカーを押すのが好きだ。みんなのリュックが入ったリアカーを押していると、ヤスパー(3歳の男の子)がうしろから押して手伝っている。
- 09:25 森の遊び場に到着。レナードは双眼鏡を首にぶら下げてうろうろしている。新しい子ども、パウラは、今朝、お母さんといっしょにきて、とちゅうでお母さんは帰ってしまったので、とても悲しがっていたが、今は元気いっぱい。他の子どもたちと遊んでいる。ユリアンは少し大きめの木を組み合わせて何かを作ろうとしている。私が、何をつくりあげるのか注目していると、彼は私の視線に気づき、恥ずかしがって、向こうへ行ってしまった。あー、観察失敗だ……。でも、照れた顔がかわいかったなあ。その後、ユリアンは、向こうの方で、切り株を何個か持ってきて階段らしきものを作っている。あとから気づいたが、それは、劇のための小道具として彼自身が考えて、設定したものらしかった。そういえば、ヤナ先生が、劇の場面の場作りをしていた。それを見たユリアンは、先生を手伝おうとしたのだと思う。ヤナ先生は、ユリアンに、「いい考えね」と言って、即採用していた。私が遠くにいるユリアンを観察していると、シーラス(5歳の男の子)が私のところにやってきた。私がすわっている横たわった木のところに彼も腰をおろしている。私は彼に、「自然が好き？」と聞いてみた。すると、「自然のすべてがボクにとってすばらしい」という答えが返ってきた。YESかNOの次元ではない。私には、彼は、自然がないと、生きることができないことを知っているかのように、自然の重要性を主張しているように見えた。私たちがすわっている横たわった木の幹から小さな新しい芽が出ている。「この植物の名前を知ってる？」と聞くと、シーラスは「わからない。家に帰って図鑑で調べなきゃ」と言っている。その後、地面に落ちている枝を投げ始めたので、私もいっしょになって投げしてみる。なかなかおもしろい。それを見たヤスパーとヨハネスも、興味

を持って近づいてきた。

10:20 ヴァッシュシュトラーセの声が先生からかかる。シーラスは枝投げに夢中になっていたけど、さっとやめてシュトラーセに並びにいった。私も水をかけるのを手伝う。誰かが歌をうたいだした。そして、たちまち合唱になる。楽しいひと時だ。

10:30 朝ごはん。今日も、森の中で輪になってすわって食べる。このグループは、ご飯中は、先生が何か本を読んだりするのではなくて、子どもたちが自由にお話しながら食べているのがベースになっているようだ。ジョークを言ったり、今日の森での出来事を話したり、自分自身の発言が多い。

10:50 食べ終わり、それぞれに遊ぶ。その後、先生の説明を聞いて、配役を話し合っただけで劇の練習をする。みんなすごい集中力だ。そして楽しんでいる。わき道では、よく、マラソンをしている中学生？が走っていく。劇の練習中でも、それぞれに木でもものをつくったり、劇に使う動物をどう動かしたらいいか研究している。

11:50 あっというまに帰る時間がきてしまった。帰り道を歩きながら、子どもたちは劇の話題で盛り上がっている。ユリアンは大き目のY字型の枝を拾ったらしく、「もし、紙があったら、枝にはってヨットが作れるのに・・・」と言っている。ヴェロニカ（5歳の女の子）とラッセルは仲良くリアカーを引いている。私は、レナードと手をつないで帰った。レナードが外国人の私に興味を持ったらしく、どこに住んでいるの？どこの国からきたの？という質問をよくしてくる。自分の家族の話も一生懸命話してくれた。

12:20 集合場所に到着。

5月20日、21日は、ドイツの休日のため、幼稚園もおやすみ。

今日（5月22日 土曜日）の午前中、私は自転車でスーパーマーケットまでの8キロの道のりを走った。毎日幼稚園まで通っている同じ道だ。周りは牧場で、広大な野原が広がっている田舎道。しかも途中から山道になる道走る。私は最近、まわりに咲いている草花の変化に敏感になってきたと、自転車に乗りながら思った。毎日同じ道を走っているため、いやでも景色が視界に入ってくる。ドイツにきたばかりのときは、葉が全然なかった木が、次第に新芽を出し、いつのまにか緑色になっている。何もなかった野原に、この間までタンポポがあたり一面に咲き、黄色くなっていたのが、白い綿毛に変わり、今は、少し整備

されて作物が植えられている。自転車で走っているときでさえ、小さな木の芽が出ていることに気づくようになった。そして、季節が自分の感覚を通してわかるようになった。これは、森の幼稚園に通っている成果だろうか……。

2004年5月24日（月）晴れ

先生：2人 子ども12人（男10人、女2人）

5日ぶりの幼稚園だ。週末は、なんだかとてもブルーな気分だったが、（今朝も）今日は晴れたし、自転車を走らせている間に、元気になってきた。

08:50 ヤスパー（3歳の男の子）がやってきた。今日も泣いている。お母さんと離れるのが寂しいらしい。でも、森へ行ったら、元気に他の子どもたちと遊んでいた。レナード（5歳の男の子）は枝とヒモを組み合わせで剣をつくって振り回して遊んでいる。

09:00 森へ出発。ユリオス（3歳の男の子）とシーラス（5歳の男の子）が、みんなのリュックやジャケットが入ったリアカーを押している。途中で止まった。何をやるのだろうか？ユリオスが一生懸命にリアカーの取っ手を上下に押したり引いたりしている。「何やってるの？」と聞くと、「ポンプ！！」と大きな声で言って、ひたすら漕いでいる。なるほど。突然思いついて実行するからおもしろい。私はひとりで大うけだった。私が笑い出すと、近くにいたシーラスやユリオス自身も、つられて笑い出した。再び歩き出す。アスファルトの上に小さな小さなハチが横たわっている。まだ、かすかに息はあるようだ。子どもたちは、小さなハチでも見逃さずに発見し、どうするか相談している。ハチは刺されるかもしれないという恐れがあるので、落ちていた棒ですくって、わきの草むらにおいてあげていた。

09:15 森の入口でいつものように輪になって手をつなぐ。そして、今日は誰がお休みか、みんなで確認する。ヨハネス（5歳の男の子）は、きている子どもの名前を言って、みんなを笑わせている。その後、ヤナ先生がビンにさしている青い花を円の中央においた。コニー先生が花についての絵本を読み始めた。今日のテーマは花らしい。コニー先生が読み終わったあと、子どもたちは、思い思いの動物になって花の香りをかぎに行く。レナードはトラ、ヨハネス（3歳の男の子）はリスだ。みんなよく特徴を現している。ものまねがうまい。

09:25 バウワーゲンに立ち寄る。そして、また進む。ヤン（4歳の男の子）とモー

リッツ（4歳の男の子）は森の虫や生き物が書かれた図鑑みたいな紙切れ一枚を持って、2人で見ながら本物と照らし合わせながら森を歩いている。

- 09 : 35 もうひとつのグループのバウワーゲンに立ち寄り、もうひとつのグループの子どもたちが植えた植物を観察する。3人ぐらいがジョウロに水を入れて水やりをしている。他の子どもたちはコニー先生と植物を観察し、触って匂いをかいでみる。そして、子どもたちは、また森の奥へ進む。池の近くまで来たら、みんな静かにして、自然の音を聴く。何種類もの鳥の鳴き声が聴こえ、風によって揺れ、木々の葉が重なり合う音が聴こえる。池の水はとても静かだ。
- 10 : 10 この前、訪れた美しい遊び場に到着。男の子たちは木の枝でピストルごっこをはじめた。
- 10 : 35 ヴァッシュシュトラーセに並ぶ。私もみんなに水をかける。4日間、幼稚園はお休みだったからみんなちょっと落ち着きがなく、少しうるさい。コニー先生も同じことを言っていた。
- 10 : 45 「いただきます」の歌をうたって食べ始める。コニー先生が鳥の話をし、鳥の図鑑の写真を見せる。さっきその辺を飛んでいた鳥だ。ヴェロニカ（5歳の女の子）がさっき森で集めた葉と実をみんなに見せて回る。隣に座っているモーリッツが先生から長い植物をもらって、ひとりで「ありがとう」の歌を歌っている。そうこうしているうちに、ヤナ先生が動物の特徴を言ってそれが何か当てるクイズをはじめた。
- 11 : 10 食べ終わって片付け始める。6人ぐらいの子どもたちが、コニー先生とゲームをやるらしい。私も混ぜてもらった。輪になって後ろに手を回す。コニー先生が2人1組になるように同じ種類の植物を手の上においていく。クルミ、カスターニアン、マツボックリなどだ。子どもたちは、手の感触だけしかわからない。次に、子どもたちは持っているものを見ないで他の子どもが持っている植物を触りにいって、誰が自分と同じ植物を持っているか当てる。あっという間に時間が過ぎていった。これは、3歳と4歳の子どもたちに適しているゲームだとコニー先生は言う。
- 12 : 00 集合場所に戻り始める。ヨハネスは水溜りの中に靴を落としてしまったので、リアカーに乗ってヨハネス①とユリオスがそれを押している（笑）ヤス

パーとレナードは、森でつくった、かすり傷の見せあいっこをして、なんだか誇らしげの表情だ。ナータンはひとりで黙々と両手に抱えきれないほどの植物を集めている。両手がふさがっているので、ジャケットのポケットのチャックを開けて！と私に頼みに来た。

12:25 集合場所に到着。輪になって歌をうたって解散。

2004年5月25日（火）晴れ

08:50 出発。新しい子、パウラが、道に落ちているゴミに興味を持ち出した。そして、車に敏感だ。車が来たら、ひとりで「車！車！」と言って騒いでいる。大人が見たらなんでもないような草を子どもたちは次々ととっていく。

09:10 森の入口に到着。輪になって歌を歌ってひとりずつ名前を言っていく。

09:50 劇の練習の準備。ヤスパーは青虫に夢中。観察して、その青虫に声をかけたりして、とてもかわいがっている。シーラスは木の上ののってバランスをとっている。自然物には整備されたものがないから何か物を組み立てるにも、頭を使わなければならない。

10:45 ヴァッシュシュトラーセに並んだ後は、朝ごはん。子どもたちは本当に石が好きだ。ヒマがあれば、地面に埋まっている石を掘り出している。

11:00 朝ごはん終了。これから劇の練習をする。とっても楽しいひととき。このグループのバウワーゲンの中には世界中から来たハガキが飾られている。休暇中に子どもたちの両親が旅先から送ってくるハガキだ。そのハガキを眺めているだけでも、なんだか楽しい。

12:30 集合場所に到着して終了。

2004年5月26日（水）晴れ

先生3人、子ども13人（男10人、女3人）

08:45 集合場所に到着。何人かの子どもたちはもう到着している。いつものように元気いっぱい走り回っている。ユリアンがゲームボーイを持ってきていた。みんな注目していたけど、ヤナ先生が、おうちに持って帰ってからして

ねと言ったら、すぐにしまっていた。

09:00 森の入口に到着。歌を歌って、レナード（5歳の男の子）が人数を数える。今日は、いつもと違う遊び場所に移動する。ヨハネスが私のところにやってきて、日本語の文字を見て、また、「変な文字」と言って去っていく（笑）ナータンは気に入った木を離さない。しまいには大きな木をひきずってきて、どうしても運ぶんだと張り切っている。みんなが行く目的地まで、最後まで運び終えた。ヨハネス③は木登りをしている。森の遊び場を見回していると、みんなそれぞれのことをしている。しかも一つのことには熱中している。今日はヤスパーの4歳の誕生日だ。ヤナ先生が植物で冠を作っている。

10:05 ヴァッシュシュトラーセ。そして、輪になって座って、先生が持参した4本のろうそくに火をつけて、誕生日の歌を歌って朝ごはん。コニー先生とヤナ先生が動物のクイズをはじめた。ヤスパーのお父さんがケーキを焼いてきて、みんなに振舞っている。

10:45 食べ終わり、希望者はおしっこ。そして、また自由に遊ぶ。子どもたちは本当に自由に走り回っている。大声をあげて。ユリオスがひとりで木に座って揺らしていたので私も近づいていったら、体温が高い。さすが子ども。その後、ユリオスとパウラは「タトゥータター」と言って走り回っている。救急車のマネらしい。子どもたちは、将来、救急車や消防車のドライバーや警察官、Försterになりたいとよく言うらしい。森の幼稚園の子どもたちも例外ではない。遊んでいる途中で危ないことを子どもたちがすると、もちろん、先生が注意する。子どもたちは、コニー先生の提案で、胴体に麻ヒモをくくりつけて、犬ごっこをはじめた。これが笑える。とてもかわいい。少し寒いので、日が当たっているところに座って子どもたちを観察していたら、ヤナ先生も寒いと言って、私の隣に座りに来た。

11:30 そろそろ帰る準備をはじめます。まだ犬ごっこをしている子どもがいる。

12:25 到着。終了。

2004年5月27日（木）晴れ

先週は休みだったので、2週間ぶりの年長組の日だ。今日からの担当はヤナ先生。

今日はザスキアが風邪でお休みなので、マティアス、レア、ユリアン、マリオス、ヨハネ

ス③の5人。

08:45 私が集合場所に到着。みんなはもう既に到着し、出発するところだ。私が自転車を置いてみんなのところに向かうと、みんな「マリィコ！マリィコ！」の合唱（笑）私は走っていった。ヤナ先生はひとりで笑っている。マティアス、レア、マリオスは違うグループだから、久しぶりに会った。みんな元気そうだ。そして、私のことを覚えていてくれている。マティアスとレアはすごい勢いで飛びついてきた。

08:50 出発。今日は、女の子はレアだけ。他の男の子たちはすごい勢いで坂道を駆け下りていく。マティアスとレアが鳥のヒナが死んでいるのを発見。マティアスが「マリィコ！来て」と言って、鳥のヒナを見せてくれた。無残な姿だ。彼らは話し合っってヒナを埋めている。途中から手をつないで歩いていく。森の入口までの道は、少し車が通る道だから、十分に気をつけて歩いていく。途中、スポーツ広場建設の工事現場の前を通りかかる。マリオスとユリアンとヨハネス③は興味津々。ダンプカーが土を降ろしているところや、地面の土を固めているところなどを見学している。近づきすぎて、ヤナ先生に「危ないから、もどってきなさい！」と注意を受けている。森の中を歩いている途中、ヨハネスがカタツムリを見つけている。カタツムリなんて、何度も発見して、珍しくないはずなのに、子どもたちは何度でも見つけて観察し、楽しんでいる。

09:15 ヤナ先生グループのバウワーゲンに到着。輪になって歌をうたう。地球についての歌だ。ヨハネス③が指を切ったので血が出ている。みんな「痛い？」「痛い？」と心配している。マリオスがはっと気づいて、自分のリュックサックから、なんと「救急セット」を取り出してきた。すげー、準備万端だ。私は思わず「わお」と言ってしまった。ヤナ先生も同じことを言っている（笑）「マリオスはいつも救急セットを持参しているんですか？」と聞くと、ヤナ先生は「わからない」と言って笑っている。みんな「ドクターマリオス」と呼んでいる（笑）ドクターマリオスはヨハネスをベンチに座らせて手当てをしている。救急セットの中にはハサミやゴム手袋なども入っている。本格的だ。手当てが終了すると、ヨハネスは元気に走っていった。

09:20 バウワーゲンのそばのベンチに座って、以前に、ひとりひとりつくった鳥と鳥の巣の工作を見て、ヤナ先生が1年の月の話を始めた。1月から12月まで数える練習だ。

09 : 40 バウワーゲンの中に入って工作をする。白い紙に筆で水を一面にぬって紙を湿らす。その上にいろいろな色の絵の具をぬって水とにじませていく。色が混ざり合っていく。そして半分に折る。開くと、まるで蝶のような模様が出来た。ヤナ先生は蝶の図鑑を持ってきて、いろいろな模様の蝶がいることをみんなに見せる。全員でやるのは場所が狭いので、マリオスとマティアスは外で遊ぶことにした。板を並べてその上にいろいろな草花をおいて踏んで大きな模様を作っているようだ。マティアスは、様子を見に来たヤナ先生に「きれいでしょ？」と話しかけている。私には、彼らが何をつくっているのかよくわからない。とにかく観察することにした。そして、私も板の上の草花を彼らといっしょに踏んずけてみる（笑）マティアスは笑っている。小さなベンチも並べている。どうやら、シアターの舞台（Bühne）と客席らしい。誰が言ったわけでもなく、彼らは自分で考えて作り出している。しかもユーモアたっぷりだ。マティアスは舞台の上で踊っている（笑）ユリアンは、木を見て「キ！キ！」と連発しているし、ヨハネスは「ヤマ！」と言っている。

10 : 05 ヴァッシュシュトラーセにならぶ。そして、ベンチに座る。マティアスが「マリコ！こっちこっち！ボクの隣！」と言って呼んでくれた。いつものように手をつないで歌を歌って朝ごはん。朝ごはん中、少し沈黙があると、「赤い水筒の人！青い水筒の人！今日の朝ごはんがリンゴの人！パンの人！」と言って遊びだす。そして、楽しくなる。以前、この幼稚園の理事長が、自分の息子が森の幼稚園に通い始めて、面白いことを自分でつくり出すようになったと言っていたが、本当に子どもたちは、自分たちで、どうしたいのか考え、楽しくしたいのなら、楽しくなるようにしている。ヨハネスが寒いと言っている。マリオスが「ちょっと待ってて」と言ってバウワーゲンの中から大きな掛け布団を持ってきた。大きすぎる・・・（笑）これしかなかったらしい。でも、優しいなあ。ヤナ先生が図鑑を持ってきた。子どもたちは図鑑を見ながら、自分が体験した昆虫の思い出話をして盛り上がる。あ、マティアスが向こうの方で黄色い鳥を発見して「見て！鳥だ！鳥！」と言っている。図鑑を見ていたヤナ先生が、すかさずその鳥を調べる。頭の色は何色で羽の色は何色で・・・と言いながら。

10 : 30 食べ終わり、自由に遊ぶ。さっきの蝶の工作を作っていないマリオスとマティアスはバウワーゲンの中でつくり始めた。マティアスは、一回目は失敗して「あー、残念」と言っている。変な模様になっているのを見て、2人で大笑いした。失敗しても、先生からもう一度紙をもらい、再試行。自分から先

生に紙をくれるように頼んでいる。工作が完成して、再び外に出て自由に遊ぶ。レアとマティアスはメロンごっこをしているし、ユリアンはさっきの大きな掛け布団をかぶってお化けごっこをしている。私が記録をとっていると、マティアスたちがやってきて記録ノートに自分たちの名前を書き始めた。ドイツ語で書くと「LEA」は3文字なのに、日本語で書くと、「レア」は、たった2文字だね。とレアは言っている。レアに自然が好き？と聞いてみた。すると、即答で「うん。でも、動物も虫も人間も好き」と答えてくれた。これは、自然だけではなくて、自然のことを考えると、動物も虫も人間も関係してくるから、それらをいっしょに考えなくては答えられないという発言ではないだろうか。森の幼稚園は好き？という質問をすると、「森の幼稚園も大好き。」 どうしてか聞いてみると、「自然のものを使っていろんなことをして遊べるから、とてもおもしろい。家にいると本当につまらない。だって決まったことしかできないんだもん」と言っている。今日は、私はベンチに座って、レアと色々な話をしながら植物の自然の色で紙を塗ったり、折り紙を折ったりした。レアも植物の名前をよく知っている。あっという間に時間が過ぎた。

12:00 帰る準備をして、帰り始める。ユリアンとマリオスは、ボクが一番にならないだんだんと言って兄弟ゲンカを始めた。とりあえず帰り道を歩き始めたが、ユリアンはまだ腹の虫が治まっていない様子。私は、彼と手をつなぎながら、大丈夫？と聞いてみた。すると、「うん。でも、マリオスは本当に、わからずやだ」と、しかめっ面。ケンカをして、人間関係を学んでいく。森の幼稚園の子どもたちは、男のでも女の子でも恥ずかしがらずに、仲良く手をつないで歩く。

12:15 集合場所に到着。少し時間があるので輪になってゲームをして遊ぶ。

12:30 終わりの歌を歌って解散。私が自転車に乗って帰るとき、レアが、私に「今日はいっしょに折り紙を折ってくれてありがとう！」と言ってくれた。私の方こそ、ありがとう！だ。

2004年5月28日（金）おもいきり晴れ

先生：（森グループ）3人、（室内グループ）2人

子ども：（森グループ）12人 男11人、女1人、（室内グループ）12人 男3人、女9人

今日は、先週から準備してきた劇の発表会だ。室内グループの子どもたちが森にやって

きて、鑑賞する。

08:55 集合場所で室内グループの子どもたちといっしょに大きな輪になって、いつものように朝の歌をうたう。そして、ひとりずつ自分の名前を言っていく。自己紹介だ。室内グループの子どもたちは、環境の変化もあってか、静かだが、森グループの子どもたちは、いつものように元気いっぱい。自分の思いついたことを遠慮なく発言している。それぞれのグループにわかれて森へ出発。

09:15 森の入口に到着。森グループの子どもたちは、輪になって会議を開く。劇の役割、進行の確認だ。こうやって、みんなで何かをつくりあげるためには、話し合いが必要だと言うことを子どもたちは学んでいく。会議が終了し、室内グループの子どもたちが先に行っている遊び場へ行く。室内グループの子どもたちは、はじめは森での遊び方がわからなくて、茫然と立ち尽くしていたが、森グループの子どもたちが遊んでいるのを見て、次第にいっしょに遊びはじめた。

10:10 ヴァッシュシュトラッセ。今日は人数がとても多いから、いつもより時間がかかる。輪になって座って朝ごはん。私の隣はモーリッツ(4歳の男の子)。今日は私にとっても好意的だ。よく話しかけてきてくれる。彼は、自然も、森の幼稚園も大好き。

10:45 朝ごはんを食べ終わり、片付け始める。これから劇の始まりだ。「ブレーメンの音楽隊」が始まる。子どもたちは、いつものように自然に事を進めていく。演じている子どもたちは、みんな真剣な表情だけど、どこか楽しげに見える。ヤナ先生のプロデュースのもと、劇は成功した。見に来た室内グループの子どもたち、特に先生は、楽しんだ様子だ。片づけをしながら、ヤナ先生は、「みんなで楽しく、ものを作り出すことが好き。だから、時々、このような劇を森でするの」と言っていた。

12:00 集合場所にもどる。ヨハネス③がその辺の植物をとって、振り回して遊んでいる。「モーターが回っているんだ」と言っている。振り回しているうちに、植物がちぎれた。「あーあ、モーターがこわれた」と少し残念そう。

12:30 集合場所に到着。

2004年6月2日(水) 曇り

先生：2人 子ども：8人(男 7人、女 1人)

08:45 私が、いつもの集合場所に到着すると、もう何人かの男の子たちは到着している。そして、プラスチックのスコップをどこまで遠くとばせるか競い合っている。

09:05 出発。今日は暑いので、子どもたちは移動中も立ち止まって水筒の水をよく飲んでいる。ナータンはまた石を見つけて拾っている。本当に子どもたちはいつでも、何個でも石を拾う。飽きないらしい。森までの道路を歩いている時、ナータン(4歳の男の子)とユリオス(3歳の男の子)はどちらが通路側を歩くか言い争っている。どちらも通路側を歩きたいらしい。ナータンは、少し自分より小さいユリオスを守りたい様子。「車が来るから危ない」と言っている。結局、ナータンが通路側を歩くことになったらしい。途中、スポーツ広場建設の工事現場の横を通り過ぎる。いつもはそのまま行ってしまうけど、今日は、少し見学。ラッセル(4歳の男の子)は最後までショベルカーの活動を見つめている。見学が終了し、再び前へ進む。今日はいつもと違う道を通る。いつもの道を行くと思っていたユリオスは、ひとりで「えー」と言っていて、がっかりしている。それを見ていたコニー先生は笑っている。ヴェロニカが生垣の向こう側で、水が流れている音を聞き、「水の音が聞こえる」と言っている。それに気づいたヤナ先生が、「みんな静かに！ヴェロニカが何か言っているの聞こえた？」と言って、みんなにも知らせる。そして、みんなは水の音に耳を澄ます。みんなは、紙袋に、気に入った植物を入れていく。みんな夢中だ。ユリアン(6歳の男の子)がひとりで座って空を眺めている。ちょっと険しい表情だ。何を考えているのだろうか……。少し遠くのほうで、ラッセルが泣き出した。どうしたのかと思って、かけつけてみると、ラッセル(4歳の男の子)の帽子が小川に落ちてしまったらしい。わんわん泣いている。ヨハネス③(5歳の男の子)やユリアン(6歳の男の子)が近くにあった長い木の枝を持ってきて、帽子をとろうとしている。みんな頭がいいぞ。すぐにヨハネス③によって、その帽子は引き上げられた。そして、ラッセルもいつの間にか泣き止んでいる。みんなの協力がすばらしい。子どもたちは、何か事件が起こったとき、立ちすくむのではなく、解決法を考え、実行する。しかも、誰に言われるわけでもなく、自分から行動するのだ。

11:30 いつもの遊び場に移動し、子どもたちは自由に遊ぶ。川に足をつっこんで、冷たさを感じている。

12:00 帰り始める。いつの間にか歌を歌いだした。そして、誰か4歳の男の子が、「4歳、4歳、4歳！」と大きな声で叫んでいる。すると、ユリオスも対抗して、「3歳、3歳、3歳！！」と叫びだした。

12:20 集合場所に到着。解散。

2004年6月3日(木) くもり一時雨

今日は年長組の日。ヤナ先生、マティアス(6歳) ユリアン(6歳)、マリオス(6歳)、ヨハネス③(5歳)

08:45 集合場所に到着。あれ？ヤスパーがまた泣いている。ママが恋しいらしい。ラッセルが「いっしょに遊ぼうよ！」と言って慰めている。それをマティアスが見守っている。しばらくして、いつの間にかヤスパーは泣き止み、遊びだした。マティアスが、どこからかカスターニアの芽を持ってきて、ヤナ先生に報告している。大きな種から芽が出ている。

09:00 出発。雨が降ってきた。ヨハネスが「マリコ！フードをかぶって！雨が降ってきたから」と気遣ってくれる。ヤナ先生はその光景を見て、微笑んでいる。森の入口までの道で、16歳ぐらいの男の子たちが5人ぐらい集まって何かのプロジェクトのため、ビデオを撮っている。子どもたちとヤナ先生は少し立ち止まって観察する。そして、しばらくして再び歩き出す。私が、記録をとりながら歩いていたので、少しみんなより歩くのが遅くなる。それを見たマティアスが「マリコ、おいで、おいで！」と気遣ってくれる。うしろから車が来たので、マリオスとユリアンが「車！車！」と叫んでみんなに知らせている。

09:15 バウワーゲンに到着。広場の門のカギが開かない。マティアスはバリケードの下を潜り抜けて中へ入る。まわりのみんなは、「あー、だめー」と言っている。マティアスは得意気な表情。冒険心たっぷりだ。バウワーゲンの中に入り、これから折り紙で船を作る。1ヶ月ごとにその月のテーマに沿って工作を作ってそれを紙に貼る。1年かけてカレンダーを制作するというプロジェクトだ。ユリアンが一年の月の歌を歌い始めた。1月から始まる歌だ。次第にみんなまで合唱になる。先生もいっしょに歌っている。折り紙で船を作る。ドイ

ツでは、色紙が手に入りにくいいため、子どもたちは一色の紙で作る。でも、子どもたちは自分で色鉛筆で色を塗ったり、窓を書いたりしてオリジナルの船をつくりあげていく。なかなかかっこよく、個性的な船が次々と出来上がる。ユリアンが、船の旗を作って、余った小さな黒い端切れを見て、何か考えている。とても小さな黒い紙。そして、真ん中を少しだけ切って人の足に見立てて動かして楽しんでいる。「ラーラーラー」と言いながら。子どもの想像力は本当に素晴らしいと思う。

10:30 ヴァッシュシュトラッセにならぶ。私がひとりで石鹸を配り、水をかける。みんなふざけて楽しんでいる。このクラスでは残念ながら自然の石鹸をつかっていない。できる限り、自然のものを使うように心がけているけど、自然の石鹸はとても高いから・・・とヤナ先生は言っている。

10:40 バウワーゲンの中で朝ごはん。みんなふざけあいながら朝ごはんを食べている。今日は男の子だけしかいなくてちょっと寂しい。しばらくして、ヤナ先生がネズミの絵本を読み始めた。その絵本には文字は書かれていない。とてもうるさく、ふざけて食べていた子どもたちが、いきなり静かになる。すごい集中力だ。しかも切り替えが早い。そして、絵本を見ながら、これはネズミがこうしているね、とか、次はどうなる、などと意見を言い合っている。

11:05 朝ごはん終了。再び折り紙をして、さっきと同じ船をつくる。船を折っていく過程で、ユリアンは帽子に見立ててかぶったりしている。これから川に行ってみんなひとりずつ作った船を浮かばせる。出発。雨上がりだから、カタツムリがいたところの地面をはいつくばっている。マティアスたちにとっては、カタツムリが珍しいわけでもないのに、カタツムリを見つけては、大きい、小さい、どんな色、どんな特徴がある・・・などいつも興味深そうに観察している。川に到着。子どもたちは寒いのに平気で水の中に入って船を浮かばせている。そして、いろいろやってみて、いろんな浮かばせ方を研究している。マティアスが水の中をばちゃばちゃ歩いて、「マリコ！水！水！」と言っている。今日は、少し寒い。マティアスに、寒くないの？と聞くと、全然寒くない。という答えが返ってきた。やっぱり子どもは元気だなあ。ひとしきり遊んだ後は、またバウワーゲンにもどる。でも、水の深さも考えないで夢中になって川の中で遊んでいたから、マティアスは長靴の中まで水が入って、ズボンもぬれてしまった。

12:00 バウワーゲンの中に着替えがあるので、マティアスは一人でお着替え。私

は、そのことを知らずに閉まっているバウワーゲンのドアを開けてしまった。中ではマティアスが着替えている最中。「あ、失礼」と言ってドアを閉める。マティアスは照れていた。他の子どもたちは、それぞれに遊んでいる。ここには、ボーっとしている子どもがいない。次々に新しいことを考えついたり、発見して、熱中している。マリオスは、さっき作った船が気に入ったらしく、またつくるから、マリコも手伝って！と言っている。「マリコも自分の船を折ればいいよ」と言って、一枚紙をくれた。自分が人にされてうれしいことを、他の人にもしてくれる。ヨハネスもやってきて、彼も船を折りはじめた。ユリアンとマティアスは外で遊んでいる。突然、泣き声が聞こえた。ユリアンが鼻血を出してやってきた。急いで駆けつける。何が起こったのかユリアンに聞いても、泣いているため、説明できない。事の詳細を見ていたマティアスが再現して見せる。なるほど、よくわかった。結局、鼻血もすぐに治まり、大したことはなかった。ヨハネスは再びバウワーゲンの中に戻って船作りの作業の続きを始める。でも、なかなかうまくいかない。「これであってる？」とマティアスに聞いている。すると、マティアスは、「こうやって、こうやるんだよ」と口で説明している。あえて実践して教えていない。ヨハネス自身に作業をさせるためだと考えているのだろうか。6歳にしては、すごい教え方がうまい。ヨハネスはなんとか自分でつくりあげた。でも、少し歪な形だ。出てはいけないところが、少し出ている。「マリコ、これちょっと直して！」と言いにきたので、直してあげることにした。さっき、子どもたちがつくった、いくつかの船とペンを持っていた私は、そのいくつかの船をヨハネスに持ってもらうように頼んだ。それからヨハネスの船を整え始めたのだが、私が少し、やりにくそうにしているのを見て、ヨハネスは、「このペンも持ってあげるよ」と、私が片手に持っていたペンも持ってくれた。とても観察力があり、よく気がつく。

12 : 25 気がついたらこんな時間。急いで集合場所にもどる。

12 : 40 到着。もう、ほとんどのお迎えが来ていた。

2004年6月4日(金)雨

先生：2人 子ども：12人(男 10人、女2人)

08 : 55 出発。やっぱり雨なのに元気だ。とちゅうでナータン(4歳の男の子)が遅れてやってきた。いつもはお母さんの自転車のうしろに乗ってくるのだが、今日は雨のため、お父さんと車でやってきた。

- 09 : 15 森の入口に到着。いつものように輪になって歌を歌う。そして森の中で自由に遊び始める。雨がよく降っている。子どもたちは、少しでも雨がかからないように自分たちのリュックサックを木の周りに置いている。横たわっている木に乗って電車ごっこをしている子、ピストルごっこをしている子、カタツムリを見つけて観察している子、いろいろな子がいる。何人かの子どもたちに雨が好きかどうか聞いてみた。多くの子どもたちは、雨が好きではないらしい。でも、水溜りを見つけてはバチャバチャ入って行くし、いつものように元気に走り回っている。私は、アンナ先生（時々、手伝いに来ている先生）とヤンの誕生日の冠作りをした。ヤンは昨日4歳の誕生日を迎えた。森にある植物と麻ひもで作る。その後、レナード（4歳の男の子）に呼ばれてティッピーのテントのそばに行く。これから彼は、呼び鈴を作って、そのテントにつけたらしい。呼び鈴を木の枝と麻ひもと、彼の創造力で作っていく。麻ひもをどれくらいの長さに切るか、どのようにして結ぶのかなど、私は呼び鈴を作るお手伝いをした。出来上がって、満足げな様子。レナードはテントの中に入っていった。私が呼び鈴を鳴らし、「リングリング」と言うと、レナードは「どうぞ～、ああ、マリコ！ハロー！元気？」と言っている。挨拶が済むと、テントの中に入れてくれた。テントの中に座ると、レナードはまた何か作っている。木の枝を地面にぐりぐりやって穴を作っている。そうこうしているうちに、ヨハネス①（3歳の男の子）がやってきた。レナードはヨハネス①に、一生懸命説明している。ヨハネス①はレナードがつくった呼び鈴を鳴らして、かわいい声で「リングリング」と言っている。レナードは、また「ハロー」と言ってヨハネス①を、うれしそうに出迎えている。レナードはコニー先生に呼び鈴を作ったことを知らせに行った。子どもたちは、よく、自分がつくったものや発見したものを先生に知らせに行く。子どもたちは先生をととても信頼しているし、大好きだということが伝わってくる。そして、自分がつくっているものが、完成した達成感や、何かを発見した喜びを他の人に見てもらいたい、自分はこんなことができるんだ、自分はこんなものを発見したんだ、ということの評価してもらいたいという欲求がある。また、その達成感や喜びを他の人と分かち合いたいと思っている姿がうかがわれる。ヨハネス③（5歳の男の子）がやってきて、「朝ごはんの時間だからパウワゲンに行くよ」と教えてくれた。
- 10 : 00 バウワゲンに向かう。雨が降っているけど、コニー先生は子どもたちに希望を聞き、外で朝ごはんを食べることにした。ヴァッシュシュトラーセに並ぶ。ラッセル（4歳の男の子）は、みんなが手を洗い終わった後にやってき

た。おしっこをしていたため、ヴァッシュシュトラーセに並んでいないという。そのことをちゃんと自己申告して、ひとりでヴァッシュシュトラーセに並び始めた。その後、遅れてみんなの輪の中に加わっている。手をつないで歌を歌っていただきます！今日はヤンの誕生日会。4本のろうそくに火をともし、お誕生日の歌を歌う。ヤンはアンナ先生と私がつくった冠をかぶって、うれしそうだ。いつの間にか雨が止んでいる。

10:50 食後はパウワグンの中でアンナ先生が絵本を読んでいる。数人の子どもたちが絵本に釘付け。男の子ばかりだ。よく集中して聞いている。そして、絵本に対しての自分の意見を言っている。森の幼稚園の子どもたちは、本や、お話が大好きだ。パウワグンの外では、コニー先生が子どもたちに、ヘビの話をしている。コニー先生は、若い頃、アメリカのインディアンの人々のコミュニティで生活した経験がある。インディアンの話や、その中の男の人が、大きなシマヘビを捕まえた話、インディアンの子どもの話など、2、3枚の写真を見せて、自分の経験を子どもたちに語っている。そして、子どもたちといっしょに、ヘビの歌を歌い、ヘビのマネをしている。絵本が終わって、パウワグンの中から子どもたちが出てきた。草原を駆け巡ったりして、元気に遊び始めた。ユリアン（6歳の男の子）とヤスパー（4歳の男の子）がケンカをしている。ユリアンが泣き始めてしまった。どうやら、ユリアンが持っていた木の枝をヤスパーがとったらしい。コニー先生が間に入る。そして、ユリアンとヤスパーを他の子どもたちから少し離れたところに連れて行く。コニー先生は、子どもたちに理由を聞き、それぞれの言い分も聞いている。そして、どうすればいいか子どもたち自身に考えさせる。今回は、ヤスパーがいけなかった。彼は、自分がしたことを認め、コニー先生に「ユリアンに何て言わなきゃいけない？」と言われて、「ごめんなさい」と少し恥ずかしそうに言っている。その後、二人は握手を交わした。和解している子どもたちの姿はほほえましい。コニー先生は、子どもたちを、子どもたち自身に任せる時と、自分が入って教えなければいけない時をしっかりと見分けている。

12:00 集合場所に帰り始める。歌を歌いながら。

12:25 集合場所に到着。

ラインバッハの森の幼稚園 参与観察記録 3

2004年6月28日（月）晴れ

先生2人（リロ先生、ガビ先生） 子ども：9人（男5人、女4人）

森グループの子どもたちと過ごしていると毎日の変化がおもしろい。子どもたちは、毎日違うことを発見するし、違うことを発言する。室内グループに通っていて、また森グループに戻ってくるのが楽しみだった。

09:00 森に向けて出発。アンドア（3歳の男の子）がよく話しかけてくる。久しぶりだし、私のことを覚えていてくれて本当にうれしい。新しい子のユリオス（3歳の男の子）は今日はお母さんがいない最初の日。アンドアはとても変わったと思う。まだまだ勝手な行動をとることも多いが、先生や私の言うことに、よく耳を傾けるし、新しい子に対してとても優しい。年下の子の面倒をよく見ている。

09:20 バウワーゲンに到着。今日は、年長組みの子どもたちが学校へ行くための何かかごみたいなものをバウワーゲンの中でつくっているから、他の年下の子どもたちは、外で好きなように遊んでいる。今日は、自然のものをつかって遊ぶのではなく、縄跳びやボールをつかって遊んでいる。アンドアはカンポックリをバウワーゲンの中から持ってきて遊んでいるけどなかなかうまく乗れない。うまくいかなくて、よく転んだりしているけど「は～」と言いながら何度も何度も挑戦している。レオン①（4歳の男の子）はひとりでおしっこ。バウワーゲンの前の広場で子どもたちはお絵かきをしている。ヨハンナ（3歳の女の子）が鳥の歌を歌いだすと、みんな歌いだす。年長組みの子どもたちが作り終えてバウワーゲンから出てきた。マティアス（6歳の男の子）はあと4週間で幼稚園を卒園し、学校へ行ってしまう。でも、「まだ森の幼稚園にいたい。さみしい」と言っている。彼は、森の幼稚園の生活を心から楽しんでいるし、本当に大好きだ。

10:30 ヴァッシュシュトラッセ。ガビ先生が「私が一番！」と言って一番最初に並んでいる。レオンは笑っている。彼が水をかけてくれた。

10:45 バウワーゲンの前の広場に座って「いただきます」の歌をうたって食べ始める。リロ先生がお話を始める。

11:15 ほとんどの子が食べ終わり、再び隣の広場で遊び始めた。新しい子のユリオスはひとりですっと食べている。食べ終わるとみんなのところに行ってしまった。マティアスは近くの牛の見学をしている。そして、干草を加えてタバコを吸うマネをしている。レオンが、干草のロールの上に乗って「見てマリコ！」と私を呼んでくれた。レオンとヨハンナとマティアスが3人で私に攻撃してきた（笑）私は草の上に倒される。上を見上げると、空がきれいだ。青い空に面白い形の雲が浮かんでいる。森の幼稚園で初めて地面にねっころがって空を見上げた。とても新鮮だ。と思っていると、レオンが容赦なく乗ってきた。うおっ、お、重い……。しかもレオンの靴が私の頬に当たって、痛い……。「たすけて〜」と叫ぶと、マティアスが、「レオン、どいて」と言って助けて、私の頬も優しく撫でてくれた。マティアスは、ずっと観察していて、レオンの靴が私の頬に当たって痛いことも知っているのだ。いつまでも、「マリコ、大丈夫？」と心配してくれている。その後、ソフトボールでマティアスとヨハンナとレオンの3人とサッカーをする。いつの間にかバレーボールに変わっていた。

11:45 先生の集合がかかる。私はノートとペンをその辺において遊んでいたため、どこに置いたのか忘れてしまったけど、マティアスがいっしょに探してくれた。野原は広くて草が生えているからわかりにくい。パウワーゲンの隣の広場に集まり、今日はラーラの5歳の誕生日。リロ先生がつくった花の冠をかぶって、登場する。お誕生日おめでとうの歌をうたって、希望者がラーラにメッセージを言う。ラーラはなんだか照れている。その後、5回胴上げをして（5歳だから）誕生日会は終わり。

12:05 森を歩いて集合場所にもどる。

2004年6月29日（火）晴れ

先生：2人（リロ先生、ガビ先生）、子ども：12人（男10人、女2人）

09:00 到着。レオンがとっても笑顔で「おはよう、マリコ！」と挨拶してくれた。パウル（4歳の男の子）がやってきた。彼のお母さんのマリオンは「おはよう、マリコ、元気？夏だね。やっど、夏が来たわね！！」と笑っている。ヤンもやってきた。だけど、彼はお母さんと別れるのがいやだと言って泣いている。

09:05 今日は集合場所で輪になって歌をうたう。そして、希望者が何か自分の思っていることをみんなにお話する。その後、ヤンがさっと手をあげて、ド

イツ語で人数を数える。リロ先生が、誰か英語で数えてみて！と言うと、マティアスが得意気に英語で数え始める。次は、フランス語！とリロ先生が言う、誰も数え始めない。リロ先生は苦笑いしながら、自らフランス語で数える。マティアスが「今度は日本語だね」と言っている。リロ先生は、「そう、さあ、マリコに数えてもらいましょう」私が数え始めると、子どもたちは大きな目をもっと大きくして聞いてくれている。

09:20 年長組のマティアス、レア、マリオスの3人と他の子どもたちが別れて活動する。年長組の子どもたちは周りの植物を集めて学校へ行く時に持っていくものをつくっている。彼らは、もう、自分たちが集めた植物の名前を全部知っている。リロ先生が歩きながら、木を見上げて子どもたちに木の違いを語りかける。近くにいたマティアスに、彼の摘んでいた植物の名前を聞いたら、全部答えてくれた。そして、摘みかけの植物を、「これは、マリコにあげるよ」と言ってくれた。

マリオスは目にアレルギーを持っている。しかし、家の中にいるより、自然の中にいた方がいいと医者に言われ、彼のお母さんもそう考え、できるだけ外に出ようと心がけている。森の幼稚園に通っていて、少しよくなってきたという。

10:00 子どもたちはいつもの森のひとつの遊び場に到着、遊んでいる。何人かの子どもたちは、森を進んでいき、大きな大きな穴を発見した。戦争の時、爆撃であいた穴だ。大きな木が、その中に、いくつも横たわっている。たった一発の爆撃で、こんな大きな穴があくなんて、戦争の恐ろしさを感じる。「すごく大きな穴だね」と、先生も驚いている。

10:30 朝ごはんのため、パウワージェンの前の広場に行く。ラーラ（5歳の女の子）は、赤ちゃんの人形が入った小さなバギーを押してひとり遅れて到着。何人かの子どもたちは自分たちが植えた植物を観察している。少しぐらい遅れても、先生は何も言わない。

10:40 ヴァッシュシュトラッセ。最近、このグループでは、先生が水をかけるのではなく、子どもたちがかけるようになった。ガビ先生に、ペットボトルを持った子どもたちが3人もいっせいにかけているので、ガビ先生は「おう、おう」と驚いている。ヤン①は、私のペンを見て、「ボクもこれと同じの持ってるよ」と教えてくれた。同じグループのダーヴィッドは一週間の休暇をとって家族でベルリンとポツダムに旅行中。ベルリンから森の幼稚園のみんな

あてにハガキが届いた。鳥の巣のきれいな写真のハガキだ。ガビ先生が、子どもたちの前で読み上げる。子どもたちは大笑い。今日の朝食中は、みんなふざけて食べている。とてもうるさい。ガビ先生が本を読み始めると、みんな静かになる。絵本ではないお話だけだから、子どもたちは頭の中で想像する。マティアスは、「もっと読んで！もっと読んで！」と言っている。みんな真剣な表情だ。そして、気がついたところで、それぞれ意見を言っている。

11:05 朝ごはん終了。ヨハネスとヨエルは先生が読んでいた本を自分たちで見て、何か話し合っている。パウワーゲンの中ではマクシクロップの子どもたちが小さな機織をしている。これは、物事の仕組みを知るためのもの。ドイツの子どもたちは、小学校へ行く前にやらなくてはならない。幼稚園卒園前の子どもたちが、おぼつかない手つきで機を織っている。マティアスが、私の書いている字を見て、日本語を読むふりをしている。年長組以外の子どもたちは、さっきの森の遊び場で遊んでいる。ガビ先生は常に子どもたちの人数を数え、みんないるかどうか確認している。そして、子どもたちが木に結んで忘れていたヒモなどをとって片付けている。これも、動物が間違えて食べてしまわないようにする配慮だ。人間は、森の客であって、森の住民ではない。と、コニー先生も言っていたし、デンマークの森の幼稚園の先生も言っていた。

12:00 帰る準備。リロ先生を筆頭に、夏の歌を歌いながら帰る。

12:30 集合場所に到着。

2004年6月30日（水）晴れ

先生：2人（リロ先生、ガビ先生）

09:00 少し速く歩いていくと、森の入口で子どもたちは並んで歩いているところだった。「ハロー、マリコ！」と口々に言って、手を振ってくれている。年長組みと他のグループに分かれる。年長組みの子どもたちは、ゆっくり森を歩き、植物を観察し、名前を自然に覚えていく。「見て、聴いて、感じることはとても重要」そして、「私たち大人もいっしょに驚いたり考えたりすることが重要」これがリロ先生のコンセプトのひとつ。先生の中でもひとりひとりコンセプトが違う。年長組みの3人の子どもたちは、次々に、私に植物の名前を教えてくれる。時々、食べられる植物があると、「食べてみたら？甘いよ」とすすめてくれる。そして、子どもたちは、私が食べた後の反応をととても気

にしている。一通り、植物を集めてから、他の子どもたちがいるパウワージェンに向かう。途中でヤナ先生グループの子どもたちにも出会う。パウワージェンの隣の広場では、子どもたちが楽しそうに遊んでいる。ヨハネスがハチに刺された。リロ先生が嚴重に注意している。アンドアがやってきて、持っている木を見せてくれた。いつも見せてくれる。ヤナ先生グループの子どもたちが通りかかった。ユリオスとナータンは「ハロー、マリコ！」と声をかけてくれる。とてもうれしい。ガビ先生が、「かわいいわね」と言っている。子どもたちはナイフで木をけずったり、おしっこをしたり、木の枝を集めている。ヨハネス（4歳の男の子）はヨハンナ（3歳の女の子）にナイフの使い方を実践して教えてあげている。

10:05 ヴァッシュシュトラッセ。今日もみんな元気いっぱいふざけている。

10:15 今日はパウワージェンの中で朝ごはん。いつものように手をつないで「いただきます」の歌をうたう。お話をするおばさんがやってきて自分の書いた絵を見せながらお話している。

11:05 年長組みとその他の子どもに再び分かれる。年長組みはパウワージェンの中で作業。他の子どもたちは森の中で遊ぶ。

11:45 4月に植えたジャガイモを掘り出す。みんなうれしそう。レアが人数を数えて、ひとつのジャガイモを切っている。そして、その場で食べる。ヨジアは「おいしい！」と言って、満面の笑顔だ。他のみんなも満足顔。マリオスがもっと食べたいとわがままを言っていると、マティアスが「そんなこと言うなよ。ジャガイモはもうないんだから」と怒っている。

12:05 ジャガイモの歌をうたって、もと来た道を帰り始める。

12:30 集合場所に到着。

2004年7月1日（木）くもり

先生：リロ先生、子ども：5人（マティアス、レア、ザスキア、ユリアン、マリオス）

今日は年長組みの日。

09:20 到着すると、子どもたちは集合場所にすわりこんで何かやっている。植物

でカゴをつくっているようだ。2人ずつ組になって協力してつくっている。みんな集中しているから静かだ。カゴができあがったユリアンはひとりでブランコに乗って遊んでいる。作業がおわったマティアスも隣のブランコに乗っていっしょに遊んでいる。

09:50 リロ先生が「ゆっくり朝ごはんの準備をしましょうね」と言うと、マリオスは「イエーイ」と喜んでいる。男の子たちははしゃいで準備している。レアは最後まで先生とカゴを作っている。朝ごはんの準備をしている子どもたちに近づいていくと、ザスキアが「マリコ、ここあいているよ」と気を使ってくれている。

09:55 「いただきます」の歌を歌って食べ始める。食べながら、今まで歌った「いただきます」の歌を全部歌っている。全部で5~6曲あるらしい。と、ノートに書いていると、ザスキアが、「それ日本語を書いているの？」マリオスは「全部で朝ごはんのうたは5~6曲ありますってかいてるの？」と聞いてきた。勘が鋭いなあ。小さなクモがザスキアの手の上に乗っている。彼女は、少し驚いていたけど、恐れない。でも、追い払おうとしている。「クモはどこだ？」「あっち、あっち」「殺さないようにどけなくちゃね」と言いながらみんな、追いやっている。そのうち、「あ、クモがザスキアの肩にのってるよ」「マリコの頭に・・・」とジョークを言いだし、とても楽しくなる。

10:15 朝食終了。これから町へ出かける。道路を渡る時は、「自分で気をつけて渡りなさい」とリロ先生に言われて、子どもたちは慎重に右見て左見て渡りはじめる。

10:30 公園に到着。芝刈り機に乗って芝を刈っているおじさんと挨拶する。しばらく公園で遊んだ後、住宅地を歩いていく。交通ルールのお勉強をしながら。そして、自然に、家の前に咲いている花や植物などに目がいくようになる。途中、ユリアンとマリオスのおじいちゃんとおばあちゃんの家の前を通りかかった。少し立ち寄る。おじいちゃんとおばあちゃんは、よく来た、よく来た。というかんじだ。ユリアンが、「マリコは日本人なんだよ」と紹介してくれた。おじいちゃんは、「ほー、ユリアンも日本語話せるのかい？」と言って、ユリアンや、他の子どもたちは、得意気に「うん、話せるよ。キ！（木）ヤマ！（山）」と連発し始めた。「マリコも少しドイツ語を話せるんだよ」と説明している。

11:05 “Haus der Nature” に到着。自然館みたいなところだ。川の流れの元を探る模型があり、子どもたちは面白そうに観察している。でも、やっぱり本物の方がいい。という感じ。動物の模型を見て、このキツネはどこに住んでいて、どこの国から来たのか、何を食べるのか、など子どもたちは、それぞれの動物についてよく知っている。マティアスに聞いたら、全部教えてくれた。館の外にある年輪 200 年の木の丸太を見て、「200 年だよ、200 年!!!」と驚いている。

11:30 ガラス博物館にも立ち寄る。マティアスは、ヒマワリの造花を見つけた。香りをかいで、「ウソものだ」と言ってむこうへ行ってしまった。

11:45 町を歩き、アイスクリームを買う。子どもたちは、自分がほしいアイスを買った店員さんに自分で注文している。これも社会のお勉強だ。図書館の前の広場のベンチに座って食べる。ここは、リンデンの木が 2 本あるから、「リンデンプラッツ」と呼ばれているらしい。リンデンバウムや他の話をしながら、食べている。

12:10 町の中を歩いて、集合場所に帰る。

12:30 集合場所に到着。

2004 年 7 月 2 日 (金) くもり

先生 2 人、子ども 10 人 (男 9、女 1) 保護者 1 人

今日は、ハチの巣箱の見学。約 4 キロの道のりを歩いていく。そして、午後 3 時まで滞在する予定だ。だけど、私は午後に用事があるので、12 時半には帰らなくては行けない。とりあえず、同行した。

今日は、ひとりの保護者、パウルのお母さんも来ている。どうして来ているのか聞いてみたら、今日は、天気もいいし、来たかったから。ただ、それだけ。時々、いっしょに同行するのだという。

08:50 到着。砂場で遊んでいたマティアスとヤンが「おはよう、マリコ!」と言ってとびついてきた。そして、たくさんお話してくれる。

09:00 集合場所で輪になって朝の歌を歌う。マティアスが人数を数えてからリロ先生が、「誰かみんなに語りたい、伝えたい人は、何でも話していいですよ」

と言うと、ぱぱっと手があがる。伝えたい人がいっぱい、時間がないから、途中で先生がとめていた。2人ずつ手をつないで歩き出す。マリオスが「みんないる？」と言って確認している。みんなは、口をそろえて「いるよ！」と言っている。アンドア（3歳の男の子）とガビ先生が私の前を歩いている。私が近づいていくと、ガビ先生が気づいて「マリコが来たよ」とアンドアに知らせている。アンドアは「マリコはボクの友だちなんだ」とガビ先生に言っていたとガビ先生があとでこっそり教えてくれた。とてもうれしい。道に木の実が落ちている。マティアスが発見し、興味を持った子どもたちが近寄っていく。「鳥が食べたのかな？」と子どもたちは木の実を囲んで考え込む。そして、また議論になる。次々と手が挙がり、みんな自分の意見を言っている。結論は、「たぶん、木の実を食べた鳥のうんちだ」ということになった。

10:00 草がぼうぼう生えている広場に子どもたちはジャンプ！ダイブ！ふかふかの草の上だから、全然痛くない。何度もくり返して、とても楽しそう。「マリコ！見て！行くよ！」と、子どもたちはうれしそうにダイブしている。たくさん歩いたので、途中で道端に座って飲み物を飲む。また石を拾っている子どももいるし、大声をあげて叫んでいる子もいる。大声をあげても、外だから全然うるさくない。そして、また出発。しばらくして、「まわりにいる動物たちが寝ているかもしれないから静かにー」と何人かの子どもが、他の子どもたちに注意している。遠い道のりでも、子どもたちはいろんなものを発見しながら歩いていく。パウルはコガネムシの死骸を持って観察している。途中、ランニングしている人や、散歩しているおじさん、犬を連れているおじいさんなどに会い、挨拶を交わす。今日はいつもと違う道だから、また違った発見がある。

11:20 ヴァッシュシュトラーセ。朝食を食べる適当な場所が見つからなくて遅くなってしまった。子どもたちは、(先生も)少し歩きつかれた様子。そして、おなかもすいている。切り株の上にお弁当をのせて「いただきます」の歌を歌って食べ始める。

11:50 食べ終わり、子どもたちは自由に遊び始める。

12:00 その場で輪になって何曲か歌を歌う。パウルが私のところに来て、記録ノートに何か書きたいと言っている。そして、小さな小さなかわいい字で“PAUL”と書いてくれた。書き終わると、笑顔でどこかへ行ってしまった。しばらくして、パウルは木の実を耳にぶら下げて、「みんな見て！イヤリングだよ」と

言ってみんなを笑わせている。

12:30 目的地に到着。はぁ、疲れた。これからがハチの巣箱を見るのに、私はもう帰らなくてはいけない。みんなにあいさつをして、帰ってきた。

2004年7月5日(月) 曇り

先生:2人(リロ先生、ガビ先生) 子ども16人(男12人、女4人)

08:55 集合場所に到着。自転車を置いてみんなのところに行くと、マティアス、ヨハネス、レオンが「おはよう、マリコ!!」と言ってとびついてきた。

09:00 集合場所で輪になり、朝の歌を歌う。そして、何人かの手がささっと挙がる。マティアスは、「ラーラが一番早かったよ」と言っている。一番早く手を挙げた子が今日の人数を数える。そして、2人1組になって手をつないで歩き出す。

09:15 スポーツ広場建設の工事現場前あたりで、年長組みグループと他の子どもたちが別れる。年長組みの3人は、卒園のための植物をリロ先生といっしょに集める。やっぱり、彼らは、自分の集めた植物の名前をすべて知っている。マティアス、レアはもう10本集めたけど、マリオスはまだだ。リロ先生はマリオスが摘み終わるまで待っている。レアとマティアスは先に進む。途中で車がきた。リロ先生がレアとマティアスのほうを見て注意しようとしたが、2人とも自分たちで気をつけて、危なくないように横によっている。彼らは、もう、自分で気をつけることができるようになった。これで、小学校へ行っても大丈夫だ。リロ先生は笑顔で見守っている。

09:40 他のみんながいるひとつの遊び場に到着。アンドアが近づいてきて話しかけてくる。私に対応すると、私のドイツ語の発音を直される(泣)アンドア(3歳の男の子)はその辺の木の枝を持ってきて、どれくらいの太さまで自分の力で折ることができるか試し始めた。初めは、手で折っていたが、だんだん太くなってくると、足で枝を地面に固定して折っている。もうこれ以上折れないことがわると、ひとつため息をつき、「はぁ、疲れた」というかんで向こうへ行ってしまった。ジョギングをしている人がよく通りかかる。女の子たちは、本当に赤ちゃんが好きだ。森の中まで小さなバギーを持ってきている。ヤンはダーヴィッドと協力してテントを作り始めた。形の違う木の枝を組み合わせて、うまく作っていくにも頭を使う。「ここが入口でこうやって

中に入るんだ」とヤンが説明してくれた。ヨジアがかなり高い枝の上に登っている。まるでサルだ（笑）リロ先生も面白がっている。毎朝毎朝、眠くて、気持ちが沈んでいるから幼稚園に行きたくないと思うけど、子どもたちや先生に会うと、今日も来てよかったと思う。私は、いつも子どもたちに楽しませてもらっている。

- 10:20 ヴァッシュシュトラーセ。今日も子どもたちが担当して水をかけていく。
- 10:30 ひとつの大きな木を囲んで輪になって座る。リロ先生が「誰かお話したいことがあれば、どうぞ」と言うと、次々に手があがる。一生懸命に手を挙げているヨハンナがかわいい。
- 10:40 「いただきます」の歌を歌って食べ始める。金曜日に見学に行ったハチの話や、日曜日に何をしたかなど、楽しそうにお話しながら食べている。空が暗くなってきた。みんな、「ああ、空が暗くなってきたね」と言いながら、フツーに食べている。とうとう雨が降ってきた。隣に座っているアンドアは、「雨だね」と笑顔で言っている。みんな急いでジャケットを着る。私は今日はジャケットを持ってきていない。「マリコはジャケット持っていないの？じゃ、この木の下にすればいいよ。ここは雨がかからないから」とマティアスは私のことを気にかけてくれている。
- 11:00 雨がやんだ。ごはんも食べ終わり、遊びながら移動する。青空も広がってきた。そして太陽も。
- 11:05 バウワーゲンの隣の広場に到着。子どもたちは自分たちが植えた植物の観察を忘れない。先生に言われなくても、自分たちで観察しに行く。
- 11:15 広場にまるくなって座る。リロ先生がさっき拾った赤い木の実を切ってひとりずつに配る。子どもたちはおいしそうにうれしそうに食べている。リロ先生は、この木の実の名前と、どのようにとったのか、など子どもたちに伝える。こうやって、どの実が食べられるのか、子どもたちは覚えていく。その後、鳥の歌をみんなで歌う。歌い終わった子どもから森に行って自由に遊ぶ。マリオスがレアのバギーを押している。別にウケ狙いでもなんでもなく、フツーに押しているから、かなりウケる（笑）ヤンとマティアスは平べったい木の板を見つけて横たわっている木の上においてシーソーみたいにして遊んでいる。レオン、アンドア、ヨエルは順番に木に登っている。少し離れた

向こうの木にもマティアス、ヨハネス、ヨジアが木に登っている。さっきまでシーソー代わりにしていた木の板を今度は木に立てかけてはしご代わりにし始めた。

12:15 帰りの準備。帰り道は、いつものごとく、2人ずつ手をつないで、何曲もの歌を歌いながら楽しく帰る。

12:30 集合場所に到着。まるくなって終わりの歌を歌い、終了。

2004年7月6日(火) 晴れ

先生:2人 子ども14人(男11人、女3人)

09:00 集合場所に到着。いつも通りかかる犬の散歩をしているおじさんとおばさんが「今日はちょっと遅いわね。もうみんな行っちゃったわよ。向こうの方に」と笑われる。歩いていくと、テニスコートの近くの広場で大きなリンデンバウムの木の観察をしている。子どもたちはその花をはさみで切り取り、リロ先生が持っているかごに入れる。ヤン①は自分で持ってきた双眼鏡をヨジアといっしょにのぞいている。今日はとても暖かく、さわやかな日だ。とても気持ちがいい。

09:25 花を摘み終わり、一列に並んで出発。人数が多いので、リロ先生グループとガビ先生グループの2つに分かれて少し離れたところで遊ぶ。「人数が多すぎるとおもいきり走り回ることができないからストレスがたまってしまう」とリロ先生は言う。ダーヴィッドは木陰でおしっこ。他の子どもたちは警察と泥棒ごっこをして、大声をあげて走り回っている。ラーラ(5歳の女の子)が「鳥の赤ちゃんを見つけたから見に来て、マリコ!でも死んでるけど」と呼びに来てくれた。その鳥の赤ちゃんは、まだ卵に入っていて、少し殻が割れている。子どもたちは、興味津々に観察している。

10:00 バウワーゲンに向かって歩き始める。森の小道を歩いているとき、マティアスが鳥の羽を拾って私にくれた。「これは、鳥の胸の部分の羽なんだ」とマティアスが言っている。「おしりの羽じゃないの?」と私がきくと、「この羽は短いし、柔らかいから胸なんだ」と教えてくれる。近くにいたパウル(4歳の男の子)もそう言っている。

10:10 バウワーゲンに到着し、ヴァッシュシュトラーセ。

10 : 15 バウワーゲンの隣の広場に座る。今日は火曜日だから、お話をするおばさんが犬を連れて来ている。「いただきます」の歌を歌っている最中に、マティアスとヨジアが飛行船を発見した。みんなに知らせている。青い空に真っ白な飛行船が浮かんでいる。見えなくなった。しばらくして雲から出てきた。「速いねえ」「雲の中は何も見えないのかなあ？」「きっと真っ白だよ」と子どもたちが言い合っている。飛行船が見えなくなるまで、子どもたちは見守っている。それから、お話のおばあさんが、先週のお話の続きを読み始める。

10 : 45 お話が終わり、みんなで「ありがとう」の歌を歌う。おばあさんは、帰っていった。その後、みんなで何曲か歌を歌う。歌い終わった子どもたちは、植物に水をやったり、観察したりしている。きのう、初めて歌った歌を子どもたちは覚えている。歌う順番を待っている子どもたちも静かに聞いている。「歌を歌うと、楽しくなるし、ストレス発散になる。特に冬の寒い日や雨の日は歌を歌うと、その厳しさから少し解放される。ただ、歌を歌うだけではなく、その歌詞を理解することも大切」とリロ先生は言う。そして、「植物を集める時も、「ああ、きれいだ」と思って採るのもいいけど、一つずつの名前を覚えていくことも重要。それによって、一つの植物の存在を認め、大切にできるようになる」と教えてくれた。

12 : 00 帰り始める。歌を歌いながら帰る。なごやかで楽しいひと時だ。

12 : 30 集合場所に到着。輪になって終わりの歌を歌って終了。

2004年7月7日（水）

先生：2人、子ども：13人（男9人、女4人）

09 : 20 森へ出発。レアやマティアスは新しい子にとっても親切だ。やさしく、「おいで、おいで」と呼び寄せている。大きい子は小さい子にとっても優しい。そして、言葉がわからなくてもいじめたりしないし、一人で遊んでいても変だとは思わない。

09 : 40 森の入口で輪になって歌を歌う。そして、誰か友だちの特徴を言ってそれは誰か当てるゲーム。

09 : 55 バウワーゲンに到着。先生が来るまで待っている。待っている間、その辺

の木の枝を振り回したり、地面に倒れて死んだマネをしている子どももいる
(笑) また、ジョギングして通りかかるおにいさんとお話している子どもも
いる。

10:00 先生が到着し、ヴァッシュシュトラッセ。パウワーゲンの隣の広場に座る。
「いただきます」の歌を歌って食べ始める。パブリカやニンジンを食べている
子どももいる。食べている時に、子どもたちは、おどけて楽しませてくれる。

10:40 ごはん終了。リロ先生が紙芝居？を読み始めた。鳥のお話だ。子どもたちは
次々に自分の気づいたこと、意見を自由に話している。

10:50 自由に遊び始める。マティアスは次から次へと面白い遊びを思いついて実行
しているし、アンドアは、この前やっていたカンポックリに再挑戦。今日
はうまくいっている。ダーヴィッドはパウワーゲンから絵本を持ってきてひ
とりで見ている。”Auf den Bauernhof” という絵本で、動物がたくさんでて
くる絵本だ。そして、牛やニワトリ、ブタやヒツジ、ネコ、イヌなど、出て
くる動物を指さしてその動物の鳴き声をマネしている。絵本を何度も読んで
泣き声を繰り返している。私が近くで彼を観察していると、ダーヴィッドは
私の隣に座り、絵本を見せながら動物の鳴き声をひとつひとつ教えてくれた。
そして、「この絵本は面白いからひとりで読んだらいいよ」と貸してくれた。
パウワーゲンの中では数人の子どもたちがアンナ先生といっしょに工作をし
ている。鳥の絵を描いて切って、ボンドで貼って植物で鳥の巣を作ってそれ
も貼って卵もつくったり鳥の羽をつくってくっつけたりして、それぞれ、オ
リジナルの芸術作品をつくりあげていく。みんな本物を見たことがあるから、
特徴をよくおさえている！

11:50 帰る準備。パウワーゲンから出したイスも、自分たちで片付ける。今日は
パウワーゲンの前で手をつないでまるくなり、終わりの歌を歌う。森の中は
自由に帰り、森の入口から集合場所までの道路は2人ずつ手をつないで歩いて
いく。

12:30 集合場所に到着。解散。

2004年7月8日(木) くもり時々雨

先生:2人 子ども10人(男7人、女3人)

今日はメアツバッハ（ラインバッハの隣町）へ行く。

09:00 野原で輪になって朝の歌をうたう。それから、みんなのリュックサックを並べて、頭に物をのせてリュックサックの間をジグザグに通るゲームをする。2つのチームにわかれて競争だ。ひとしきり盛り上がったあと、先生がマクドナルドでもらったという風船を膨らまして遊ぶ。

09:40 年長組みの3人は小学校へ。他の子どもたちはそのまま野原で遊ぶ。風船で遊んでいる子どもや、チョークで地面に絵を描いている子、フリスビーをする子もいる。馬をつれた2人の夫婦が通りかかった。馬は風船を嫌がるらしい。子どもたちは馬が見えなくなるまで風船では遊ばないで見守っていた。ここで、馬は風船が嫌いだということを子どもたちは学んだ。

10:30 ヴァッシュシュトラッセ。そして、野原に輪になって座って「いただきます」の歌を歌う。食べ始める。食べている時に、子どもたちにインタビューしてみた。

大きくなったら、何になりたい？

ヨハネス（4歳の男の子） 工事現場のおじさん。

いつも森に行く途中、スポーツ広場建設現場の前を通りかかる。毎日そこで働くおじさんたちを見ているから、あこがれているらしい。

ヨエル（4歳の男の子） ダイバー

海にもぐって、いろんなものを見つきたい。

パウル（4歳の男の子） 警察官

ピストルごっこが大好きで、警察官になれば、本物のピストルを持つことができるから。

ヤン（5歳の男の子） 考古学者

古い遺跡を見つかったり、骨を見つけるのは、とっても興味深く、面白いから。

ヨハンナ（4歳の女の子） 農婦

動物が大好きだから、ヒツジや馬やブタを飼いたい。

ヨジア（5歳の男の子） Förster かダイバー

いつも行く森や自然が大好きで、守りたいと思うから。ダイバーは面白そうだから。

レオン（4歳の男の子） 消防士。サイレンを鳴らして消防車を運転したい。カッコいい。

レア（6歳の女の子） 医者

お母さんが看護師だし、病気を治してあげたいから。

マティアス（6歳の男の子） Förster

自然や森や動物が大好きで、毎日行っている森やそこに住んでいる動物たちを守りたいから。

ザスキア（6歳の女の子） まだわからない

10:50 ガビ先生が絵本を読み始めた。みんな集中して聞いている。でも、雨も降ってきた。みんなあまり気にしない。

11:30 小学校の前に移動して、年長組みの子どもたちと合流する。そして、少し小学校の遊具で遊ぶ。

11:50 みんなでさっきの野原に行く。そして、今日はヨハンナの4歳のお誕生日会。リロ先生がつくった花の冠をかぶり、みんなでお祝いする。誕生日の歌を歌って、ひとりずつヨハンナにメッセージを言っていく。そして、4回胴上げをして、誕生日会は終わり。

12:30 お迎えがちらほらとやってきた。

今日でマクシクロップの日は終わる。だから今日の午後6時から10時までマクシクロップの子どもたちとリロ先生とヤナ先生が、小さなパーティーをする。

先生：2人 リロ先生、ヤナ先生、

子ども：5人 マティアス、レア、ザスキア、ユリアン、マリオス

17:50 リロ先生が車で迎えに来てくれた。メアツバッハの森まで乗せて行ってもらおう。朝と違って、夕方からは本当によく晴れている。「きれいな空ね」とリロ先生は車を運転しながら満面の笑みを浮かべている。本当にきれいな空だ。

18:00 今朝も行ったメアツバッハの森の入口に到着。もう、年長組みの子どもたちは到着している。マティアスとレアが「あ〜、マリコも来た！！」と叫んでいる。送りに来たお母さんたちと別れて子どもたちと先生は森の中へ進む。麦畑の前を通った時、ザスキアが麦をとって食べるように勧めてくれた。「おながすいたとき、こうやって食べるの。おいしいよ」と言っている。私は、生の麦を食べたのは初めて。ぼそぼそするけど、噛んでいると味が出てくる。麦畑を見たのも初めてだ。金色の景色が一面に広がる。夕日が照りつけて、さらにまぶしい。この雄大な景色には感動した。麦畑の横には牧場があって、何頭かの牛が草を食べている。子どもたちは麦畑の中に入って探検している。麦の穂が大きくて、子どもたちが見えない（笑）先生に呼ばれて、再び森の中へ進む。先生が植物や、今まで幼稚園でやってきたことを問題に出しながら森の中を歩いていく。子どもたちは楽しそうに問題に答えている。大きな大きな切り株や、熱を冷ます時に使うといい冷たい葉っぱなどを見つけていく。みんなでふざけながら歩く時もあるけど、時々、ひとりで空を眺めたり、木を眺めたりしている、何を感じ、何を考えているのだろうか？道に咲いている花を集めながら歩いたり、森の中の道なき道を歩く。小さな探検隊だ。天気も最高にいいし、わくわくしてくる。しばらく歩いていると、マリオスがよくいたずらしにくる。おもいきりぶつかってきたり、ちょっかいをだしたりしてくる。「やめて」と言っても聞いてくれない。それを見ていたレアとザスキアは、「もっと強く言ってもいいよ」と言う。すると、マリオスは大きな枝を持ってきて今度はレアにいたずらしてきた。でも、その木の枝を立てると、シャワーみたいな形だったので、レアは、想像力がすぐに働き、シャワーごっこをはじめた。マリオスは嫌がらせようと思ってやったのに、レアは楽しんでいる。

19:30 リロ先生が子どもたちを野原に集めてクイズの続きをしている。その間にヤナ先生は近くの草むらに、プレゼントが入った箱を隠す。ヤナ先生が戻ってきて、しばらく歩く。そして、プレゼント付近で立ち止まって、ヤナ先生が問題を出す。そして、子どもたちは、箱を見つけて、そのきらきら光る箱を開けると、おもちゃや文房具が入っていた。みんなうれしそうだ。

19:50 麦畑を通り過ぎ、森の中を歩き、道のない草原を横切り、野原を歩いてきたら、住宅街にたどりついた。大きな民家が立ち並ぶ道を歩いている途中でも、子どもたちは、庭に咲いている植物を眺めたり、野良猫と遭遇したら、かまったり、いつも楽しそうだ。目がきらきらしている。町の中の小さな教

会の前を通る。子どもたちは、窓から中をのぞいている。

20:50 マティアスの家に到着。これからバーベキューをする。マティアスの家の庭には、大きな桜の木があり、サクランボがたくさんなっている。マティアスが、庭のことを全部教えてくれた。なんと、庭には、小さな隠れ家もあるのだ。

21:30 お母さんたちが迎えに来た。ザスキアのお父さんや妹も来ている。そして、しばらく、大人たちも会話をする。やっと暗くなってきた。子どもたちは、土を掘って虫眼鏡で土や穴や虫を観察したり、隠れ家に入ったり、それぞれに遊んでいる。

22:40 すっかり暗くなったので、そろそろ家に帰る。

2004年7月19日(月) 晴れ

先生:3人、子ども:14人(男11人、女3人)

09:20 ユリオス(3歳の男の子)が切り株に座ってみて、「とってもいいイスだ」と喜んでいる。その後、ユリオスとシーラスは何か話し合いながら木の枝を折っている。ユリオス、ナータン、シーラスが貝殻をルーペで観察している。話し合っているし。モーリッツが土でスノーマンをつくって、「見て！スノーマンを作ったんだよ」と見せに来てくれた。ヤスパーは相変わらず木の枝を持ってピストルごっこをしている。風が吹いてきた。昨日降った雨水が木に残っていて、それが滴り落ちてきた。その音を聞いてナータンは目を丸くしている。「雨？雨だー！」シーラスは「違うよ、こんなに晴れてるもん」と言っている。ユリオスが、「ボクがお父さんね。」と言うと、ナータンが「じゃ、ボクがお母さん。」シーラスは「ボクがお客さんだ」と言って、男の子3人が、たちまちまごつとを始める。今日は再びブレイメンの音楽隊の劇をする。一部の子どもたちが先生といっしょに練習している。他の子どもたちはそれぞれに遊んでいる。これをしなさい、とか、あれをしなさいなどと強制したりはしない。

10:10 ヴァッシュシュトラセ。今日は暑いので、みんなきゃっきや言いながら並んでいる。「いただきます」の歌を歌って食べ始める。暑くなってきたので、ジャケットを脱いでいる。ユリオスがマーマレードのジャムがついた手をぶらぶらさせている。でも、もう水がない。そのへんの草で手を拭いている。

- 10:35 食べ終わり、自由に遊んでいる。ヨハネスは木の枝に土を丸めたものをくっつけてピストルごっこをしている。他の何人かは、サイレンを口でならして消防車ごっこ。大声をあげて走り回っている。
- 11:10 リロ先生のグループが来て劇の始まり。聞いている子どもたちは静かに聞いている。そして、終わったら、とっても大きな拍手を贈っている。
- 11:50 片付けて帰り始める。帰り道、水溜りを見つけてばちやばちや遊んでいる。モーリッツが私にカスターニアンの実を割って中身を見せて説明してくれた。彼らは何でも知っている。
- 12:25 集合場所に到着。輪になって3曲ほど歌を歌う。そして、終了。

2004年7月20日(火)雨

朝から雨だ……。ああ、憂鬱……。

- 08:50 違う集合場所に到着。子どもたちはもうすでに遊んでいる。ごみ収集のお兄さんがやってきてゴミを集めながら子どもたちを見て微笑んでいる。子どもたちは水と土が大好き。いつも水と土で遊んでいる。土をスコップで掘って集めたり、水を汲んできてばちやばちやったり……。
- 10:00 ヴァッシュシュトラーセ。
- 10:15 公園の中の屋根があるところで朝ごはん。みんなおいしそうに食べている。去年、森の幼稚園を卒園した子どもが2人きていた。彼らは優秀で、2人とも飛び級したらしい。彼らの両親は、子どもには新鮮な空気とファンタジーを引き出すことが必要で、おもちゃなしで外で遊ばせることはとても重要だと考えているようだ。ヨハネスがナータンの自転車に乗ってやってきた。新聞配達のふりをして「新聞！新聞！」と配るマネをしている。ザスキアとジーナが新聞を受け取って、「マリコ、新聞！」と言っている。私が「どこ？」と言うと、笑いながら「これ！」と言って新聞を広げて読むフリをしている。
- 11:15 子どもたちのお父さんやお母さんがやってきた。これからこの公園でもう一度劇をする。ブレーメンの音楽隊だ。雨が降っていたけど、成功した。その後、感謝会。今年卒園するザスキアとユリアン、そして、先生とお別れと

感謝の挨拶をする。

2004年7月21日（水）晴れ

先生：2人、 子ども：13人

09：00 到着すると、子どもたちは前にバウワーゲンがあった場所に向かって歩いている。バウワーゲンを動かしたのは、道のりが少し遠くて小さい子は疲れるし、小学生や中学生の子どもたちがスプレーで落書きしたりいたずらするからという理由からだ。みんなは私に気づいて「ハロー、マリコ！」といったものように手を振ってくれている。今日はとても暖かい。そして天気も良く、朝露にぬれた植物がとてもきれいだ。子どもたちも毎日見ている景色なのに感動している。少し散歩して違う小道を通ってもう一つの遊び場へ。子どもたちはロープを木に結びつけてブランコしたり、木登りしたり、土を掘っている。ピストルごっこの続きをしたり、かっこいいピストルの開発をしている子どももいる。弓矢作りにハマっている子もいる。グループで遊んでいる子もいれば、一人で石集めに熱中している子どももいる。

10：35 ヴァッシュシュトラッセ。朝ごはん。

11：15 再び、森で遊び始める。

12：00 集合場所に帰る準備。

12：30 集合場所に到着。

2004年7月22日（木）晴れ

先生：2人、子ども：13人（男10人、女3人）

09：00 到着。誰もいない……。いつも犬の散歩をしているおばさんが、「もうみんな行っちゃったわよ」と方向を教えてくれた。

09：10 森の入口で輪になって朝の歌をうたい、子どもたちが人数を数える。ひとり数え間違えた。次は違う子が数えなおす。また、ある子は逆の数字から数える。森を歩き始めた。ヤンが黒いカタツムリを見つけて「おお！」と驚きの表情。他の子どもたちをよんで、報告している。「見て、黒いカタツムリだよ。踏まないように気をつけてね」と言っている。ナータン（4歳の男の子）

が大きな木を足で蹴っている。それを見たユリオス（3歳の男の子）が「やめてよ！木がかawaiiそうだ」と言って本気で怒っている。

09：35 輪になって目をつぶり、ヤナ先生がひとりひとりの手の平にマツボックリやマッチ箱などを置いていく。そして、子どもたちは見ないで手の感触だけでそれがどんな形でどんな感触なのかみんなに語り、当てる。その後、池に向かって歩き出した。カタツムリを見つけて観察したり、ピストルごっこをして騒いでいたのに、突然静かになった。「動物たちが寝ているかもしれないから静かに歩かなくちゃ」と口々に言っている。

09：55 池のとなりでヴァッシュシュトラセ。今日は小学校もお休みだから、何人か卒園生が来ている。「いただきます」の歌を歌った直後、ユリアンがわざとゲップした。ヤナ先生が「ユリアン！むこうでひとりで食べなさい」と怒っている。すると、本当にむこうでひとりで食べ始めた。

10：15 朝ごはん終了。みんな靴と靴下を脱ぎ始めた。ヨハネスはパンツいっちょうだ（笑）近くの川で魚とり開始。今日は虫取り網を何本か持ってきているので、それを活用。ユリアンは紙で船を折って浮かべている。パウラはパンツも脱ぎだした。アンナ先生が折り紙を折っている。船や飛行機。ヨハネスも折り紙を折りたいと言ってアンナ先生から紙をもらっている。でも折る場所がない。あたりを見回して、切り株を見つけると、そこに走って行って折り始めた。この前折ったとおりに折ってみる。全部ひとりでできたぞ。レナードは虫眼鏡の中に石を入れて観察している。ヨハネスも小さな魚を入れて観察している。遊び終わった後はちゃんと袋に紙飛行機や船を入れて持って帰る。ユリアンとラッセルは、協力して船を川のトンネルをくぐらせようとがんばっている。ナータンは鳥の羽根を見つけては拾ってリュックサックに入れている。

11：15 着替え。子どもたちはできるところはひとりでがんばっている。パンツもぬれてしまった子は新しいパンツに着替えている。いつ、どんなことが起きるかわからないから、子どもたちはいつも着替えをリュックサックに入れて持参している。着替え終わったラッセルは大きな木に抱きついて「お母さんみたいだ」とひとり言を言っている。ボラバーゲンを引きながら集合場所に向かう。ラッセルは石をピストルに見立てて遊んでいる。木の枝でも、石でも、そこらにあるものは何でもピストルになる。私が彼に「重い？」と聞くと、持たせてくれた。自分で感じてみたら？ということらしい。ユリオス

とナータンは、誰か知らない人が捨てたゴミを拾っている。

12:15 集合場所に到着。少し時間があるので、みんなでゲームをして、終わりの歌をうたって、終了。

2004年7月23日(金) くもり 晴れ 雨

今日は幼稚園最後の日。明日から夏休みだ。最後の日は、いつもの森ではなくて、公園に集合する。

09:00 ナータン(4歳の男の子)は水を流して、その水の流れ方を観察している。すると、レナード(5歳の男の子)やヤン(4歳の男の子)もやってきて、いっしょに水を流している。ヨハネス(3歳の男の子)は水溜りに石を投げて、どれくらいの大きさの石を投げると水がどんな反応をするか試している。

10:15 ヴァッシュシュトラッセ。今日は、とても暑いので誰かが、髪の毛も洗う！と言い出した。普通は手に水をかけて洗うだけだが、頭にも水をかけて涼んでいる。

10:35 食べ始める

11:00 食べ終わる。そしてまた自由に遊ぶ。

11:15 雨が降りそうだ。こっちはすごく晴れているのに、むこうはすごく黒い雲がある。夕立らしき雨が、一雨きそうだと先生たちは判断して、子どもたちに急いで靴をはかせる。そして、近くのナータンの家に避難。到着直後に雨が降ってきた。輪になって今日、午前中に何をして遊んだか語りた子どもが語る。そして、また目をつぶってコニー先生が石やスプーンをまわして子どもたちがそれが何かを当てるゲームをはじめる。

12:10 晴れてきたのでナータンの家の庭で遊ぶ。家の中で遊びたい子どもは中で絵本を見たりしている。

12:25 保護者がちらほらと迎えに来た。